
ちび王様と自衛官な私

タナカハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちび王様と自衛官な私

【Nコード】

N9082W

【作者名】

タナカハナ

【あらすじ】

7夜8日ってわかるかな。ななやようか。W杯の日本代表応援団もびっくりなこの所行、自衛隊では至って普通に行われるお仕事の一貫である。そんな地獄のような訓練に明け暮れた最終日。富士の麓で迎えた敵陣地への突撃を頑張ってみたら、なにここ富士○ハイランド？という具合に異世界トリップ。そこで出会ったチビ王様と自衛官な私、いまむらうらば今村末葉が紡ぐ、シリアスだったり気が抜けてたりする異世界物語。 ●団体名・役職名等、実際にあるものをモデルにしていますが、もちろん現実のものとお話のものとは全く関係

はありません。

●大体週一更新となります

富士の麓には野生動物と飢えた自衛官しかない（前書き）

団体名・役職名等、実際にあるものをモデルにしていますが、もちろん現実のものとお話のものとは全く関係はありません。

富士の麓には野生動物と飢えた自衛官しかない

7夜8日ってわかるかな。ななやようか。

まかり間違っても7泊8日じゃない、あくまでも7“夜”8日。

たまの休みに娑婆の友人たちにそう訊いてみれば、みんな一様に「なんのこと？ 旅行？」と逆に聞き返される始末。

そうか、そうだよ、旅行だったら楽しいよね……。

だがしかし、「7夜8日」という単語は例えば「7日間オールで8日目まで遊ぶぜー！」とかそんなクソ羨ましいような楽しい行事では決してない。

7日間ほとんど眠ることなく8日目まで活動し続ける、というのが7夜8日の意味である。

そしてその真っ最中にいるのがこの私、いまむらうらばりくしちよう今村末葉陸士長なのであった。

「今村！ ぼけつとすんな！」

「すみません！」

怒る方も怒られる方もすでに瞳は茫洋とし、死んだ魚の如くなっている。

そりゃあ仕事とはいえ、夏でも寒い富士の麓で食うものも食えずに草むらで泥にまみれていれば、最低一度は人生ってものを片足つつこんでよくよく考え直したくなるっていうものだ。

7日目の朝ともなれば、曹長そうちようのポケットマネーから出たあんパンひとつでもめちゃうちゃうまい。なんていうか、もう天上の食べ物。世の中にこんなうまいものがあったのかと泣けるほどだ。昨日まで飲んでいた虫入りみそ汁なんて目じゃない。あいつら暖かさに釣ら

れて飛び込んでくるからどうしようもない。

本当、人間お腹が空くとんでも美味しく食べられるって本当だよね……。

数年前まで「虫虫虫ー!!」なんて騒いで逃げ回っていた自分が懐かしい。ていうか、あの頃の乙女な私カムバック。

今やみそ汁に虫が浮いていようが、ご飯の中でもがいてようが、ちよつと払ったり見なかったことにしてそのままいけてしまう自分が怖い。

誰に言うでもなく言い訳させてもらえれば、「食わないと動けない」、この一点に尽きるのだ。

だからって、「動けないなら休んでいなさい」なんて言ってくれるほどこの職場は甘くない。まあ、仕事なんだからどこの職場でも似たようなものかもしれないけれど。

つまり、食べられなくて動けないけれど動かないといけない。

辛い。それは果てしなく辛い。

新隊員の頃はそんな可愛さもあったけれど、どうしたって動けなくてその上で懲罰腕立て伏せとかくらうくらいなら、なんだろうと腹に詰めてその時間を乗り切らねばならない。

同期や上官なんかは「自衛官の女って女じゃねえよな」などと、おまえらガスマスク付けて駐屯地走ってこい、と言いたくなるような文句を吐くが、可愛いお嬢さんやっていたのでは生き残れない世界なのだ。

「今村あ！一秒でも眠ったら、ガスマスク付けてビール飲ませるからな！」

「すみません、汚すと佐藤 1曹に殺されかねないので勘弁してください」

隣の地げきから掛けられた二戸^{にのへ}3曹の声に、天に召されそうだった意識が繋ぎ止められる。

「ぼけっとしてんなよ。今回何でか中隊長がやる気でよー、昨日も居眠りしてた歩哨に偽爆薬投げ込んで喜んでたぞ」

「うわ、迷惑な」

本気で顔をしかめて二人してため息をつく。

私たちの所属する第2整備中隊の中隊長と来たら、大体「変人」で通る。

営内点検に来れば、「女性隊舎に入れてラッキー」とか「片付けられていてつまらない」とか勝手なことをぬかして五分で帰り（点検前には半日はかけて見られるところは全て掃除と隠蔽を施すというのに）、懇親会ともなれば一滴も飲めない癖に何故かべろんべろんの酔っぱらいよりテンションが高い。とにかくそういう人なのだ。その中隊長の一言により、なぜか今回、後支隊などは全くやる必要性のない7夜8日なんていう地獄のような戦闘訓練がここ、富士山の麓で繰り広げられているのである。

「二戸3曹、私、敵陣地に向かって突撃なんて教育隊以来ですよ……」

「俺だって陸教以来だよ……。あー、この泥だらけの89（はちきゅう）、最終的に俺が整備するんだろーうなあ……。キャリバーも俺が……」

「……強く生きましようよ」

段々と小さくなる声に、とりあえず上辺だけの慰めを試みしてみる。合掌。

とにかく、そろそろ終わる突撃支援射撃——ちよつとした煙幕っぽいそれっぽいものが転がるだけ——の後に、赤い旗目指してえっくらやっくらと突撃すればこの地獄は終わる。終わる、はずだ。うん、きつと終わる。

「着剣ちゃっけんよおーい！」

曹長の声が響き、一列に等間隔を置いて並んだ小隊員たちがごそごそと腰から銃剣を取りだし始める。

「ああ……これも……」

「終わったら飲み会ですよ、飲み会っ」

虚ろな目で銃剣止め外す二戸三曹を励ましつつ、泥の中に転がったまま89に着剣。いよいよと突撃を待つのみ。

「だいいっぱーん！」

「だいいっぱーん！」

「目標、鉢山頂上すりばちやま、敵散兵てきさんぺい200！突撃にー……」

伏せの状態ですべて飛び起きられるよう呼吸を整える。

訓練とはいえ、クライマックスのこの突撃時にはさすがに小隊員も多少の緊張感。

「進めっ！！」

曹長の号令とともに、腰の辺りで89式小銃を右手に保持したまま、とにかく野っぱらへと駆け込んでいく。

アドレナリンなんか最高に出まくり。ついでに雄叫びも上げまくり。

だって気合いの足りない状態なんて見られてみる、絶対に「はい、やりなおし」とかなる。絶対になる。

なので、私ももうやけくそに叫んだのだ。

富士の麓には野生動物と飢えた自衛官しかない（後書き）

不定期にのんびりと書いていこうかと。

お時間のある時に読んで頂けると嬉しいです。

突撃した自衛官は急に止まらない

「アアアアアアアアアア……って、あれ」

やけくそ半分意識朦朧半分でバカみたいに叫んで小高い山へと突撃したはずの、私。

突撃したはずの私なんだけれども。

なぜ、勢いよく扉を開け放ちちゃってるんだろうか。そもそも何故扉が？

「ええっと」

開いた扉の先には啞然とした表情でこちらを見つめる人が3人。

茶色い髪をした男と、白髪の老人。それから短く整えられた黒髪の少年がひとり。

もちろん、どっからどう見ても同じ小隊員でもなければ自衛官ですらない。

加えて、目の前に広がっているこの光景がちょっと自分の予測と違っているのか。

突撃した先にはこんもりした山っぽいものがあるはずで、そこのだっさい赤い旗なんかがあって、誰かがそれをもぎ取ったらとるはず敵陣地占領ってことで状況終了、私たちハッピー！な展開になるはずだったんだけど。

ここは明らかに演習場ではない。なんていうか、王宮マジ王宮。

日本の住宅事情じゃ考えられない吹き抜けの空間。敷き詰められた暗い赤色をしたふかふかの絨毯。東洋的な形のはめ込み窓から漏れる光は少なく、広間は少し薄暗く――なに、んじゃあ、あの富士

の演習場のすり鉢山の先にはお城的なものが広がってるのか？ あはははは……いやいやいや、ないないないない。

多分あれだ、私倒れたんだ、無理がたたって。絶対にそう。うん、それしかあり得ない。

演習場の私はきつと今、二戸三曹辺りに担がれて涎垂らしてるんだよ、きつと。

「そっかあ、なんだ夢かあ。夢だったらしょうがないよね……」

まだ固まる空気の中で、とりあえず明るくそんなことを呟いてみる。

「私もまだまだ乙女だなあ。すり鉢山の向こうはお城でした、とかもうあり得ないよね、22歳」

誰に訊かれるでもなく、7日間殆ど徹夜・空腹のナチュラルテンションで呟いていたら、なんだか可笑しくなってきた。

「9割男の職場で入隊して4年、ひとりも彼氏が出来ないとかマジないね。ちくしょう、神奈川地連かながわちれんのおやじ、“君なら部隊配属されたらすぐに彼氏出来ちゃうよ”とか調子いいこと言いやがって。まあそれにのったのは誰かって言ったら私なんだけど。確かに小隊に女は私ひとりだけだけどさ、殆ど結婚済みじゃねえかちくしょう。余ってんのはどう見ても問題親父ばかりだよ！ ああ、誰だよ群馬の山奥に配属決めたの、一生呪うからな、禿散らかせ！！」

場にそぐわない何か余計なことまで口走った気がしないでもないが、勢い付けてどん、と銃床じゅうしょうを絨毯じゅうしんに打ち付けた鈍い音に私以外の男性達はようやく我に返ったらしい。

「お、お前は何者だ！」

その場にいた3人の中で最も低い位置にいた男が、腰の剣に手を掛けて叫ぶ。

茶色の髪をした騎士っぽいなにか、といか言いようがない服装。

しかもファンタジーっぽいほうの。

お前が誰だ、と睨み合いつつそこは徹夜の自衛官テンション。思わず執銃時の動作で敬礼。

「東部方面隊第12旅団第12後方支援隊第2整備中隊第4普通科
直接支援小隊、装輪整備手、今村末葉陸士長！ 認識番号はG13
53774！」

この舌噛みそうな部隊名から氏名階級認識番号まで一気にぶっちゃけると、あまりのその呪文さ加減に——いや、威容さに叫んだ男は一步退く。

女性自衛官なめんな。

「なん、なんだ……お前……」

そうだよ、なんていうか、世界観の違い？

こっちは迷彩服だし草くつつけてるし顔はドーランまみれの真緑で、検閲時には中隊長から「おまえ気持ち悪い」とのお墨付きを頂いたりした。

ちなみにドーランは資生堂製。

そっちはそっちで何それファンタジー？ 戦国自衛隊だってねえよ、この組み合わせ。

「何かって言われても。ただの自衛官なんですけど」
「ジェイカン？」

惚けたような私の言葉に、今度は白髪の素敵なロマンスグレーっぽい人が微妙なイントネーションで訊き返す。

眉間に皺が寄りまくっているのは……まあ、私上から下から顔面まで緑だし……。

「特別職の国家公務員です。ていうか今さらだけど、ここどこ？富士○ハイランドまで突撃した覚えはないんだけど……」

そこまで言ってしまった、とそのロマンスグレーっぽい人に駆け寄る。

「てか、え、ちょっと待って！間違って突撃しすぎちゃったとして、これって演習場突き抜けたにもほどがあるってこと！？それって脱柵だつさく？脱柵になっちゃうの！？しかも89持ったままとかもうこれ大搜索並の失敗じゃん！やべえ、やばすぎる……」

「あの、ジエイカン殿……？」

「これって新しいアトラクションかなんですよね！？あーもう、どうしよー！おじいさん本当に申し訳ないんですけど、一緒に来て事情とかそこら辺適当にうまいこと言ってくれませんか！？なんというか、有り余る突撃パワーでなんか間違えちゃったらしいですよ、とか取りなしてもらいたいんですけど、主に中隊長に」

何だろう、一気に事が起こりすぎてただでさえ眠い頭がくらくらする。

こんな危機的な状況、新隊員教育の時の「怒りの半長靴はんちゅうかマラソン」以来だよ。

あれだって、2区隊の志水さんが教育隊中隊長の座学中にうたた寝したあげくふてくされた態度で挑んでしまったがためのとぼっちりだった。

半長靴のまま外周走らされた挙げ句に、隊舎前で腕立て用意の号令聞いた時にはもう死んだと思ったね。

1、の号令で肘を曲げて2、の号令で元に戻して1回カウントなのに、いつまでたっても2の号令が来ないとかもうなにその精神的苦痛。

背中からは「まだ1回もやってねえのになにへばってんだ！」のお言葉。思い出ただけでもいまだにガクブルくる。

「とにかく！　なんかとんでもなく間違えちゃったみたいなんで！」
「いや、間違ってる」

食いつかんばかりにロマンスグレーっぽい人に迫ると、その上段から不意に声がかかった。

びっくりしてそちらを見れば、騎士とロマンスグレーと残りのひとり。

漆黒の短い髪に、黒のようにも見える濃い群青の瞳を鋭くこちらに向け、ちっちゃい少年がこちらに一步足を踏み出す。

年の頃12歳前後と言ったところか、まだ幼さが残る顔立ちと細身の体は少年の若さを一層強調している。

そうなんだよねえ、男の子ってこれくらいの時が一番可愛いよねえ。ああ、いいな、若いとか。久しくうちの小隊足りないものだよねあ……。

なんてしみじみとその少年を見つめていると、慌ててさっきの騎士もどきが駆け寄って私とちびちゃんとの間に割り込んだ。

「ウェイフォン様、お下がり下さい！」

「ジュンレン、下がれ」

年頃の割には落ち着いた態度で騎士を制すると、そのちびちゃんはずつくりと私の前までやって来る。なんとなく、気圧されるよう

な雰囲気。

150センチ後半の私が余裕で見下ろせるくらいだから、ちびちやんは140センチ台だろうか。

私をじっと見上げるその瞳には少年らしい好奇心というよりも、何かもつと深遠な思惑がかすかに過^よぎる。

「おまえが予言の緑の乙女なのか？」

なんだろう、そろそろ本格的に気絶したくなってきたかも。

自衛隊体操は本気でやると結構辛い

自衛官の朝はラッパとともに始まる——のが当たり前だったのは約一ヶ月前まで。

今や私の朝はむさ苦しい男の大声で叩き起こされるという、激しく最悪の始まりをするのだった。

「ウラバー！朝の体操の時間だぞ！！」

ちよつと待て、大体おかしいだろう。

妙齡の娘の寢室に、なんで男が早朝から突撃してくんだよ。誰か止めろよ！　ていうか、止めてよ！！

「うっさい！　朝くらい爽やかに目覚めさせろ！」

「この上なくさわやかな美声で起こしてやってるだろうが。とにかく早くしろ、お前がいないと、ジエイタイ体操ができない！」

ああ……バカだな、過去の自分。なんでこんな筋肉バカに自衛隊体操なんて伝授しようとしたんだろうか。

いや、あの時はちよつと判断能力に問題ありまくりだったし、なんか色々明らかに自分が怪しかったし、身元を説明するはずが斜め上にいきすぎたんだ。

鉄鉢てつぱちからサスペンダーに弾帯、弾倉入れと空弾倉、小銃、果ては顔の色は真緑。右の頬には猫ヒゲの如き黒の三本線。いや、猫ヒゲじゃなくて小隊識別マークなんだけどさ。

もしもその格好をした人間が、いきなり自分の家の扉から勢いよく飛び込んできたら——私でも通報する。実際、只今絶賛扉の前で待機中の筋肉バカー——もとい、近衛隊のジュンレン隊長なんて今に

も私に飛びかからんばかりで警戒態勢だった。

なんか、今や物凄い勢いで懷かれている気もしないでもないが、それはひとえにあのちび王様が放った一言によるもので。

『緑の乙女』

そう、私の目の前に立ったあの生意気そうな……いや、大変賢そうなちびっここそ、この国インゼリアの現国王、ウェイフォン・インゼルその人だったのだ。

宰相だというあの白髪のパラディグラーの方、シルワールムさんの『なぜなにインゼリア!』的な説明で軽く自分の立場を理解した私は、なんやかんやとこうして王宮で寝起きするに至っている。

インゼリアは深い森に囲まれた、古い歴史のある小国だということ。国は小さいけれども交易なんかが盛んで、慎ましく生活する分には充分豊かな国であるということ。前述した通り、現在国を治めているのがちびっ子王様で、この国唯一の王族だったこと。

そして私が『暫定』緑の乙女らしいってことだ。

いやいや待て待て。よく考えたら全く意味わからなくないか？
流されやすく和を尊ぶ日本人故にあえて突っ込みを入れるのを躊躇ってたけど、だからその『緑の乙女』っていう恥ずかしい単語はなんなんだよと。

ところがなぜかそこらは「あとを追々」なんて年の功的何かに誤魔化され、7夜8日テンションでは抗いきれず、今ここに至る。

正直に言くと、眠かった。死ぬほど眠かったんだ。しかも飢えていた。

だから訊きたいことは死ぬほどあったけれど、シルワールムさん——シム宰相に「お部屋に案内しますよ」って言われて断れなかったんだ……。

それでもって寝た。

ああ、久しぶりの清潔な布の感触！ ビバ王宮！ なにこの布団

すんげえやらかい！！とか感動しているうちに爆睡かまし、気が付いたら次の日の昼。

起きたら起きたで、まるでそれを読んでいたかの如く、飢えた訓練明けの自衛官の目の前に並べられた美味しそうな食事に私の理性はとっくに消え去ったのだった。

そんなこんなでなし崩しに過ごすこと1ヶ月あまり。うっかり馴染んでしまったこのインゼリアで、私は今日も隊長と近衛騎士達に自衛隊体操を伝授すべく支度を始めるのであった。

「みんな、待たせたな！ ジェイタイ体操を始めるぞ！」

一度でいいから、隊長のテンションを最下層まで引きずり降ろしてみたい。

そう願わずにはおれないような爽やかな笑顔でジュンレン隊長が宣言すると、王宮の中庭に集まっていた若い近衛隊兵士たちが、これまた元気に声を上げる。

かつてこれくらいやる気に満ちた朝礼、というか自衛隊体操を指導したことがあっただろうか。反語。ないない、あり得ない。少なくともうちの4DS（第4普通科直接支援小隊）では。

自衛官は国旗掲揚の時間になると、どこぞの宗教かとびびるくらいに、ぴたっと動きを止めて国旗が昇るのを待たねばならない。さらに、国旗が見える場所では敬礼も。

新隊員の頃なんかはもうびしっと気を付けしてたりするが、こなれてきた部隊配属後の自衛官など面倒とばかりに自分の小隊の事務室に駆け込み、建物内では誰に見咎められるでもなく煙草を吹かしてソファに座っていたりする。

最初はどん引いていた新人も、数ヶ月すればラッパ前に「やべっ」とか言って事務室に駆け込んでくるようになるのだ。いやあ、慣れって恐ろしい。

朝礼が長引いたりするとその手も使えず、きっちり気を付けでその時が過ぎ去るのを待つ。冬なんかはちよつと辛い。群馬寒い、ちよつ寒い。

なので、朝礼で下っ端が強制担当する自衛隊体操の指導なんか、ちよつとでももたついたり動きや名称を忘れていたりすると、古参からどやされるのである。特に二戸三曹。

だから、嫌でもこの本気でやると超汗掻きまくりの体操は、私の身体に染みつきまくっているわけで。

「気をー付けー！ 自衛隊体操その1、その場駆け足の運動から！」

ほんと、身体に教え込まれた習性ってやだな。

近衛隊の前に立てば自然とうっかりやってしまうんだから、自衛官って……自衛官って……。すげえ洗脳されてるよ、私！

しかも隊長と共に近衛隊の若い隊員たちがこれまた素直に気持ちよく従うもんだから、非常にいい汗をかけてしまったりして、複雑に悔しい。

そして一見ラジオ体操のように見えて、本気でやると朝からすごい疲れるのが自衛隊体操でもあったりする。呼吸運動を最後によりやく体操が終わった頃には、中庭に二列横隊で並んだ隊長以下隊員13名はぐったりと柔らかな芝の上に腰を下ろした。

「慣れてきたとはいえ、まだまだきついものがあるな。ウラバの国の近衛隊はまさに精強なのだろう」

手にした布で髪や顔を拭いながら、満面の笑みで隊長が私を振り返る。

「そうでもないですけど。まあ、定期的に大規模な訓練とかしたり、人数はやたら多いです。インゼリアの軍隊って……まさかこれ全員とか？」

「そんなわけあるか！」

心外な！と続ける隊長に、ですよねえと私も軽く返す。

シム宰相によると千年以上続くこの国の兵隊がこれだけなんて――

「このティアオとクワイとガンの3人は行儀見習いみたいなもんで、隊士じゃない。だから、正式な近衛隊は俺を含めて10名だな」

どこのリヒテンシュタイン公国だよ。ていうか、10人の近衛隊って。

確かにこの国にはどこかのんびりとした空気が流れていた。

私が一室借りている王宮だって最初に飛び込んだ謁見室はまだしも、建物自体は歴史を感じさせる――ぶっちゃけ古いし、物語に出てきそうなメイドさんやら使用人の姿もない。

それどころか王宮内には普通に街の人々が入り出しているし、ここにいる近衛隊は始終遊びに来る子供達を追い出すので精一杯。

その街だって大都市って感じではなく、森を背負うようにして立つ王宮の下にこぢんまりと村よりいくらか上等な街並みが広がっているだけだ。

まあ、交易が盛んなだけあって街には活気があるし、それなりに綺麗に整備された通りには他の国から来たんだろう人々が行き交っていたりするけれど。

「平和なんですねえ」

群馬の山の中から出てきた私が言うことではないけど、なんだかしみじみとした感情を込めて呟くと、隊長は満面の笑みを浮かべて頷いた。

「いいところだろう？ 俺たちがこうして平和でいられるのも、ウエイフオン様のおかげなんだ」
「ちび様の？」

街の人たちが親しみを込めて呼ぶ王様の愛称に、隊長はちよつと困ったような表情をする。この人とシム宰相だけは、ちび王様をきちんと「ウエイフオン様」と呼ぶのだ。

「この国は深い森とウエイフオン様のお力で守られている。敵意を持っている者は国境を越えることすらできないのさ」

「へええ、ちび様ってすごいんだ」

あんなにちっさいのに、という気持ちを言外に感じ取ったのか、隊長は大きいため息をついた。わ、悪気はないんだよ、悪気は。

そのちび様といえば、最初に謁見室で会って以来だ。

どうも王様というのは忙しいらしく、朝から晩までどこかを飛び回っているらしい。

反対に特に何にもすることがない私と言えば、王宮や街を当て所なくぶらぶらしてみたり、こうして近衛隊の訓練に混ざって運動してみたり、自由に過ごしている。その折にちび様の姿を見かけることがあるが、あの幼さの残る綺麗な顔はいつでも難しいそうに顰められていて、私のような半ニートが気軽に声を掛けられる雰囲気ではなかった。

王様っていうのはもつとこう、執務室にどっかり座って判子を押すだけとか、煌びやかな王宮で舞踏会三昧とか、昼から後宮でしゃべりとか、そういうイメージだったんだけどなあ。

「宰相殿が付いているとはいえ、殆どおひとりで政務をこなされているからな。まあ、もう少しすればおまえとゆっくり話す機会も設けられるだろう」

「はあ」

出来れば早めに「あとは追々」辺りの事情を聞きたいんだけどなあ。

うーん、と唸る私を置いて隊長は素早く立ち上がると、小休止していた隊士たちに解散の命を出す。そして軽く私の頭を叩くと、3人の見習を連れて王宮へと戻っていった。

毎朝叩き起こしに來なければいい人なんだけど。

いつも通りに予定のない私はしばらくその場で空を眺め、それから勢いを付けて立ち上がった。こうしていても仕方がない！

「天気もいいし、今日は森でも散策してみるかあ！」

どうしても緑の方向に進みたがるのは自衛官たる所以なのか。複雑な心境を抱えつつ、私は王宮の裏に広がる森を目指して歩き始めた。

どこか不穏な空気を感じることもないままに――。

草を見ると身につけたくなるのが自衛官です

暗く、闇よりもなお暗く。

その部屋に続く回廊には松明の明かりさえ届かない。冷え冷えとした空気が足下を走り、近付く者を静かに威嚇する。空を見上げれば、細く欠けた3つの月がひどく冷たい光を反射して夜空にあった。古い伝承の中によれば、ひとつは我ら人の月。ひとつは竜の月。そして残るひとつは、この世界を産んだ神の月だと言われている。見つめる先でその二つ目の月、竜の月が黒い雲に覆われ霞んでいく。なんともこの先の『彼』の運命のようだ、と皮肉な笑みをその冴えた美貌にのせながら、男は再び歩み始める。

人気のない、王宮の最奥。殆ど知られることのないその場所に、『彼』はいる。それは最早人の形すら保てなくなった『彼』の為の、特別に豪華な牢獄だった。

カツリ、と硬質な音を響かせ部屋の前に立ち止まると、護衛としてという名目で置いている監視の兵が静かに頭を垂れた。命じるまでもなく、音も立てずに闇へと紛れ込む。

ここが安住の地でも、近くに侍る兵士達が護衛でもないことを、多分この中にいる『彼』も知っている。

なぜなら、もうすでに『彼』は人の域さえ超えつつあり、そんな者を害すことなど人は考えもしないからだ。——この男以外は。

「やあ、まだ起きているかい？」

例え味方であろうとも、『彼』の醜い姿を目にした者は一様に震え上がるというのに、この男はまるで親友にでも会うかのように穏やかにそう声を掛ける。

真実、男と『彼』は親友であった。互いの内がどうであろうと、

今宵この訪問の時までは。

男の呼びかけに、部屋の中から何かくぐもったような声が答える。人の声というにはあまりにざらついた、陰惨な匂いのする響き。獣よりもさらに残酷な。

しかし、男は一切恐れる風でもなく、微かに笑って扉を開け放つ。外の闇よりもお暗い部屋の中に、うつすらと月の明かりが入り込む。それは真っ直ぐに部屋の中を突き抜け、そして中央にいる何かを静かに照らし出した。

再び、その何かがうめき声のようなものを上げる。

男が部屋に足を踏み入れ扉を閉めると、一瞬の暗闇の後、今度は暴力的なまでの明るさが辺りを支配した。

何かが声にならない声を漏らし、それが男の手の中にある燭台の火を大きく揺らす。

灯りに照らされたそこにいたのは、ひどく醜悪な生き物。

全身を黒色の鱗に覆われ歪な形の、『彼』。

それは大きな竜だった。しかも、伝承に登場するような力ある誇り高き古代の生き物ではなく、そこにあるのはただ醜いだけの怪物。灯りを厭う緑の瞳だけが、辛うじて理性の光を一欠片持ち合わせている。

「夜遅くにすまないな。おまえには早く知らせてやりたかったのだ」

竜を恐れる素振りも見せず、男は灯りを持ったままそれに近づき声を掛ける。少しだけ身じろぎをした竜は、男の言葉にじっと耳を傾けているようだった。

「西のナツメが落ちたよ。前司令官の時にはかなり手こずった小国だ。これではばらく、僕の司令官としての地位も、王宮内での立場も確固たるものになることだろうよ。――全て君のお陰だ」

微笑んで、男は竜の鼻先に掌をあてる。確かめるように、労るように。竜は男を見つめ、その手にすり寄った。心を許しているかのようなそんな仕草に、男は目を細める。

そして、思い出したかのように懷からひとつの包みを取りだした。

「それで、これはナツメの薬士くすしに献上させたのだが、君のその『症状』によく効くらしい。治るとまではいかないものの、進行を遅らせるくらいにはなるだろうってことだ」

荒れることなく、どこまでも慈愛に満ちた言葉に、竜は緑の瞳をきらりと光らせる。鋭い光彩の表面を何かが濡らす。

そうして竜は首を持ち上げ、大きく口を開いた。

男は深い微笑みを浮かべ、包みの中から丸薬のようなものを手にとって掲げる。

「さあ、どうか」

竜はその声にゆっくりと首を男に近付ける。鋭い牙が灯りに光って、そして――。

部屋に赤い色が散った。

自衛官は草を見たら身につけたくなるのが習性です。嘘です。8割嘘です。

後の2割は、偽装に使えそうな草を見ると、ちょっとだけそんなことを考えてみたりみなかったり。

そんな残りの2割の状態にあるのが、今の自分の姿だというのが悲しいところ。

おかしいなあ。隊長達と別れた後、しばらくは普通に森の散歩を楽しんでいたはずなのに。なぜかいつの間にか「おっ、ここ富士の演習場に似てる」なんて思ってた。楽しくなっちゃって、気が付いたら「この草、いつも偽装に使ってる奴に似てるなあ」とか考え始めちゃって、終いには「ちよっと偽装してみよう」みたいな事になってしまった。

どこで間違えた!? どう考えても班長は大変な洗脳を施していただきました!

あれは前期教育の時、まだ「訓練場A地区」という単語に地獄を予想出来なかった頃。班長達の偽装技術には度肝を抜かれたよ。

一言で言うなら、「なにそれ緑のムック!」だった。とにかく頭から肩から草だらけの状態で、そこの茂みに伏せていさえすればぱっと見絶対に見破れない。

あの時は感動すら覚えたなあ。後々、それがめっちゃくちや面倒くさい作業だって知るまでは。

まあ、私だってそんな本気でやってたわけじゃなくて、ちよっとしたホームシツクのなかだったんだよね、多分。

なんか突然こんな知らない場所に来ちゃって、事情も何もよくわからなくて、することもなし。深く考えれば考えるほど、どうしよう仕事放り出して1ヶ月失踪とかマジどうしよう、とかドツボにはまってっちゃうし。

なんだろう、うちの家系、呪われてんじゃないんだろうか。

昔々、おばあちゃんがよく私に寝物語として聞かせてくれた大叔母の話を、不意に思い出す。

大叔母——おばあちゃんの姉は、やっぱりこんな風にしてふつとなくなっちゃったらしい。当時は神隠しだ、いや誘拐だ、と大きい騒ぎになったようだったけど、結局それきり大叔母は戻っては来なかったと、おばあちゃんは寂しげに聞かせてくれた。

あああ、どうして今こんなこと思い出しちゃったんだろう……。これ、現実の世界には戻れませんフラグとか？

ていうかその前に、王宮に戻れませんフラグが立っちゃってんだけども。

「それで、ガナドールの情報はなにか入ってんのか？」

まだ声変わりのしていない、けれど落ち着いた少年の声が鋭く響く。私の頭の上の方で。

ぬ、盗み聞きじゃないんだ、決して。

だって、私のほうが先にここにいたもん！ 後から来て大事な話っぽいことし始めちゃったのは、ちび様だもん！

誰に言うでもなく、心の中で虚しく反論してみる。

そう、私が馬鹿みたいにうきうきと自分に草を巻き付けて寝っ転がっている所へ、ひとりやってきたのはちび王様、その人だった。

珍しくシムさんもないし、これはちび様に今後のことを聞いたりお願いしたりするチャンス！と飛び出そうとしたら、そのタイミングでシムさんが走ってくるという……。なんという間の悪さ。

そうになると、何だか「てへへ」なんて言いながら草まみれで出ていくのも何だな、とか気後れしているうちに、何だかとても重要な話のものが始まってしまったのだった。

気まずい。ちよう気まずい。

そこはかとなく冷えてきてトイレに行きたいし、お昼も近いのでお腹もそろそろ空いてきてるし。ここでお腹がぐうとかいたりしたら、やっぱり「何やつ!？」みたいな展開になって切り捨てられたりして……。や、やめよう、その想像。

「ナツメが落ちたようです。軍本隊は一度帝国に引き上げたようです……」

「ナツメが!？」 ああ、あの国にも法術士と防壁があっただろうが!」

「それが、まるで一方的に攻め落とされたとの情報で……」
「……くそっ、一体ガナドールは何を手に入れた！」

吐き出されたその声音に、ちび様の苦渋が満ちる。シムさんは氣遣うような言葉をかけるが、その声にもまるで力がない。

ガナドール、ナツメ？

話からすると、戦争が起こっているらしいんだけど、この世界の知識がない私はさっぱり要領を得ない。でも、こうしてちび様が頭を悩ませているということは、あまり遠い国の出来事ではないんだろう。

「引き続き情報を集めてはおりますが、国境は封鎖され、逃げ出せた生き残りも少数。しかもその生き残りも、まったく何が自国を襲ったのか理解出来ないように」

「わかった。それはお前に頼む。無理はすんな」

「御意」

衣擦れの音がして、静かにシムさんの気配が去っていく。どうやら話は終わったみたいだ。

これであとはちび様がどっかに行ってくればなあ、とか安易に考えていた私の頭に影がかかる。え？ まさか雨でも降る！？

慌てて伏せていた顔を起こした私の目に入ったのは、茶色の長靴。使い込まれているけれども、丁寧に手入れをされている、そんな風な。

「それで？ お前はここで何してんだ？」

かけられた声にぎぎぎ、と靴から上に視線を上げていけば。

そこには予想通り、群青の不思議な光彩を放つ瞳を呆れたように細め、こちらを見下ろしているちび様の姿があった。

「こ、こんにちは……王様！」

「……訳くらい、聞いてやってもいいけど？」

なにこれ色々な意味で死にそう。

泣いてもハイポートは終わりません

「さ、散歩です！　すごい勢いで散歩です！」

「体中に草をはっつけて地面に寝転がるのがお前の国の『散歩』かよ？」

でーすーよーねえええ。

幼いながら無駄に整った顔の人間に冷たく睨まれ、私の体感温度が一気に下がる。そんなに怒らなくなたっていいじゃないか。これはあれだよ、人間関係の潤滑油的な会話の妙だよ、うん。

とか心の中で愚痴りつつ、しかしその小さな身体から発されるプレスシャーに押されるようにして、私は素直に立ち上がった。身長ならば私のほうが高いんだから！

「の、覗くつもりはなかったんですよ？　私が転がってるところにちび様達が来たのであって！　つまり、私は悪くないと思ったり思わなかったり……」

「言いながら自信をなくすんじゃないやねえよ……」

しどろもどろな私の言葉に大きくため息をつき、ちび様はちよつと癖のある笑みを口の端に乗せた。そして腰に下げた剣に手を掛け、頭ひとつ分は高い私を見上げる。

光の加減で黒くも見える、濃い青の瞳。その中にある縦長の瞳孔が、獲物を狙いますます獰猛さを湛えて、きゅっと縮まった。

次の瞬間、発される威圧感。少年特有の細さを残す身体が何倍にも大きくなったように感じる。背筋はぞわりと泡立ち、私は直立したまま少しも動くことができない。やばいやばいやばい、これ絶対

に殺^やられるよ！

「死にたいか？」

「め、滅相もない！」

低く問われた言葉に速効全否定。マジですか。

慌てて首を振る私を、今度は真正面から突風が襲う。ちび様の身体から吹き付けるその暴風に、私は息も出来ない。腕で顔を庇いつつ、ただひたすら耐える。耐えることしかできない。

襲い来る風は私の身体についた草を宙へと飛ばし、まとめていた髪すらぐちゃぐちゃにしていく。なんだこれ！？

時間的に言えば5分もなかっただろうその現象は、情けないことに私が腰を抜かすことで終了となった。

その場にへたりこんだ私を見てちび様は剣から手を放し、自らもその場に腰を下ろす。そして、まるでいたずらに成功した後の子供のような笑顔で、緊張で血の気を失った私の顔を覗き込んだ。

「なんだ、本気にしたのかよ？」

……何この子、めっちゃ腹立つ！

軽くかけられたその言葉に、息を整えようと大きく深呼吸を繰り返していた私は瞬間的な怒りを覚えた。大いにかちんときたよ、たった今！

頭で考えるより先に、目の前の彼に向かって繰り出される頭突き。自分もダメージ必至だが、年下で生意気な奴には制裁としてこれくらいが一番。現に、私の可愛い弟はこれで大体言うことを聞く。味わえ、私の石頭。

そうして、がつつといういい音を立て、私の額とちび様の額が激突した。

「いってえ！ 何すんだよ！」

「馬鹿か！ もう、二回言うよ、馬鹿ですか！ あのねえ、こっちは丸腰でちび様は武装してて、そんなんでびびらない奴がいるわけないでしょ。大体、私はそんな剣持った人間と会ったこともないし、それで脅されたら怖いに決まってるじゃん！ わけわかんない風まで吹くし！ 冗談でしたなんて、そんな、そんな……」

そんな風に言い募りながらも、不意に緩みそうになる涙腺。それに私は、女教隊班長の言葉じょうきゆうたいを思い返すことで辛うじて耐える。

『泣いてもハイポートは終わらないぞ！』

そう、そうだった。ここで泣いてもしょうがない。こらえろ、こらえろ私。

そうして限界まで目を見開いて深呼吸を再開した私に、少し赤くなった額を抑えてこちらを睨んでいたちび様がふと、表情を改める。悔いるような、そんな顔をして私に向かって手を伸ばしてくる彼に、反射的に身を竦ませる。

一瞬、迷うように引いた手はもう一度ゆっくりと伸ばされ、そつと乱れた私の髪に触れた。まだ成長途中の細い指が、絡まった髪の毛を器用に梳いていく。

「あ、あの、ちび様？」

「……ごめん。お前に害意がないのわかってて、意地の悪いことした」

頬を優しく撫でて離れた手のひらの感触に、私は目の前にいるのがこの国の王様なんだ、と実感する。触れていたそれは少しごつごつしていた。彼はただ守られているだけの王様なんかじゃない。これは、剣を握る手。

小さくても、ちび様は王様なんだ。

そう意識してしまうと、さっきの自分の行動がものすごく申し訳なくなり、私も慌てて頭を下げた。

「王様、私のほうこそ、ごめんなさいっ！ あの、頭突きとか」

「気にしてねえからいいって。あと、王様って呼ぶのやめろ。さっきまでちび様って呼んでたろ、おまえ」

「いや、でも、その……王様、だし」

「気い使うな。どうせ民達は遠慮容赦なく『ちび様ちび様』呼びまくってるし、シムもジュンレンも俺のことは名で呼ぶから、『王様』って改めて呼ばれるとこそばゆいんだよ」

微妙な空気を払うようにからりと笑ったちび様に、私もようやく入りっぱなしだった肩の力を抜いて笑みを見せる。すると彼は見るからに安心した顔になり、気を取り直して口を開いた。

「それで、何してたんだ、こんな所で」

あんな格好で、と続けられた言葉に私は唖る。そこはスルーしてくれないかなあ……どう説明したらいいものか。

「く、訓練ですよ。私のいた近衛隊みたいなどころでは、よくやるんです。身体に草を付けて地面をはいずり回ったり、ひたすら人が隠れる穴を掘って周りに草を植えてみたり」

「……おまえの国、変わってんな」

自衛隊について説明するたびに、何だか私だけが怪我していくような感覚は気のせいだと思いたい。でも、シンプルにわかりやすく言葉にしてみると、これはひどく怪しい集団だ。

自衛隊の中でさえ、私みたいな後支隊の人間が興味本位で「ねえ

ねえ、普通科って普段何してるの？」とか訊いたりしてみろ。その問いに対する普通科の人間に、「物品の数かぞえたり。ええと、数をかぞえたり……念のためにもう一回かぞえたり……俺、いったい何してんだろうな……」とか、人生の深淵に片足突っ込ませかねない。そんな危険な組織なのだ。

さっきとは違う意味で冷や汗を掻く私を眺めながら、ちび様はまあいいや、と鷹揚に頷いた。

「別に問いつめるともりもねえけど。ここは禁域で、俺の許可がないと入れねえ場所だから驚いたんだよ。何も感じなかったのか？」

「はあ、特には」

「妙だな。王の血族以外、壁に弾かれるはずなんだけど」

「中庭からここまでなんとなく歩いてきたんですけど、壁みたいなものは見当たらなかったですよ？」

そんなものあったらとつくに引き返してるし。

何おかしいこと言ってるんだろうこの子、という本音が顔に出たのか、ちび様は違えよと首を振る。

「そういう物体としての壁じゃねえ。防壁だ、防壁」

「防壁？」

「お前のそこにはねえのか？ ほうりよく 法力を使って作った力の壁だ」

「法力？」

なにそれ美味しいの、と言いたくなるのをこらえて問えば、大きなため息がひとつ返ってきた。わけわからんこと言い出したの、ちび様のくせに！

まずそこからかよ、とぶつぶつ言いながら、彼は手のひらを私に向けた。なんだろうと近付いた私の顔に、さっきと同じような突風が吹き付けて、すぐに消え去る。驚いてちび様を見れば、にやつと

意地悪な笑顔が返ってきた。

「これが法力だ」

ああそうですか。もっと穏便な感じで説明してくれてもよかったですんじゃないですかね！

再びむっとして、私は顔をしかめながらとりあえず理解した、というように頷く。なんていうか、魔法だよね、魔法。

なんだか本格的にファンタジーな世界になってきたなあ。そのうち、竜とか出てきたりして。

「私のところじゃそういうのは魔法って言いますが、物語の中にしか存在しないので」

「まあ、ここであってそんなありふれたもんじゃないけどな」

「ちび様は使えるのに？」

「……俺は古い血を継いでるからな」

少し苦しげにひそめられた眉に、それ以上疑問を重ねられずに戸惑う。なんか地雷を踏んでしまったんだろうか。

そう言えば、ちび様には他に家族がないみたいなのを隊長が言ってたし。ちび様の歳を考えたら、お父さんとかお母さんが死んだのってそんなに昔じゃないよねえ。私、もしかして古傷抉った？ぐるぐると思いを巡らし、さっきの失言をどう訂正しようか悩み始めた私を見て、ちび様は困ったように笑った。

「なに氣い遣ってんだか知らねえけど、氣にすんな。法力ってのは、簡単に言えば血の力だ。力が宿る血を受け継いだもんだけが使える。時々、混血の果てに先祖返りして法力を持った奴が産まれることもあるが、まあ稀だ」

「じゃあ、法力を使える人って少ないんですか？」

「多くはないが少なくもないってところだな。古い国の王族なんかはこの力を持つ者も多いし、それらを除くとちつとは珍しがられるって感じた。法力を操る奴は法術士って呼ばれて、大抵その国のお抱えってことが多いから、民の感覚で言えば一般的ではねえな」
「ふうん」

わかったようなわからないような。

一連の説明にとりあえず感心したような声を出すと、ちび様はそれを見抜いたかのように肩を落とした。昔から座学は苦手なんです。

「知識として知っておけばいいよ。お前には使えねえみたいだし」
「ええっ。なんでわかるんですか！」

「さっき思いつきし力ぶつけてやっただろうが。あんな攻撃を受けても壁のひとつも作れねえってことは、潜在的にも力がねえってことだ。法力が使える奴ならどんなに無力なふりしたって、とっさに身を守ろうとするもんだ」

「……もしかして、それを確かめたかったってこともあります？」
「結果的に、だけどな」

なんとなくバツの悪そうな顔をして、ちび様は頷く。

なんだ、ただの意地悪じゃなかったわけだ。ちび様の言葉に、むしろほっとした私はつい顔を綻ばせた。

「なんだよ、なんで笑うんだ」

「ちび様は王様なんだなあ、と思ひまして」

「どういう意味だ」

「そんなに睨まないでくださいっ」

馬鹿にされたと勘違いして険しい顔を作るちび様に、私は慌てて

続きを口にする。

「だって、私って突然現れたよそ者じゃないですか。そんなどこの誰かもわからない人を、何も調べずに放っておくのって、この国の最高責任者としてどうなのって思うし。ここがどういう情勢の中にあるのかわからないけど、私に気を遣うよりも国の人たちを守る為に手を打つのが王様の仕事ですよね？」

個人的にどう思っているかは別として、この国に有利になる方向に動かなくちゃならないのが王様の責務だ。そういうことで試されたのだとしたら、よそ者の私はそれを甘んじて受けるべきだと思う。というか、そうするべきだ。

そもそも、こんな風に私が自由に歩き回れるってことのほうがおかしいのかも。

なぜか隊長や近衛隊のみんな、出会う街の人たちも私に対して好意的だから、私も警戒されるってことを忘れていたんだ。

「お前、顔に似合わず深いこと考えてんのな」

「し、失礼だ！」

せっかく人が真面目な話をしていたというのに、このちびっ子め思わず声を上げた私を見て、ちび様はくつくつと笑い声を零す。

その顔は今までにないくらい無防備で、いつも大人びている彼を年相応に戻してみせた。

「別にお前を不審者として見てるわけじゃねえ。あの扉から招かれたのは俺もシムも見てるし、一応『緑の乙女』ってことになってるし」

「それですよ、それ！」

一番の疑問だった言葉がするっと彼の口からこぼれ、私はすぐさまそれに反応する。

疑問中の疑問な単語、『緑の乙女』。シムさんを始めとして、隊長に聞いても「ウェイフォン様と宰相がおっしゃらないことを、俺が言えるわけがない」なんて意味深にはぐらかすもんだから、余計気になるってのなんの。

この際だから詳しく聞きたい。私のこの国での扱いとか、どうやったら元の場所に帰れるのか、とか。……帰れるんだとしたら、だけど。

「その『緑の乙女』ってなんなんですか？」

ずいっと迫った私に対して、ちび様はなんとなく気まずそうに視線をそらした。おっと、今日こそ誤魔化されないぞ、とそらされた視線を追って私も移動する。ほれ、言ってしまう。

じっと見つめる私に、彼はどこか困ったような複雑な顔をする。少しの逡巡の後、意を決したように瞳を上げた。近くで見た、その青の力強さに戸惑う。

「最初に言っておくけど、俺が望んだわけでも、絶対そうしろってわけでもないからな！」

なんだその不吉な前置きは、と思いながら、私はごくりと唾を飲み込み大きく頷く。

どうしよう。この期に及んで、生け贄の称号だ、とか言われたら。

「つまりは、だ。『緑の乙女』ってのは……」

「乙女っていうのは？」

言いにくそうにするちび様を急かすように言葉を重ねる。ああも

う、もどかしいな！

多少いらっとしつつ、さらに身体を近付ければ、なぜだか彼は頬を赤くした。何その反応。

しばらく私たちは、これ以上ないというくらい近くで見つめ合う。耐えきれなくなったのはちび様が先。よっしゃあ！謎の勝利に満面の笑みをこぼす。

そんな私を睨みつけながら、真っ赤になった彼はなかば投げやりに、さっきの言葉の続きを叫んだのだった。

「つまり、俺の嫁だ！」

展開、いきなり斜め上過ぎる！

敬礼の角度は10度、そして陰謀

顔を赤くしたまま黙り込んでしまったちび様を見つめ、どうしたものかと考える。

いや、ないよ、ないない。待て待て、でももしかしたら『ヨメ』っていうのは、この国ではそういう意味じゃないかもしれないし！

「えっと、そのう……、それってちび様の奥さんになれてこと？」

「それ以外の意味があんのか！？」

「ていうか、年が離れすぎてると思うんですけど！」

怒ったように返された言葉に、私も負けじと大声で返す。なんなんだ、この森の中の大声大会は。

するとちび様は、私のその言葉に訝しげに眉をひそめた。

「おまえ、もしかして見た目よりも若いのか？」

「うわ、なんかむかつかますけど、そうじゃないです。私じゃなくてちび様の歳ですよ」

「俺はとっくに成人してる！」

微妙に論点がずれた気もするちび様の主張に、私はいったん口をつぐむ。

もしかして、こっちだと『成人』の年齢が低いとか。そういえば昔は日本でだって、15歳で元服とかだったしなあ。ちび様の見た目から言ったら、15歳よりも下に見えるけれど、こっちだと成人年齢っていくつになるんだろうか。

ここはダイレクトに年齢を聞いてしまったほうが早いかな、と口を

開きかけた。その時。

今まで不満げにこちらを睨んでいたちび様の顔が、一瞬にして緊張の色に染まる。そして、俊敏に立ち上がるとその鋭い瞳を周囲に走らせ、まるで私を背に庇うかのように両腕を広げた。

彼の小さな身体がひどく張り詰めているのがわかる。

その緊張に呼応するかのように、今まで鳥や葉ずれの音で賑わっていた森の中が静寂に包まれた。しばらくの沈黙。

「――気のせい、か？」

油断なく周りを見回しながら、少しだけ緊張をやわらげたちび様が口を開くと、無意識に強張らせていた私の身体からも力が抜けた。

「ど、どうしたんですか？」

「いや……。誰かが俺の防壁に触ったような気がしたんだが――」

口元に手を当て、少しの間考え込んだちび様は、すぐにふと息を吐いて頭を振った。

そして自分に言い聞かせるように呟く。

「ちょっと神経過敏になってるかもしれない。この国の、俺の防壁を抵抗なく越えられる奴なんか、もうこの世にはいねえしな」

目を伏せて、どこか空虚な口調で告げられたその言葉に私が何か言う前に、ちび様はふと瞳をやわらげてそれを制す。

さっきまでの気取りのない態度とはまた違う、達観したような、諦観のような。こんな笑顔にさせるような、何か大きな悲しみがこの人にはあったのだろうか。

何も言うことができずに黙ってしまった私の頭を、ちび様の小さな手が撫でた。

「驚かせて悪いな。大丈夫だ。ウラバ、もし時間があるならジュンレンを呼んでくれ。俺がここにいて伝えるだけでいい」

「あ、はい、わかりました！」

慌てて立ち上がり、いつもの癖で10度の敬礼をする。ちまたでは何でもかんでも、額の所に手をあてる『挙手の敬礼』が敬礼であると思われがちだが、帽子を被ってない今、おじぎのようなこれが正しい敬礼である。自衛官として、ここは譲れない！

びしりと姿勢を元に戻すと、頭を下げられ慣れているだろうちび様は「頼んだぞ」とだけ言って、森の奥へと歩いていく。

私はその反対方向、王宮へ向かって歩き出しながら、もう一度ちらりと森を振り返った。

さっきまでは気付かなかった茂みの奥、ちび様が歩いていった方向には何かのモニュメント。白い石で作られた、オベリスクのような形。

まさか秘密基地、とかではないだろうな、絶対。

隊長に会ったら訊いてみようかな、なんて考えつつ、私は今度こそ王宮に向かって走り始めた。

燭台に灯りという灯りがともされた、広く煌びやかな謁見の間に、どこか重苦しい空気が漂っていた。

王の御座に向かって左右に立ち並ぶ様々な人物が、そこかしこで密やかに言葉を交わし合う。ある者は眉をひそめた文官。ある者は深く頷きため息をつく武官。そしてそれらのざわめきは、王が御座につく合図として鳴らされた音に、潮が引くように静かに消える。

「ガナドール帝国皇帝、フォルミード・ガナドール陛下、ご入場！」

下段に直立する近衛が一声告げると、華美なマントを羽織った青年がどこかおどおどとした態度で王座につく。それを合図に立ち並んだ人々は一斉に膝を折った。

それを見届け、皇帝と称された青年はかつりと手にした杖で床を叩く。今度はその音に皆頭を上げ、御座につく皇帝を見た。

先代皇帝と同じくすんだ金の髪は後ろへと撫でつけられ、白皙の面をより神経質そうに飾っている。すっきりと整った眉の下には、周りからの視線を受け止め切れぬひ弱さが覗く、琥珀の瞳。笑みを浮かべようかどうか迷っている口元は、威厳などとは程遠い印象を抱かせる。この青年には、全体的に自信というものが欠如しているようであった。

それでも、と居並ぶ臣下の中、ひとりの武官は思う。

いかに先代より力が劣ろうとも、あの男よりは——と。

「ガナドール帝国軍総司令、テラス・ガナドール、入れ！」

再び側仕えの近衛が声を張りその名を謁見の間に響かせると、その場は皇帝入場の時とは全く別の緊張感に包まれた。末席に連なる文官の一人は、額を流れる汗を拭うこともできず、ただ御座より真っ直ぐ続く入り口を見据えた。

ふっとそこに闇が差す。

硬質な音を響かせ、名を呼ばれたその男は戸惑うことも緊張することもなく、ただ当たり前だというように御座への道を歩み始める。そのほの暗い緑の瞳は真っ直ぐに、正面に座する皇帝へとそそがれた。進むたびに揺れるマントは漆黒。そしてその身に纏う軍服もまた漆黒。闇を連想させるその装いとは反対に、その男自身がまとう色は、光量の足りないこの場にあっても豪奢に光る金だった。

ゆるく首筋で結われた髪は、無造作に、無遠慮に光を弾く。その色は、かすかに震えながら男を見つめる皇帝と、似てはいるようで決定的に違う。

玉座に座る皇帝よりも、今その前に膝をついたこの男のほうがよほど王者にふさわしい色と雰囲気を持っていた。

「皇帝陛下に申し上げます」

力強い、洗練された低音が空気を震わせる。

それは他者を威圧するだけでなく、ずっと耳を傾けていたくなるような引力をも含んでいる声だった。

「ナツメ皇国陥落により、東への道筋は確実となりました。これより我らガナドル帝国軍は街道の要、インゼリアへの侵攻を実行すべく、陛下のご許可を受け取りに参りました」

慇懃なほど丁寧な言葉はしかし、はなから誰の裁可も求めていないように響く。すでにこの男の中では、それが決定された事柄のよう。

問われた内容に、皇帝は右に控える宰相や周りへと助言を求めるように視線を走らせるが、すぐにそれに応えられる者はいなかった。誰もが困惑し、顔を見合わせ、そして黙り込む。位にしてたかだか軍部の総司令にしか過ぎないこの男を、この場に居合わせた高官達は真っ直ぐに見ることすらしない。

それが、皇帝と同じく『ガナドール』の名を持ちながら膝を折る、男への評価であった。

「陛下、時間はあまり多くはありません」

反論の声が上がらないことを知っているかのように悠然と、男は

皇帝に決断を迫る。その引き締まった口元にほんのりと微笑みを乗せて。

すると、立ち並んだ者の中から声を上げて前に出る者が一人あった。男の隣に膝をつき、口を開く。

「恐れながら申し上げます。東のインゼリアは小国ではありますが、古き歴史を持つ竜の国。明確な理由もなく火を移すは、諸外国の不信をも招きます。どうか、慎重なご判断を」

それは先ほど末席にて冷や汗を流していた、ひとりの文官だった。生真面目そうな細く黒い瞳が、懇願するようにひたすら皇帝へと向かう。だがしかし、皇帝はその視線を受け止め損ね、困ったようにうろろうと瞳を彷徨わせるばかり。文官は視線を藍色の絨毯へと落とし、薄い唇を嚙んだ。

ふっと空気が動き、はじけるような高笑が謁見室に響き渡った。

「そのインゼリアから仕掛けられたのです。これをご覧なさい、文官殿」

男はまだしつこく笑いながら、マントに隠れた左側の腕を差し出した。だが、そこにあるはずの左腕はなく、ただ中身のない袖がゆらゆらと揺らめいてあるばかりだった。

思わず息を飲んだ文官に、男はこの上なく優しい笑みを浮かべる。

「お聞き及びではありませんか？ ナツメ皇国が竜に滅ぼされたという話を」

「竜、ですと？」

紙のように白く血の気を失った顔を上げ、文官は告げられた言葉を繰り返す。あまりにも非現実的なその内容に、誰もが困惑したよ

うに男を見つめた。

幾多の視線を受け、男は再び皇帝へと向き直る。

「先ほどの言葉が足りず、申し訳ございません、陛下。私も、とても動揺しているのです。確かに我が軍はナツメと切っ先を交えんと出立致しましたが、いざ着いた時にはもう竜が彼の国を襲った後でした。それどころか、このように私たちまで襲われる始末。左腕を食いちぎられた私のはっきりと見たのです。おぞましき竜の姿を――」

「そんなっ、馬鹿な！ インゼリアの古竜がそのような振る舞いをするはずなど――」

「では、失くしたこの左腕はどうだと言うのです！」

押し殺したような声で細く反論を繰り返した文官に、男は途端に鳴り響くような大声を浴びせかけた。

対する文官だけでなく、御座に座る皇帝までもがびくりと体を震わせるほどの迫力に、場は息をする音も聞こえぬほどに静まりかえる。

その中でただひとり何の恐れも感じぬ男は、深く、深く息を吐いた。

「陛下の御前で取り乱すとは。申し訳ありません、私もこのような体になり、少しばかり気落ちしているのです。どうかご容赦を」

「よ、よい。許す。……しかしして、その話は真か？」

「お疑いならば、ナツメ攻略隊の中の誰に問うても構いません。私は嘘を申してはおりませんから。ただ、真剣にお考え頂きたいのです。このままインゼリアの暴挙を許せば、その牙は我が帝国にまで及びましょう。私はそれを防ぎたいのです」

一転して静かに、そして悲しみに満ちあふれたその言葉は、男を

猜疑の目で見つめていた者達の心にも真摯に届けられる。ただひとり、その暗く歪む緑の瞳をすぐ側で見ていた文官を除いては。

「わかった。その詮議は宰相に任せる。しかし、すぐに全軍を差し向けるには確かな証が必要でもあるのだ……」

不運に見舞われた者に同情を寄せるように、皇帝は伺いをたてるように男に言葉をかけた。その時点で、決断をまるきり任せてしまったことに気付きもしない。すべては男の思い通りだった。

「ならば、私を含め少数で偵察隊を組みましょう。あの国の防壁は確かに堅固ですが、ナツメより逃れてきたと言えば、なんらかの反応が見られるかもしれません」

最初の言葉よりかなり柔らかくなったその提案に、飲まれているとも知らず、皇帝はあからさまにほっとして頷いた。

「それならば許可しよう」

「ありがとうございます、陛下」

進み出た時と同じように美しい所作で皇帝の足下にぬかずき、男はちらりと隣で沈黙する文官へと視線を移す。

そして俯いたままでは誰にも見られぬその口元を、寧猛に歪ませる。

背筋を走る恐れに、その細い瞳を限界まで見開いた文官は、男の次の言葉にさらにおののいた。

「加えて少しばかりの我が儘をお許し頂けますか、陛下」

「な、なんだ？」

「私にこの者を預けて頂きたいのです」

それが末席の文官、ノウエム・セプテンベルとテラス・ガナド―
レとの出会いとなった。

幸か不幸か、まだ誰一人としてわからぬ混沌の中に――。

夜間訓練でよく行方不明になるのが私です

「あ、ウラバ様、どこに行かれるんですか？」

森から王宮へと行く途中、厩舎の近くを通り過ぎようとした私に声をかけたのは、午前中一緒に自衛隊体操をしていた見習い君たちだった。

にんじんみたいな赤毛に優しい顔立ちをしているのがティアオで、その声に家畜の間からひよつこりと顔を見せた、明るい茶髪なのがクワイ。そして黒に近い焦げ茶の髪に、静かな灰色の瞳をこちらに向け一礼したのはガン、かな。

ちようどいいや、隊長がどこにいったか訊いてみよう。

「ちび様の命令で王宮にね。みんな、隊長がどこに行ったかしらない？」

「こちらには来ていませんけど……ふたりとも、知ってる？」

ティアオの言葉に、少し離れたところにいた二人は手にした道具を置いてこちらに寄ってきてくれた。いい子たちだなあ。3人とも、年の頃は15、6歳くらいだろうか？

身長は私よりも少しだけ高いが、こちらを見つめるその顔にはまだ幼さの名残が見える。

「隊長なら宰相さまんとこじゃねえかなあ。最近、むっつかしい顔してこそそそしゃべってんだあ！」

底抜けに明るい声でそう言ったクワイが、「なっ？」と隣にいる

ガンをつつくと、彼は少し考えた後に「ん」と頷いた。

面立ちの優しいティアオがリーダー格で、落ち着きのなさそうなクワイがムードメーカー、ガンは真面目な実行役……みたいなものかな。なんとなく見ていて楽しい3人ではある。

二人のその言葉に、私はシムさんの執務室までの道順を思い浮かべた。そんなに広い王宮ではないけど、正直真っ直ぐたどり着く自信がない。見た目よりも中はかなり複雑な造りになっているからだ。むむ、と眉を寄せた私の顔を見て、ティアオが首を傾げた。

「どうかなさいましたか？」

「うーん、王宮の中っていまいちわかりづらいっていうか……迷子になりそうで」

「ああ、そうですね」

ティアオが笑って頷く。すると隣のクワイも「俺なんか、いまだに一回でたどりつけねー！」と声を上げる。近衛隊の見習いとして、それはどうかと思うよ、クワイ。

「王宮内は敵に侵入されても簡単に攻略できないよう、わざと複雑に作られているんですよ。前に隊長にそう教わったことがあります」
「建物全体に、王族の力。見た目より、広い」

わかりやすいティアオの説明に続けて、端的な言葉でガンが言う。
建物に王族の力？ 見た目より広いつてどういうことなんだろう。
疑問だらけの表情でガンを見れば、彼はすでにそれ以上言うことはないようで、ただ黙って頷いてみせる。いやいや、そんな「な？」みたいな顔をされても。

「法力の力が加わっているんです。だから、外観と中の広さが合わないんですよ」

つまり――不思議建物だ。私には攻略不可能だと言うことだけはわかった。

私が理解できていないことを理解したティアオは、困ったように笑う。ごめん、ごめんよ。夜間訓練でよく行方不明になるのが、私です。

新隊員の時に車両の夜間誘導訓練で、ひとりだけ違う道に誘導してしまった忌まわしい記憶が甦る。多分、昼間やっけていても結果は同じだっただろう。

ここは恥ずかしがってる場合ではなく、3人の誰かに案内してもらったほうがいいよなあ。

そう思って口を開きかけたちょうどその時、王宮のほうからやってきたのはまさに、今の私の探し人であるジュンレン隊長その人だった。

「ちょうど良かった。おまえたち、ウェイフオン様を見なかったか！？」

珍しく息せき切って慌てた様子の隊長に、問いかけられた3人が私を見返る。ということで、素直に手を挙げる。

「はい、私知ってます。裏の森の、禁域ってところです。それで、ちび様も隊長を呼んでました」

「禁域だって？　ウラバ、『招かれた』のか？」

とんでもない言葉を聞いたって感じで隊長が、その茶色の目をまん丸くする。結構いい年齢だと思うんだけど、そんな表情をするとなんか可愛らしく見えるから不思議だ。例えると、森の熊さんぽい。ハチミツ大好きなほうの。

禁域、の言葉に隊長だけではなく見習い3人も即座に反応した。

まるで珍獣でも見るかのように、まじまじと私を見つめてくる。なんていうか、私何かまた間違えました？

ちび様の時のように、いきなり攻撃されないかなあ、なんて警戒しつつ頷く。

「招かれたっていうか、勝手に入り込んだっていうか。あ、でもちび様は別にいいみたいなこと言って……はいないかも……」

言いながらだんだん不安になってきた。そう言えば、入っていいなんて許可は受けていない。何だかんだとその話題がずれただけだった。

でも、ちび様あの後別に怒ってなかったし、と言い訳しようとした私の手を、なぜか隊長はがしりと両手で包み込んだ。え？

「おめでとう、ウラバ！」

「おめでとうございます、ウラバ様！」

ぶんぶんと上下に手を振られ、その遠慮のない力にあわあわとしていた私に、見習3人までもが嬉しそうな笑顔を見せる。

なんで？　なんでええ！？

「よ、よくわからないんですけどっ」

「ああ、こうしていられんな！　とにかくウェイフォン様に会わなければ！　ナツメから難民が来ているんだ」

ナツメ。地面に転がっていた時に小耳に挟んだその名前。難民ってことは、やっぱりどこかで戦争があったってことなのかな。

私が隊長に訊くよりも早く、彼は大柄にしては素早い動作でさと裏の森へと走り去ってしまった。な、なにもかもわけのわからないうちに……。

激しく事情置いてけぼりをくらった感のある私は、啞然としたまま3人を振り返る。

そこにあっただのは、きらきらと期待に満ちた六つの瞳。

「なんかよくわからないんだけど……めでたいの？」

「もちろんです！」

「あったり前だろうっ」

「ん」

穏やかなティアオが興奮したように頷くのを始めとして、クワイは何言っただみたいな口調だし、無口なガンまでも何度も深く頷いている。落ち着こうよ、君たち。

とりあえず3人に合わせ、私も少し引きつつた笑みを浮かべてみせる。こう、空気を読んで周りに合わせちゃうのは日本人だよなあ。そんなことをぼんやり考えている私の前で、3人はなんだかしみじみとした口調で話し合いを始めた。

「これでようやく隊長も安心だね。十年かあ、長かったねえ」

「アウイスさんも喜ぶって。周りからせつつかれてっし」

「慶事」

うわあ、なんかアウエイ感ハンパない。なんか、私が禁域に入れたのが喜ばしいことで、それがなぜだか隊長の喜びにもつながる、と。

わっかんない。全くわっかんないよ！

「なんか今の会話の中でそんなに嬉しいこと、あった？」

「だって、ちび様が禁域に入れたんだろ？　だったらめでたいじゃん。なんか言われたろ？」

そんなに大事な場所だったんだろうか。知らないって恐ろしい。人ごとのように思いつつ、先を促す。

「それと隊長となにがつながるの？」

「隊長は長いこと付き合ってる女性がいるんですけど、どうしてもちび様のご結婚するまでは自分が先にできないって言い張っていて……」

「頑固」

髪と同色の眉を困ったように下げてティアオが言えば、追い打ちを掛けるようにガンが同意の言葉を重ねる。うわあ、なんか一気に昼のワイドショー的な展開。

そうだよな、隊長だってあの通り責任ある仕事に就いているし、いい歳だし。そういう相手がいたっておかしくない。むしろ、まだ独身ってほうが驚きかも。

「だけど、ちび様がウラバ様を禁域にいらたってんなら、隊長も結婚できるじゃん！ だからめでたいのっ」

「えええええ！？」

なにそれ、そんなこと聞いてないんだけど！

っていうか、なんでそうなる！？

驚きのあまりぱくぱくと口を開いて、言葉にならない思いを表す私に、3人はいまさら何驚いてんだみたいな表情になる。

そんな意味があるなら、むやみやたらに入り込まなかったって！

「あれかもしれないですね。ちび様の母上様に少し面影が似ているというか……」

「あっ、それ俺も思った！ ウラバ様、のっぺりしてるし！」

クワイの邪気のない評価に、知らずに顔が険しくなるのを止められない。

そりゃあ、このインゼリアの人たちに比べたら、私の顔は少々……いや、かなりのっぺりとして見えるよ。確かにね！

だって、なんかインゼリアの人たちは外国感ありまくりだし、彫りも深いし美形は多いし。私が悪いんじゃない、人種の違いだ！

クワイの情け容赦ない表現に、ちよっただけ涙目になりながら反論しようとしたその時。ちび様のところへ行ったはずの隊長が、来た時よりもずっと切迫した表情でこちらに向かって走ってきた。その顔には、いつもの余裕すら感じられない。

「よかった、まだここにいたか！」

たどり着いて、少しだけ肩で息を整えると、隊長は真剣な面持ちで私たち4人を見た。

「ウェイフオン様からの伝達だ。これより『祭』を行う。各自、準備に当たれ。今回は『収穫祭』になるだろうから、迅速に近衛の指揮下に入れ。わかったな？」

初めて聞く隊長の固い声に、知らず私までもが肩を強張らせる。

見習いの3人はもっと、ずっと真剣な表情でそれを聞き、隊長の視線を読んだかのように何も言わずに機敏に走り出した。

呆然とそれを見送る私に、隊長が声を掛ける。

「ウラバ、おまえも大事なものを身につけておいてくれ。『祭』の間は王宮の警備も手薄になるからな」

「は、はい。……わかり、ました」

納得はできないけど、隊長がそう言うならばそれはちび様の命令

なんだろうし、それに従って動き始めた3人を見ても、そうとう重要なことなんだと感ずる。

祭がそんな風に王様の意向で突然始まるなんて、私には経験がないけど。郷に入りては郷に従え。私は隊長に向かって頷いてみせると、一礼して自分の部屋へと走り始めた。

三歩以上は駆け足！

「いっち、いっち、いっちにっ！　そおーれっ！　いっちにいっちにいっ」

『三歩以上は駆け足』が基本な自衛官な私。
走り出すとついぶつくと歩調をかけてしまう、これも洗脳のたまもの——いや、もはや呪いに近い。

同期とね、バスで40分——街に降りるまで40分だぞ、しかも片道640円！——かけて遊びに出て、しゃべりながら歩いていてさ。何が悲しいかって、見事に二人の歩調がぴったり合っていることだよ！　行進か！

なんか、人と足並みが揃ってないとお尻がムズムズするんだよね。そして一列縦隊とかになっちゃうんだよね。1で左から踏み出せよ！　みたいな。

極めつけに、通り過ぎる一般人に思わず敬礼しそうになった時には、ああもう早くなんとかしないければって思った。自分に対して上官に敬礼欠くとまずいから、人を見たら反射的に手が上がるっていうか。「お疲れさまです！」って言いたくなるっていうか。

だから、中庭に出る為に角を曲がって、誰かにぶつかった時に反射的にそう言っちゃったのは私がおかしいんじゃないよ！？

「うわ、おっ、お疲れさまですっ！」

「ぐあっ」

こんなマタドールと闘牛的な状況下において、それでも挨拶を忘れなかった自分を褒めてあげたい。というか、痛い。

額を思い切り誰かの胸に打ち付けてしまったらしい。涙目で額を抑えると同時に、私がぶつかった相手は地面に転がって悶絶した。まだ、下が草地なのが幸いだったなあ。

額をさすりつつそんなことを考えている私の前で、その人は思いきり咳き込んでいた。どうやら頭突きがみぞおちにクリーンヒットしたらしい。私、石頭だしね……。

「す、すみません！　大丈夫、ですよね……？」

あまりに長く苦しんでいるその姿に、思わず確認口調になってしまふ。インゼリアにおいて『緑の乙女』とか『俺の嫁』とかいう称号ならまだしも、『頭突きで肋骨を折った女』とかは嫌だなあ。

地面に膝をつき、倒れたままのその人を顔を覗き込む。

薄汚れてぼろぼろになった布の下から覗くのは、同じようにくたびれて汚れきった衣服。靴の先まで泥にまみれていて、どう見てもインゼリアの人ではないように思える。

なにか、テレビの中でよく目にした、戦乱によって行き場を失った人たちのような……。そこまで考えて、私はさっきの隊長の言葉を思い出した。

『ナツメから難民が来ている』

もしかして、この人がそうなのかな。

胸に手をあて、肩で息をしているその人を私はさらにじっと見つめた。布に隠れていて顔がよく見えないけど、印象としては……目が細い。すごく細い。これ、ちゃんと前見えてるのかな。

そんな失礼なことを思っていると、その人は深呼吸を繰り返した後、ようやく私を見て口を開いた。

「見苦しいところをお見せしまして、申し訳ございません」

まだ少し苦しげだけれど、とても丁寧で落ち着いた口調に、私はほっとして手を差し伸べた。どうやら不名誉な称号はもらわないで済むっぽい。

「こちらこそ、ごめんなさい。急いでいて、前方不注意でした!」
「いえ、私こそぼうっとしていたものですから、どうぞお気になさらず」

私の手を取って立ち上がったその人は、意外と上背のある大人の男の人だった。頭から被った布の間からのぞく髪は灰色。少し乱れてはいるが、几帳面に整えられ、後ろのほうでまとめられているらしい。

私の感覚で言えば、そこそこ整った顔立ち。今は煤や泥で汚れてはいるが、なかなかの容貌なんじゃないだろうか。目は細いけど。

「あのう、もしかしてナツメからいらした方ですか?」

転がった際についた泥を神経質に払いのけているその人に、ぶしつけかとは思いつつその質問をぶつけてみる。個人的に、できるだけ周囲の状況を知っておきたいというのは、一種職業病だろうか。私のその問いに、目の細い男性はあからさまにびくりと肩を揺らせた。そして探るような、恐れるような視線を私に向ける。

「失礼ですが、あなたは……」

「あっ、すみません! 私、末葉って言います。ええと、その、インゼリアの近衛隊見習い……の見習い、みたいなもんで」

「近衛兵? 女性が、ですか?」

私のそのしどろもどろな自己紹介に、糸のような瞳が少しだけ見

開かれる。一瞬覗いた瞳の色は、私と同じ黒色。

本当は体操指導員みたいなもんだけど、「この国の王様の暫定嫁です」とか言うよりかは、そのほうがいいよね。頭の残念な子扱いされたくないし。ここは、もっとボロが出る前に退散しといたほうがいいのかなあ。

訝しげに眉をひそめた男性を前に、私は誤魔化すように愛想笑いを浮かべて頭を下げ、当初の目的通りに王宮へと向かおうとした、その時。

「ここにいたのか、クガツ」

指の先を痺れさせるような、深い声音。特に高音でも低音でもなく、だけれどもどこか人を惹きつけて止まない、そんな響きが背後から聞こえてきた。

ほとんど反射的に振り向けば、そこにはやはり長身の人影。目の前の、クガツと呼ばれた男性と同じように薄汚れた格好のその人は、びっくりして固まる私の前にゆっくりと歩み寄ってきた。

そして、どこか洗練された物腰で膝を折る。

「失礼。私はフクと申します。この者が何か粗相を？」

どこかの物語に出てくる騎士のようなその仕草に、思わず顔が赤くなるのがわかる。膝をついたままこちらを見上げる瞳は、鮮やかな緑色。顔を上げる動作につられてさらりとこぼれた髪は、眩しいほどの金色だった。

整いすぎといっても過言ではない秀麗な顔は、やはり泥にまみれて汚れている。この人も、ナツメからの難民なんだろうか。

「いえ、あの、私のほうがぶつかってしまって。えっと」

「申し訳ありません。私たちは決して怪しい者ではなく、この度ナ

ツメより参ったものにございます」

美しいって一種暴力だよね、なんて思いつつ、私があたふたと要領の得ない説明をすると、その人——フクさんはにっこりと笑って立ち上がった。

ナツメから……やっぱり、なにかよくないことが起こっているんだろう。この二人の姿を見ただけで、私にも容易に察することができる。何か、不穏な空気。ふたりとも、少し疲れて見えるのはそのせいなんだろう。

そんなことを考えつつ私がフクさんをじっと見つめていると、その視線を勘違いした彼は自嘲気味な笑みを零した。

「これは醜き姿を……。大変失礼致しました」

ずっと右腕で隠すように抑えたその場所に、あるはずの左腕が見えない。頭から被った布に覆われてはいるけれど、不自然に空いた空間に自然と目がいく。左腕が、肩のすぐ下あたりでなくなっていた。

あ、と自分のぶしつけな行為を思い返して恥ずかしくなる。最初は気がつかなかったとはいえ、その後にも見つめ続けるなんて失礼だ。

「ごめんなさい！ あ、そういう意味じゃなかったんですけど！」
「かまいません。突然現れたのはこちらのほうですから」

儚げに笑う美人さんを前に、猛烈に私は恥ずかしくなる。

ああああ、これはもう、陸曹試験に落ちたあの中隊飲み会くらいにいたたまれなさ全開！

私が「あー」とか「うー」とか唸りながら、なんとか弁明しようと頭を捻っていると、不意にその頭に温もりを感じて、私は再び固

まった。

見れば、どことなく真剣な光を宿したフクさんが、私の髪をするりと撫でる。

「黒き髪……黒き瞳……、その容姿……」

まるで何かに取り憑かれたかのように、さっきまでの柔らかさが消え失せ、どこか茫洋とした瞳でそう繰り返す。私の肩口より少しだけ長い髪を、何度も撫でる。

ああ、ちび様台風のあと、結ばないで放ったらかしにしておいたのがまずかったのか。私がどうしようかとうろろう視線をさまよわせれば、傍にいたクガツさんがはっと我に返ってその手を止めた。

「ふ、フク。気軽に娘の髪を触るものではありません……いや、ない、と思う」

なんだかすごく言いづらそうに、これでもかという苦渋の表情をしてクガツさんがそう言えば、その言葉にふと我に返ったかのようなフクさんが私の髪から手を離れた。

「失礼、致しました……」

「いえ、あの、お気になさらず。私、ちょっと急ぎの用があるので……」

どこか呆然と謝罪を口にしたフクさんに、私は笑みをみせてから軽く頭を下げる。

ちび様や隊長の言うところによると、悪意をもつ人は国にすら入れないらしいし、特に悪い人たちではないんだろう。むしろ、大変な思いをしてインゼリアに来たとしたら、失礼な態度をとっちゃったかも。

その挨拶に軽く頷いてくれたクガツさんにもう一度頭を下げて、私は当初の予定通りに自分の部屋へと走り出した。

それにしても、『クガツ』に『フク』だなんて、こっちにも似たような発音があるもんだ。特に『フク』なんて大叔母の名前だし。地味な名前にあんなに綺麗な顔だと、そうそう忘れられないよなあ。

そんなくだらないことを考えながらも、私はなんとか迷わず自分の部屋にたどり着いたのだった。

だからもちろん、シムさんが物凄く機嫌良く私の部屋に向かっていたなんてことは、知るよしもなく――。

みなさんに笑われるのもお仕事のうち

ようやく自分の部屋で一息ついた私は、清潔に整えられた寝台の上てっぱちに荷物を並べ、唸っていた。

鉄鉢、迷彩服上下、サスペンダーに弾帯、それにつけてた弾倉入れや空弾倉、救急品袋やら銃剣。あと、なんとか泥だけ落として出来る限り磨いておいた半長靴。

私がここで貴重品と呼べるのはこれらの官品と、あとは89式小銃くらいだ。いや、最後が一番大切な。

けどさあ、『祭』ってお祭だよなあ。しかも『収穫祭』とか言ってたよねえ。なんか、こういう外国っぽい場所の収穫祭なんて想像つかないけど、唯一わかるのはそんな中にフル装備で小銃担いだ私がまったく似合わないだろうってことだ。

想像するだけで腹筋崩壊する。シユールすぎるだろう、いくらなんでも。

富士の訓練に行く時に寄るサービスエリアでの、あの一般客に混じった時のいたたまれなさの倍はするね、きっと。

そして、訓練場までのトラックの荷台で顔を緑に塗りたくっている時、後ろの一般車にもものすごく指さされて笑われた時のあの感じ。赤いスポーツカーで彼女といちゃいちゃドライブっぽいその車に向かって、発砲許可を求めたのは私だけじゃなかった。少なくとも、二戸3曹は目がマジだった。

「やっぱり、89くらいかなあ。なくなるとすごく困るけど、持ち歩き可能なものって」

ひとりごちつつ、小銃を手取る。側は黒く鈍い光沢を放つそれ

は、見た目より重くはない。新隊員の時に持たされていた64式に比べれば、なお軽く感じられる。

私専用の小銃なので、愛着もある。同期の武器オタクには負けるけど、密かに『レイ・セフォー』という名前まで付けてある。

ここ1ヶ月、一応時間を見つけては、余っている布と油っぽいものを調達して整備済み。複雑な造りじゃない89でよかったよ、本当に。

まあ、今手元にある装備品の中ではこれが一番重要だし、これを持って歩くことにするか。

先に銃剣付けておけば、ちょっと変わった剣ってことでなんとかなりそう？

「まあ、最悪富士に戻った時、他は無くしたって言ってもなんとかなる、よね」

もちろん、なんとかしてもらおう立場ではあるけれど。

とりあえず、そんなこんなで貴重品について自分の中で折り合いを付けると、寝台の上に引っ張り出したものをまた元の箱の中に収める。どうか盗まれませんように！

手のひらを合わせて思わず神頼みをしていたその時、突然大きな音を立てて部屋のドアが開く。

あまりのどつきりに盛大に身体を揺らし、あわあわと扉のほうを振り返った私の目の前にいたのは、白髪のロマンスグレー——いや、この国で2番目に偉いはずの、シルワールム宰相だった。

「しっ、しっ、シムさんっ!？」

「ウラバ様!」

変に裏返った声で私とその名を呼べば、五十年くらい前はさぞかし女泣かせであったろうその美形のダンディ宰相様は、なぜか物凄

く感激に満ちた表情でこちらに突進してきた。
そのまま無言でがしりと両手を取られる。あれっ、なんだろうこの既視感。

「ウラバ様、よくぞご決断下さいましたな！」

「え、あの」

「ウェイフォン様の幼少より、そのご成長を見守ってきたこの私^{わたくし}。もう歓喜のあまりいても立ってもいられず、失礼を承知で参りました……！」

やばいやばいやばい。なんかよくわかんないけど、すごい勢いでやばい感じがするよ！

だって、シムさんなんか号泣してるし！

普段落ち着き払ったこの方が、女性の部屋にノックもなしに突撃してきた時点で私の何かが詰んだよね。なんていうか、ちび様関係の何かが。

「し、シムさん、あのですねっ」

「ああ、これは申し訳ございません！ 私としたことが肝心なことをすっかり忘れておりました！ よい、入れ！」

き、聞こうよ！ 私の話も聞こうよ！ インゼリアの人たち！

懷から出した上品なハンカチで顔を拭い、シムさんは扉の向こうへと声を上げた。すると、入ってきたのは街の奥様方。手に手に、なんだか煌びやかな衣装を携えている。

うわあ、なんかものすごく読みたくない空気が蔓延してるよ。そして、シムさんが笑顔。めっちゃ笑顔。

「急ぎ用意したもので、ウラバ様のお身体に合わないものもあるかとは思いますが、とりあえず当てて見てみるだけでも思いました」

「ええと、それはまたわざわざ、ありがとうございます……、じゃなくてっ」

「こちらの純白のものは、ここ最近の流行のものらしいのですが、私はやはりこの深緑しんりよくのほうがよろしいかと」

どうしよう、にこやかで穏やかながら、この人ものすごく押しが強い。さすが一国の宰相様……なんて感心している場合じゃないよ！にこにこ笑っている奥さん達が私の身体に当てているそれは、どこからどう見てもドレス。しかも、婚礼衣裳的な何か！誤魔化さないで言えば、ウェディングドレス！

あまりの展開についていけない。口を開けたまま固まる私に構わず、シムさんは私の顔と衣装を見比べながらひとり真剣な口調で語りかける。

「うむ、やはり深緑ですな。……ああ、何だかウェイフオン様の母君を思い出します。ウラバ様とよく似たお顔立ちに、黒髪黒い瞳がまた緑の衣装によく映えて……」

どこか遠い目をして、そんなことをシムさんが話し始めたその時。ひどく乱暴な足音が遠くから聞こえてきたかと思ったら、再び私の部屋の扉が乱暴に開け放たれた。

ねえ、ちよつとノックするとかそういうことはないのか、この国！

「シムっ！ 姿が見えないと思ったら、やっぱりここかよ！」

「おお、ウェイフオン様！ ちょうどよかった、今から誰か呼びに行かせようかと」

肩で荒く息をしながら、走ってきたからなのか他の何かか、顔を真っ赤にしたちび様がそこにはいらっしやった。いらっしやっちゃった。

全身から怒りのオーラを発しながらこちらへやってきたちび様は、衣装と私を交互に見て深いため息をつく。いや、私の希望じゃないですよ！？ 私はどっちかっていったら白のほうが好みですよ！？ ……私も今、とても混乱しているんです。

「訊きたいわけじゃねえが、一応訊く。シム、ここで何をしてるんだ？」

引きつった笑みを浮かべたちび様が、威厳を保つように腕組みをしてシムさんを睨み付ける。律儀すぎて涙が出るよ、ちび様。対して、シムさんは恐ろしくマイペースに口を開いた。

「それはもう。もちろん、ウェイフオン様とウラバ様の婚礼の打ち合わせにございますよ」

「だから、んなことぜってえ、あり得ねえつつただだろうが！」

雷が落ちるっていう比喻がこんなに当てはまる場面を、私は初めて見たかもしれない。勢い、ちび様の身体から例の法力って奴が放たれて、強い風が吹き抜ける。煽られてばらばらになった衣装を、奥さん達は慌てることなく拾い集め始めた。

なんていうか、これって日常？ みなさん、温かい目で見守ってらっしゃるんだけども。

「そのように恥ずかしがらずとも。そのお歳で初婚というのは確かに照れるのですが、妻を持つとはよいものですよ、ウェイフオン様」

「おまえ、昔から無自覚に失礼なんだよ！ っていうか、別に照れてねえ！」

そんなに真っ赤な顔をして言っても、あんまり説得力がないです、

ちび様。

ちび様の怒りを悠々と受け流し、シムさんはシムさんでマイペー
スに話を続ける。なんだろう、おじいさんと孫？

そろそろ私の話も聞いて欲しいかな、なんて思いながら私は、た
だただそんな二人をぼけっと見ているだけ。

その私にちらりと視線を向け、気まずいような複雑な表情をした
ちび様は、咳払いをひとつ。

「とにかく、そんな話は後だ、シム。さっきジュンレンから報告が
上がった。ナツメの難民が王宮についたとな」

「ナツメの……！」

その単語が出た途端に、今までのゆるい空気はすぐに緊張を孕ん
だものに取って代わる。驚き目を見張ったシムさんに、ちび様は大
きく頷き返した。

「予測よりも早かったが、中庭にまでは入れてある」

「中庭、ですか……少し近すぎるのでは？」

「だが、うかつに民達の中に入れるわけにもいかねえからな。俺も
おまえもいる王宮に配した方が対処のしようもあるだろ」

「御意」

ちび様の言葉に同意を示したシムさんが、ちらりと視線を私のほ
う——衣装を持った奥さん達に向けると、彼女たちは心得ているか
のように静かに一礼し、部屋を出ていった。

取り残された私はどうしたらいいもんかと、ちび様とシムさんを
交互に見つめる。これって、私が聞いていてもいい話なの？

「問題は、こいつか……」

眉間に幼い顔には似合わない皺を寄せ、ちび様が私を見る。い、いちいち失礼だなあ！

しかしからかうでもないその真剣な表情に、文句を言う為に開きかけた口を閉じる。その深い青色の瞳の中には、案じるような色が見えた気がしたから。

そのちび様の様子を見て、シムさんが安心させるかのような口調で告げた。

「それならば、近衛をつけましょう。ジュンレンは出せませんが、他の者を――」

「あのっ、別に私に人を割いてもらわなくてもっ」

事情はよくわからないけれど、なんだか私がいることによって多少なりとも迷惑っぽくなってるような気がして、私は慌てて会話に割って入る。

これからお祭りやらなんやらで忙しくなるって時に、10人しかない近衛隊から私のために人を割いてもらうなんて。これでも私、腐っても自衛官だし！

と、特技は車両整備だけでもさ！

「ウラバ」

さらに言い募ろうとした私に、いつの間にか傍に来ていたちび様が静かに声をかけた。ひと言、名前を呼ばれるだけで背筋が伸びるような、そんな声音で。

強い決意を含んだような、けれどどこか人を安心させるような、そんな表情をした彼はそっと私の手を握る。私が驚いてちび様を見ると、彼は動揺することなく微笑した。

「おまえは俺が守ってやる。だから、言う通りにしろ」

力強いその言葉に思わず頷く私に、ちび様は今度はいつも通りの笑みを返して手を離れた。遅れて自分の頬が赤くなるのを感じる。なんだ、これ！

離れていった小さな体温が、寂しい、だなんて。お、乙女過ぎるだろう、自分っ。

そんな私たち二人を黙って見つめていたシムさんが、振り返ったちび様に向かってひとつ頷く。それだけで、二人は意志の疎通がなかったらしい。

「ジュンレンには『収穫祭』の指示を出してある。忙しくなるぞ、シム」

「はい」

そうして二人は私に、できるだけ部屋にいるようにと指示を出すと、連れだって扉から出ていった。

急に静かになった部屋で、私はしばらく立ち尽くす。あ、あれえ？一向に下がらない顔の、というより全身の熱。今し方起こったことについて考えるのを放棄した私は、脱力して寝台に寝っ転がった。ち、ちくしょう、ちび様！ 男前すぎるってば！

さっきのちび様の言葉を、脳内エンドレスリピートしてしまった私は、そのまま夜まで意味不明な叫びを上げ続けたのだった。

降下、開始します！

「ひ、ま、だなあ！」

寝台でひとり恥ずかしさに悶え苦しむことにも飽き、私は大きくひとりごちる。

夜ごはんを美味しく頂いた後、いつもなら王宮の中にある図書室に行ったりするんだけど、お部屋にいなさい命令の為に断念。

こちらに来て、どうやら言葉や文字には困らないと気がついてからの、唯一の楽しみだったのに……。

テレビもない、ラジオもない、もちろんパソコンなんてものは欠片も存在しないこの国で、できることといったら読書か筋トレ。仕方がないので、私は筋トレを選択して寝台から降り、腕立て伏せの姿勢を取った。

まあ、もともと毎食後には筋トレを実施することにはしているから、日課なんだけど。

「いーちっ、にーっ」

ひとり掛け声をかけつつ、30回を目指して頑張る。顔の下に置いたタオルに顎をつけるのが、自衛隊式腕立て伏せのルール。そこから起きあがって、初めて1回となる。意外ときつい。

しかし、これをいつでも食後にやらないと、えいないしゃ営内者の自衛官はみるみる太ってしまうのだ。

なにせ、成人女性に必要な一日の摂取カロリーが1800だとして、自衛官が食堂で食べる三食の総カロリーは約3300。どういうことだろう、これは。

だから、部隊配属になって自主トレをしないでいると、簡単に肥える。食べても食べても痩せていった新隊員教育と大違い。その時のままの身分証を見ると泣けるくらいに、肥える。

かく言う私も、部隊配属後半年もかからずに五キロ太り、慌てて夜は走り込んだり筋トレしたりでなんとか戻したものだ。

「にじゅーくーっ、さ、さーんじゅっ！」

ぷるぷる震える二の腕を叱咤してなんとか顔を上げると、私は額にうつすらかいた汗を拭う。実は、意外と筋トレは嫌いじゃない。

こう、頑張ったら頑張っただけご褒美のようについてくる筋肉が愛おしい。無理をすると次の日にやってくる筋肉痛も愛おしい。好きな痛みは筋肉痛！

とか言うのと、二戸三曹には「なに言ってるん？」とか、ものすごく気持ち悪いものを見る目つきをされるんだけど……。

いいんだ、自己満足の世界だからいいんだ……。

一息ついて、目標はセミ腹だ！と腹筋の態勢を取ったちようごそこに、控えめなノックの音が響く。

「ウラバ様、よろしいですか？」

「ティアオ君？」

近衛の見習いは通常ならもう家に帰っているはずなのに、と意外に思いつつ腹筋でむくっと起きあがると、私は自室の扉を開けた。外にはなぜか分厚い本を何冊か抱えたティアオの姿。いつも通りに優しい笑みを浮かべている。

「どうしたの？ 勤務はもう終わってる時間だよね？」

「宰相様からの命で、しばらくウラバ様の警護につくことになりました。煩わしいでしょうが、どうかよろしくお願い致します」

「警護！」

ちび様にシムさん、あれは冗談じゃなかったのか……。再びあの時のちび様の瞳を思い描いて赤面しつつ、私はとりあえずとティアオを部屋へと招く。

「ま、まあ、じゃあ入って入って」

「あつ、いえ！ 僕は外で待機しますから！」

「えー、それじゃあつまらないよ。一人にも飽きてきたし、できればおしゃべりしたいなあ、と思うんだけど」

しかし、と戸惑うティアオの腕を引っ張り、なかば無理矢理に部屋へと入れる。両腕に本を抱えたティアオはよろめきつつ、仕方ないなあというように笑って、先導されるままに中へと入ってきた。

「その本、ここに置く？ ていうか、どうしたの、これ」

「もしかしたら時間を持て余していらっしやるんじゃないかと思いついて、図書室より借り出してきたんです。ウラバ様が本を好まれているって、ガンから聞いたものですから」

そう言えば、先週の貸し出し当番——とインゼリアでもいうのかは知らないけど——が、ガンだったような。

王宮の図書室といっても、どこも気取ったところはなく、広く国民にも解放されているらしい。もちろん、貸し出しは禁止のものもあるらしいけど。つくづくアットホームな国だよなあ。

「それでわざわざ持ってきてくれたんだ！ ありがとう、ティアオ君」

「礼には及びません。それと、僕のことはティアオとお呼び下さい、ウラバ様」

「よ、呼び捨ては慣れないし、困るなあ！　だって、ティアオ君だって『様』づけだし」

ちゃぶ台的なものに本を置いて、私たちはそこに置かれた座椅子に對面して座る。そこでも椅子なんてとんでもない、床で結構ですと言いたげなティアオを押し切る。

「ウラバ様をウラバ様とお呼びするのは当然です。僕を呼び捨てて下さらないなら、『緑の乙女』とお呼びすることになりますけど……」

よろしいんですか、とにっこり微笑まれ、私は完敗した。
いい性格だ、ティアオ……。

うなだれた私を楽しそうに見つめながら、それではせっかくですし始めましょうか、と彼は声を上げた。ん？

「始めるって、何を？」

「ええと、それではまず歴史からに致しましょう。外交にせよ、とにかく自国の歴史を知るところからですからね。あ、これは宰相様の受け売りなんですけど」

「歴史？　外交？」

「はい。ウラバ様はこちらのことをまったくご存知ないということなので、比較的簡単な歴史書を持ってきました。大雑把なところはありませんが、とりあえずは大きな流れを知識として入れて頂いた後、詳しいほうへといけばいいと思うんです。インゼリアは古い国ですので、最初から細かくやってしまうと覚え切れませんし」

「ちょ、ちよつと待った！」

手元にあった緑の厚い本を手に、ずらずらっと並べられたその言葉にストップをかける。

一体この子は何の話をしているんだ。なぜ歴史？

机の上に置かれた本をちらりと見れば、インゼリアの歴史書やら王名録やら、法術書なんてもので見える。さ、座学の時間……。

「ウラバ様？」

「ええと訊いていいかな、ティアオ。……な、なんで私がインゼリアの歴史を勉強するの？」

訊きながら、なんとなく答えがうつすらと見えなくもない。

お願いだから否定してくれ、との私の必死な眼力をものともせず、目の前の少年は何を今さらと言った風ににっこりと笑った。

「王妃様になられるのですから、必要でしょう？」

うわあああああああああ！！

心の中でもものすごい叫び声を上げつつ、私はごつん、と目の前のちゃぶ台に額を打ち付けた。突然の行動に焦るティアオを、この際しばらく無視する。

こ、こういうのを外堀を埋められるっていうのかな……。まさか、彼氏ができる前に結婚を迫られる男の気持ちを理解できるようになるとは思わなかった。

ていうか、ちび様が否定してるのに！ 王様が否定してるのに！

「大丈夫ですよ、ウラバ様。ゆっくりやっていけばちゃんと覚えられますから」

勘違いしたままのティアオの笑顔が眩しい。そ、そうじゃないんだよう！

もしかして、押しが強いのがインゼリアの国民性！？

どう言ってもわかってもらおうかと一人でフリーズする私に構わず、

ティアオはさっきの緑の本を開いてこちらに示す。

「ここに描かれているのがインゼリアの初め——王家の始まりの伝承です。この国の子供達が一番最初に習う、おとぎ話のようなものなんです」

「……竜と、女の人？」

ティアオが指さした場所に描かれていたのは、古めかしくも美しい一枚の絵。古い歴史の教科書にあるような、神話の挿絵のような緑色の大きな竜と、それに手を差し伸べる女性の姿が、シンプルに描かれている。

その独特な美しさに、私は王妃問題を否定することを忘れて見入ってしまった。

「インゼリア王族の始祖、『竜と花嫁』です。『竜の月』から大陸に降りた竜が、乙女と出会った場面を表しています」

「竜の月って、なに？」

私のその疑問にティアオは立ち上がると、窓辺に寄って引かれていた布を開け放った。

そこには、満天の星が輝く夜空。もちろんインゼリアには電気はないから、今夜のように晴れた日には、本当に降り注ぐような星々が見える。

ティアオは私に向かって手招きをすると、側にやってきた私にその夜空を指さした。

「3つの月がありますでしょう。あの右の月が、『竜の月』です。向かって左が『人の月』で、真ん中におわすのが『神の月』なんですよ。始祖はあの月から降り立ったと言われています。乙女の願いに応えて」

そうだ。ここと私の世界との決定的な違いが、これだった。

3つの連星のような月の存在。本当に、私はどこに来てしまったんだろう？

ふと心に差した不安の影に呼応するかのように、『人の月』に雲がかかる。私は何かひどく心細くなって、一步、窓辺から身体を離れた。

その私の様子に気がついたティアオが何か言おうと口を開きかけたところに、遠くから重いものがぶつかったような、そんな鈍い音がこちらまで響いてきた。

遅れるようにして、地震のような小さな揺れを感じる。

「な、なに!？」

「……なんでしょう。こんな揺れは初めてですが」

優しい面立ちのティアオが眉をひそめ、窓から王宮の外を見やる。素早くあたりに視線を巡らせた彼は、まだ窓辺の近くにいた私の背に手を置き、寝台のほうへと誘導した。

そして自身は再び窓辺に寄ると、窓を閉め布を引き、油断なくあたりの気配を窺うようにしてしばらく立ち止まる。

彼の赤茶の瞳が真剣な色を帯びていくのを、私はただわけもわからずに見つめているだけ。その間にも、物々しい音と軽い目眩のような揺れが続く。

ティアオのあの反応からして、ここには自然現象としての地震っというのではないみたいだけでも……。

「ウラバ様!」

「は、はいっ」

突然名前を呼ばれて思わず気を付けの姿勢を取った私に、ティア

才は扉のほうに移動しながら声をかける。

「僕は少しあたりを見えます。すぐに戻りますから、決して部屋からは出ないで下さいね」

「う、うん、わかった」

私が頷くのを見届けると、ティアオは安心させるように微笑んで部屋から出て行った。

なんというしつかり君。君もいったいいくつなんだ！

そうして手持ちぶさたになってしまった私は、そのままずとんと寝台に腰を下ろす。いったい、何が起こってるっていうんだろう。

なにか言い様のない不安。胸騒ぎが心を占める。

そうしてどのくらいの時間が過ぎただろうか、なかなか戻ってこないティアオに多少焦れた思いを抱えて寝台から立ち上がった、その瞬間。

耳をつんざくような音とともにやってきた物凄い衝撃に、私は立っていることかできずに床に尻餅をついてしまった。

さつきよりもひどく、今度は王宮全体が大きく揺れる。な、なんなの？

敷き詰められた絨毯のお陰でひどい打ち身を回避できた私は、恐る恐る立ち上がり、壁に手をつきつつ扉へと近付いた。

ティアオは外へ出るなって言ってたけど、もしもこれが地震とか災害の前触れなんだったら、とりあえず建物からは避難したほうがいいよね？

自分に問いかけつつ、私は扉の側に立てかけて置いた小銃を肩に担ぎ、意を決して扉に手をかけた。

「あ、あれっ」

なぜか押しても扉がびくともしない。

焦って何度も何度もやってみるけれど、外に何か障害物があるようではない。やいやや、やばいんじゃない。

そういえば地震の時とかは、揺れがおさまったらすぐにドアを開けたほうがいいって聞いたような。建物が歪んだり、何かが塞いだりしてドアが開かなくなると、そのまま逃げ遅れてしまうからって。まさに、この状況！

「ティアオ！ 隊長！ シムさん！ ちび様っ！」

大声を出して名前を呼んでみるけれど、むしろ人の気配自体が近辺にまったく感じられない。何かが扉を塞いでいるとして、私の腹からの声でも届かないくらいのものなのか。

これでも分隊教練、声の大きさ“だけ”はほめられたんだけどなあ……。

なんてしょんぼりしている場合じゃない。

この部屋は他に廊下へと続く扉は皆無だし、廊下に出られないと王宮の外にも出られない。

ティアオが事態を察してここに駆けつけようとしてくれてるとして、この状態じゃあ多分向こうからもこちらには来られないだろう。多少焦りつつも、地震に慣れていることや災害派遣に出た経験から、まだ少しは落ち着いて考えることができるみたいだ。ビバ自衛隊！

そうしてなんとか自分の気持ちを奮い立たせ、私は何か他の方法がないかと部屋の中を見渡した。

そこで目に入ったのは、さきほどまで夜空を眺めていたあの窓。

この部屋は外苑に面した二階。王宮の中心からは少し外れているけれど、外から回り込めば中庭を通ってちび様やシムさんのところに行けるだろう。

問題はどうかやってこの窓から下まで降りるかってことなんだけど……。

外の様子に耳を澄ませつつ、私は思いきって窓を開けてみる。しばらく布に身を潜ませて外を窺うけれど、さっきのような音も衝撃もやってこない。

それを確認し、私はそろりと窓から下を見下ろした。

「このくらいの高さからなら、なんとかなる、かなあ」

目測して、呟く。

私のいた12旅団は『空中機動部隊』ってのを掲げていて、旅団内の全ての部隊員がヘリでの移動と降下の訓練を受けている。

それはロープを使って自分の身体を固定し、輸送ヘリから飛び降りるって奴なんだけど……まさか、それで鍛えられた度胸が、こんな風に役に立つ日が来るとは思わなかったよ。最初、降下塔から飛び降りるのだって泣きそうになったこの私が！

芸は身を助く？　ってのも何か違う気がするけど。

そうと決まれば次はロープになるようなもの。丈夫で、ある程度の長さにできてとなると、やっぱりこの窓の布か寝台のシートだよなあ。

カラビナもハーネスもないし、シートだとただ単に身体にしつかりと固定するのみって感じで心許ないけれど、この高さであれば下は芝生だし死なないだろう……と思いたい。

なるべく余計なことは考えず、とにかく布をよってつなぎ合わせ、即席のロープ代わりを作することに専念する。

これを寝台の足に固定すれば、ほどこない限りは寝台自体が動いたり壊れたりすることはないだろう。天蓋つきの立派な奴だし。

ついでの銃剣も腰にくくりつける。靴ひもを銃剣止め代わりにして、鞆の先に開いた穴にも通してベルトに二重固定。こういうのを想定していたわけじゃないけれど、ひらひらとした服じゃなくてよかった。無理言って用意してもらった男性用のシャツとズボンがあるがたい。

全部が全部、かなり無理矢理当たってただけろだけど、やるしかないよね！

そうして後期教育で習ったロープの結び方を思い出しつつ寝台に固定し、反対の端を自分の身体に巻き付ける。足の間を通して、座席を作るように。

最後に深呼吸。落ち着いて、冷静に。こんなの、人生単位で考えればほんの少しの時間だ！

区隊付きの言葉を思い出し覚悟を決めると、私は窓枠に足をかけ身体を反転させる。

外を背にして、最後にもう一度深呼吸。
そして。

「こっ、降下ああああああああっ！」

震える声とともに両足を離したのだった――。

降下、開始します！（後書き）

※ リペリングについてはかなり大雑把な表現になっています。話の流れ的にこういう表現となりました。申し訳ないですが、ご了承ください！

※ 必要摂取カロリーの数字を訂正致しました。教えて頂いてありがとうございます！

持続走3キロ13分の実力を発揮する時

努力は人を裏切らない、とは教育隊でお世話になった班長から頂いた言だけど、私はたった今ものすごくそれに同意していた。人間やればできる！

最後の最後で手が滑ってしまったが、終わりよければすべてよし。こすれて真っ赤になった手に息を吹きかける。そして、勢いよく地面に着地したためにびりびりとしびれる足と、遅れてやってきた恐怖感に笑う膝を叱咤するように数回、拳で叩いた。

巻き付けたロープもどきをほどくついでに、身体の点検。自衛隊で普段からするように、両手で頭から足までを順番に触っていく。よし、特に怪我もなし。

降下途中で風にあおられ、外壁におでこが激突する場面もあったが、本作られたそれがへこむことはあっても私のほうにはダメージはなかった。なに、この妙な敗北感。

八つ当たりでロープもどきを地面に投げ捨てると、私はひとつ深呼吸。

それから肩にかけていた小銃をいったん降ろし、負い紐を伸ばしてから今度は斜め掛けにしっかりと背負った。

気持ちいなんだか障害物走のようでもある。

小銃を背負って綱をくぐり、地を駆け、自分の身体の倍もある壁にびたっと貼り付いてそれを乗り越えるという……ちよっただけ楽しくもある、あれ。

そうやって訓練の時のことを思えば、さっきまであった膝の震えも見事にすっと治まった。

いつの間にか、そんな風に根っからの自衛官根性が身に付いてしまった自分に苦笑して、私は王宮に続くはずの道を見据える。

この外苑を抜け、中庭の扉をから中に入り、そのまま行けば王宮中心部のはず。持続走3キロ13分という、体力検定1級の足を持つてすれば、そこまでの距離はあっという間。

胸の前にかかる負い紐を握りしめ、いざ駆け出そうとした、その時。

その目指す王宮のほうから轟音が鳴り響き、ここからでも見て取れるくらいの炎の柱が夜空に立ち上った。

それは訓練展示で見た戦車の射撃よりもすごい衝撃。それから振動。いったいこの国に、何が起きているというんだろう。

さっきまでティアオと見上げていた静かな夜空は、今は禍々しいほどの赤に染まりつつあった。私は無意識に唇を噛む。それでも、動くって決めたからにはここでひとり、おろおろしていてもしょうがない！

改めて覚悟を決め、私はその炎の明るさを頼りに王宮に向かって駆け出した。

暗い足下、砂利の敷き詰められた外苑の道を、転ばないように注意しながら走り抜ける。

震えはないけれど、まるで身体全体が自分のものではないような、変な感覚。緊張しているのか、パニックなのかすら判断ができない。こんな風に、自分一人で事に当たるなんて今までなかったことだから。

いつもならば、陸曹や曹長、それに小隊長の指示に従って動いているだけだった。それがどんなに心強いことだったのか、私は思い知る。

何かが少しずつこみ上げてきて、私はぐっと奥歯を噛み締めた。まだ、動き始めたばかりなのに、情けない。

色々とごちゃ混ぜになった気持ちをこらえながら、私は人影を探して視線をさまよわせる。けれど、この場所にもともと人がいないのか、それともすでにみんな避難しているのか。まったく人の気配は感じられない。

お祭りの準備をしていたはずの街の人たちはどうしているんだろう。

それに借り出されていた近衛隊や、隊長や、様子を見に行ったままのティアオ。クワイにガン、それからシムさんに――。

「ちび様……」

彼は確実にあの王宮の中にいるはずなんだ。

その名を呟けば、昼間に言われたあの言葉が甦る。

『お前は俺が守ってやる』

自然と目尻から流れた涙を、見なかったことにして乱暴に拭う。

本当は、怖い。

慣れたとはいえない知らない土地で、何が起きているのかもわからなくて、ひとりで。

だけど、私を助けてくれると言った彼を、私だって助けたい。あの小さな肩にこの国の全部を背負ってまっすぐ立っている、ちび様を放って逃げられないよ。

外苑を抜け、中庭との仕切扉の前で私はいったん足を止めた。

ここから中に入れば、中庭をはさんで王宮はすぐ目の前。大した距離を走ったわけではないのに、いつもより呼吸が上がっているのがわかる。緊張のためだろうか。

空気を吸うことよりも吐くことに重点をおいて、呼吸を整える。

すると、目の前のその扉が開き、中から人影が飛び出してきた。

「うわっ」

「あっ、……ウラバ、さん？」

驚いて飛びのいた私に、かすかに聞き覚えのある声がかけられた。

顔を上げ、暗がりを目を凝らしてよく見れば、それは昼間中庭で私が激突したクガツさんの姿だった。

泥と少しの血がついていた顔は清められ、服装もどことなく清潔なものに変わってはいるが、その細い目はよく覚えている。見れば、その近くにフクさんの姿もあった。

この異常な状況の中、少しでも見覚えのある人たちに会えた私は、少し嬉しくなって声をあげる。

「クガツさん！ フクさん！」

怪我を負った様子もなく元気そうなその姿に、私はほっと息を吐いた。

そういえば、ちび様とシムさんが話している時、ナツメからの人たちは中庭について言っていた気がする。とにかく、無事でよかった！

「ナツメの皆さんは、大丈夫だったんですか！？」

私のその言葉に、クガツさんは少し戸惑ったように口を開いた。

「私たちはこの通り無事ですが……。ウラバさん、あなたはどちらに行かれるんですか。中庭から先はすでにあちこちが崩れ、とても危険です。王宮を守っていた王の防壁も、今は消えてしまっているようですから」

荒れることのない落ち着いたその声に、私はいくらか冷静さを取り戻した。彼のどこか静かなたたずまいに背筋を伸ばし、そして私は扉の向こうにあるはずの王宮を見上げた。

ここからでは、中庭と外苑を仕切る塀によって全体を見ることはできないけれど、今も小さな破裂音と炎の熱が、かすかにここまで届いてきていた。

ぱきり、とどこかで木の爆ぜる音が心細さを煽る。

王の防壁が、ない。

それはちび様の力で成り立っていると、隊長や見習いたちが言っていたもののことだろう。

だとすると、その防壁が消えてしまっているというのは、ちび様にとってどういう状況なんだろうか。

無事であってほしい。それを確かめたいから、私は――。

「私は王宮にむかいます」

「しかし……」

暗闇の中、クガツさんの顔を見上げてそう言った私に、彼は何かを言おうとして言葉を切る。その背後から、クガツさんを制するように肩に手を置いたフクさんが私の前に立つ。

彼は少しの間私と視線を合わせると、ふわり、と優雅な動きで夜空を指さした。

その動きにつられて空を見上げれば、そこには炎の色を映したような月。

ティアオと見上げた時には優しい色をしていたはずの、竜と人と神様の月。

「月がすべて紅く染まり、人の月は煙に覆われてしまっています。この国には絶望が降りかかっている。それでも、行くのですか？」

「絶、望……」

聞き慣れないその言葉は、私の胸の内を大きく揺さぶった。心の中に生まれた不安はもやもやと渦巻いて、あの炎と煙のように胸の内に広がっていく。

だけど。

「私が困っている時によくしてくれた人たちがいるから、私は行くんです」

強く、ほとんど睨み付けるようにして、私はフクさんに言う。

かすかな炎の明かりに照らされたフクさんの金髪が、場違いなほどに美しくそれを反射して、揺れた。うっすらと、彼はなぜか満足そうな笑みを浮かべてみせる。そうして、「そうですね」とだけ静かに呟き、その手を下ろした。

ふたりのやり取りを困惑したように見つめていたクガツさんと、そのまままたじっと私を見つめているフクさんに、私はなんとか笑顔を作ってみせる。感謝の意を込めて。

「ご心配、ありがとうございました。おふたりも、ご無事で！」

次にどこかで会えたらいいなと思ったけど、それは言わずに私は中庭への扉を開ける。

気持ちを切り替えて。この先に何が起こっても、とにかく行けるところまでは行こう。

そう決意して、私は一歩足を踏み出した。

扉の中に消えていった娘の小さな背中を見送って、クガツと呼ばれた青年――ノウエム・セプテンベルは思わず深いため息をついた。最後までこちらを気遣うことを忘れなかった彼女が、この事態を生み出したのが自分たちだと知ったなら、どう思うのだろうか。柄にもなく、胸が痛む。

そんなノウエムの姿に目を細め、からかうような笑みをゆるりと

口の端にのせたフクー——テラス・ガナドールは、それに気付いて非難するような視線を送る彼に、ますます笑みを深くした。

「何を戸惑うことがある」

「……副官の地位に置きながら、あなたは私に何も明かさない。これはいったいどうしたことなのか。この国で、今何が起きているのです」

ノウエム自身、まさかテラスが自らこの地まで来て、皇帝への言葉通りに偵察だけで大人しく帰るとは思ってはいなかった。

そもそも、インゼリア国境には堅固な防壁があるのは周知の事実であつたし、上辺だけの扮装で身の内に持った害意を誤魔化せるとは思えない。だから、まずは使者を送り様子を探るべきだと進言したノウエムに、テラスが差し出したのは真つ赤な液体。

それが何かと問う間もなく、頬に、首に、塗りつけられる。

錆びて、喉の奥をぐつと押されるような匂いに、思わず顔をしかめたノウエムに、彼はやはりからかいの笑みを見せたのだった。

テラス曰く、これさえ身につければ防壁を越えられるということ。果たしてその通り、伺いも立てずとも、防壁はなんの抵抗もなく自分たちに開かれた。

そうしてテラスと自分を含めた6人の偵察隊は、インゼリア王宮の中庭まで通されたのだった。

しかしながら、インゼリア王は慎重な対処を見せる。

彼らを招き入れた中庭に防壁を施し、建前は安全の為としながら自分たちをそこに押し込めたのだ。

大胆ではあるが合理的なその対応に、ノウエムは唸る。中枢に近すぎる感はあるが、防壁がある以上、こちらは好きに動くことはできない。そしてなまじ民草の中におくよりも、ずっと監視がしやすいだろう。

自ら中庭をあちこち見て回ったが、さすがに穴らしきものはなか

った。

その途中、さきほどの娘にぶつかられたことを思い出したノウエムは、問いに答えないテラスをただじっと見つめた。

ノウエムは軍人ではない。少しでも知己のある者が巻き込まれていくだろうということを、自分の中でうまく割り切ることができなかった。

そんなノウエムにかまわず、テラスは闇夜に軽く右手を挙げる。すると、どこからともなく四つの影が現れ、彼の足下に跪いた。

「狩りの開始だ。目に付くものはすべて滅せよ。ただし、あの娘は私のもとへ」

静かだが重く響くその命に四つの影は黙って頷くと、現れた時と同じように気配もなく、闇の中に溶けていった。

その指示の内容にノウエムは驚き、さきほどのことは忘れて再びテラスに声をかける。

「なぜ、あの娘を」

「気に入ったからだ。それ以外の何がある？」

当然のことのように返され、ノウエムは何も言えずに黙り込んだ。確かに気だては好きそうな娘だが、これといって何か特徴があるわけではない。そこらにいくらでもいるような、そんなただの娘に彼が興味を示すものが何かあったのだろうか。

しかも、帝国軍内で『剣』^{つるぎ}と称される精鋭部隊に直接指示を出してまで。

納得できずにもう一度言葉を重ねようとしたその時。

轟音が響き、ひととき大きく上がった炎がテラスの横顔を闇夜に浮かび上がらせた。

完成されすぎたその白皙の面に、紅い炎が映りこむ。開け放たれ

たままの扉から熱をはらんだ風が吹き付け、彼の豪華な金の髪をなぶる。

そして、歪められた鮮やかな緑の瞳を見た瞬間、ノウエムは息を飲んだ。

肉食の獣のようなそれが今は愉悦を湛え、燦然と輝いている。

本能に根ざす畏れに近い感情で、発するはずの声は喉の奥にへばりつき、ただ病にかかった動物の鳴き声のような音が漏れただけだった。

そこに、今度はふたりの近くで爆音が起こる。はっしてそちらを見上げたノウエムの瞳に、吹き飛ばされてこちらへと落ちてくる屋根の破片が映った。

避けられない、と身を固くしたノウエムの身体を中心に、突然風が巻き起こる。それは暴力的のほど強く頭上までの昇り、渦巻いたかと思うと飛んできたその破片をいとも簡単に消し去った。名残のように、塵になったそれがぱらぱらと降り注ぐ。

目を見開いたまま振り返れば、そこにはこちらに手を掲げたままのテラスの姿。

その手から発されたのだろうあの力は、間違いなく法の力だった。それを見せつけられたノウエムは、今度こそ完全に言葉を失って立ち尽くす。この場に、決してあってはならない力だったからだ。

テラス・ガナドール。帝国の第一王子は、王族の血を受け継ぎながらも法力に恵まれなかった。なかった、はずだ。

だからこそ王族を離れ、皇帝の臣として下りここにいます。

何事もなかったかのように身体を覆う布を翻し、背を向けたテラスにノウエムは喉を潰され出もしたかのような、無様に震える声をかけた。

「テラス・ガナドール！ あなたは……あなたは、いったい“誰”なんですか！」

その問いに、テラスは一瞬歩みを止める。
しかし振り向くことなく、ただ感情の読みとれない声を闇に響かせた。

「知りたくば、どこまでもついてくるがいい。私の隣で、すべてをその目にせよ」

そうしてそのまま、彼の姿は炎の明かりも届かない闇の中へと消えた。

残されたノウエムは、額から流れる熱さとはまったく違う種類の汗をそっと拭う。彼がわざと自分に力を見せつけたのだ、ということとはわかった。

だが、それで何になるというのだろう。

ノウエムがそれを本国に報告でもすれば、テラスの立場はすぐに危険なものになる。その立場上、常に篡奪の疑いをかけられながらもこうして軍の要職に突いていられるのは、彼が所詮“出来損ない”だ、という認識が皇帝派にあるためだ。

才覚に優れ、人を惹きつける魅力を持ち、その外見だけでも現皇帝より優れる兄王子に、法力までもあったとすれば、今の反皇帝派が放っておくまい。

そうなれば、争いになる前にその種となる彼は軍から追放。最悪、幽閉か処刑となるだろう。

以前、ノウエムが知っていたテラス・ガナドールには、弟である皇帝に対する歪んだ感情が確かに見えた。上辺を優美に装っても、いつでもその瞳はほの暗く燃えていた。

けれど、今の彼は――。

「知りたくば……」

かけられた言葉の意味を探るように、反芻する。

そうして意を決すると、ノウエムは闇に目を凝らし、テラスとの背を追って歩き出したのだった。

180ミルの夜間行動

「シムさーんっ！　ちび様ーっ！」

呼べど叫べど、帰ってくる声はなにひとつない。

あちこちでくすぶり続ける火と、そこから発生する煙に包まれた廊下で、私はひとり泣きそうになっていた。

さっきから叫び続けた喉はもう限界に近い。吸い込む煙でよけいに痛みが増す。

瓦礫をようやく乗り越えて中に入ったのはいいものの、外からの明かりもほとんどなく、ちらほらと見える火の気を頼りに歩いていた私は完璧に迷っていた。

暗さに目を少し慣れてきたものの、すべてが変わり果てたそこは初めて歩くのと変わらない。

なんとか廊下の先へと目を凝らし、ゆっくりとした速度で歩く。気持ちは焦るばかりだけれど、この瓦礫だらけの暗い廊下を走ればどうなるかくらいはわかる。

富士の訓練でも足場が見えない夜間は、ゆっくりと、しかも踵から降ろして確かめつつ進むのがベストだって教わったし。あとなんだっけ、転倒しても声は上げない、だっけ。あつ。

「あいった！　ちつくしよっ、足打ったあ！」

無理でした。マジ、無理でした。ごめんなさい、班長。

先のほうを注視していたため、足下の瓦礫に引っかけた私は簡単にすっころぶ。正直、めちゃくちゃ痛いです。これ、絶対に青タンできてるな。

こんな暗い中、不整地を進むのはむちゃに近い。ていうか、迷子免許皆伝の私には無理。自衛隊的にいうと、180ミルの暗さ。

無駄な知識を頭の中から引きずり出しながら、そのまましゃがみこんだ私は膝をさすりつつため息をつく。

「うー……、ちび様いずや！　ちび様いずこっ！」

どっかで聞いたような文句を自棄になって叫ぶ。すると突然、暗がりの中から誰かの腕が伸びてきたかと思ったら、そのまま柱の影へと引きずり込まれた。

あまりのことに目を見開いたまま身を固くした私は、その何者かの腕が腹に回ってきたところで我に返り、思いつき叫び声を上げる。

「ぎゃあああつ、ち、ちか——！」

痴漢、と言おうとしたところで革手袋をした手のひらに口を塞がれ、ふごとと情けない声が鼻から抜ける。し、しまった！

その手に噛みついてやろうとしたけれど、それもうまくいかない。しょうがないので、今度は身体全体を使って暴れる。こういう時、どうすればいいって教えてもらったっけ！

パニックになりながらも、急所を狙おうと肘をつきだした私の耳元に、意外な人の声が聞こえたのはその時だった。

「ウラバ、俺だ！　頼むから大人しく従ってくれ！」
「た、たいひよう！」

低くささやかれたその言葉に、私はぴたりと抵抗をやめる。すると安心したように、ようやく身体に回されていた腕が外された。

隊長が痴漢？　いやいや、そうじゃなくて。

「隊長っ、何やってるんですか、こんなところで！」

「静かに！」

驚きに高くなった私の声を手で制し、ジュンレン隊長は周囲に視線を走らせる。そして人気がないことを確認すると、そこで改めて私に向き合った。

光量の足りない廊下の、それもちょうど死角になる柱の影の中、隊長は大きくため息をつく。見れば、その手にはこの闇の中でも鈍く光る、鋭い剣が握られていた。

「俺は近衛に民のことを任せてきたところだ。それより、ティアオはどうした。あいつにはお前の護衛を命じたはずだぞ」

「部屋にいたらすごい音と振動があつて、ティアオはちょっと様子を見てくるからって……」

いつもと違って厳しく響いたその言葉に、私は思わず首をすくめる。これはもしかや説教をくらっている感じ？

だけど、この王宮の惨状を見る限り、私があそこにいたら確実に危なかったと思うんですけど。

「部屋から出るな、側から決して離れるなと言っておいたのに、あのバカ！」

「いやあの、悪いのはティアオじゃなくってですね！ 扉が開かなくなっただんで、窓から抜け出しちゃったんです。ティアオは絶対に部屋にいろって言うてくれてたんですけど……」

「窓から抜け出したあ！？」

今度は自分があげてしまった声に、隊長は慌てて周りを見渡した。気配を探り、それから大きく肩を落とす。な、なんでしょうか、そ

のリアクション。やつちまった感満載なんですけど。

私がびくびくしながら次の言葉を待っていると、隊長は乱暴に茶色の髪をかき回し、顔を上げた。

「まあ、今さら言ってもあれだけだな。あの部屋は特別な防壁が張られているから、何が起きようと大丈夫だったんだよ。事が起きた場合は誰も出入りできないようになるんだ。だから、扉が開かなかったってのは……そういうことだ」

「そ、それ、マジで今言いますかあ！」

果てしなく落ち込みそうなその新事実にも、私も習って頭をかきむしる。とんでもなく空気読めてないじゃないか、私。

呻きながら肩を落とした私の頭を、いつものように隊長の手が優しく叩いた。手袋に包まれていても伝わるその温もりに、今や遠くなくなってしまった日常を思い出す。

近衛隊士に街の人たちを任せてきた、と隊長は言っただけで、あの少ない人数で避難誘導なんかできるんだろうか。

「街の人は、どうしたんですか？」

「街の者たちは無事避難している。『収穫祭』の指示が出ていたからな、みんな決められたとおりに森へ逃げているさ」

自信たっぷりに頷いてみせる隊長に、私は首を傾げた。

収穫祭と避難とのつながりがいまいち理解できない。そんな私の様子に、片手に持った剣の具合を点検しながら隊長が言う。

「ああ、お前は知らないか。『祭をする』ってのは避難準備をしろってことなんだよ。その中でも『収穫祭』は緊急って意味でな。祭の準備だって建前があれば、民がどこか一カ所に集まっても、物資なんかが運ばれても不自然じゃないだろう？」

「な、なるほど」

だからその指示が伝えられた時、見習達が真剣な顔をしていたのか。

用意周到というのはこういうことか、と感心すると同時になんだか悲しくもなる。そういう訓練が行き渡っているほどに、ここでは国同士の争いが現実的なものなんだ。

それじゃあ、ちび様は……と口を開きかけた私は、再び隊長の手のひらにそれを止められる。その横顔が緊張感に研ぎ澄まされるように、真剣なものに変わっていく。

手にしていた剣を握りしめ静かに立ち上がった隊長は、近くの暗がりに向かって声を張った。

「いるのはわかってる！ 何用だ！」

静けさを破るようにとどろいたその声に、私の肩が抑えきれずに震えた。すると、闇の中からまるで溶け出したかのように、四つの影が現れる。

全員が漆黒の布を頭から被り、その下から覗く服もまた黒い。異様なのはそれだけではなく、顔の上半分がこれもまた黒い仮面に覆われていた。

どこからどう見ても、インゼリアの人でも、ナツメの難民じゃない。

その影たちにむかってゆっくりと剣を構えた隊長は、今度は静かに声をかける。

「もう一度訊く。おまえたちは何者で、何の用があると言う？」

しかし影はそれに何も応えず、滑らかな動作で腕を動かした。ふわりと漆黒の布が揺れ、隊長のものよりも少し大きめな剣の影が現

れる。くすぶる炎の小さな明かりをはじき、それは美しくも恐ろしい光を放つ。

一番前にいた影のひとりが、隊長から目を離さずに他の3人へと声をかけた。

「男は殺せ、女は捕らえよ」

短いその言葉に、私の背筋がぞわりと粟立つ。

仮面の下から覗くなんの感情も含まない瞳が私を捉え、確かめるようにずっと眊められる。

思わず私が一歩後ずさりすると同時に、影がゆらりと動いたのが目に入った。私を後ろに庇った隊長の背中が、一瞬にして緊張する。

「俺から離れるなよ、ウラバ！」

「はっ、はいっ」

かけられたその言葉に何とか返事を返した私は、無意識に背負っていた小銃を身体の前に戻して握りしめる。

ひんやりとしたその感触が、これが現実だということをかろうじて知らせてくる。それでも、いまだ状況についていけない心が、身体動きを鈍らせた。

もたつく私の腕を隊長が乱暴に掴み、自分のほうへと引き寄せる。手首を掴む力は強く、手加減のないそれに、彼にも余裕があまりないことを感じた。喉が、乾く。

隊長はそのまま影を避けるように柱から飛び出し、廊下の反対側へと踊り出した。まだ壊れずに残っていた壁を背に、改めて影と向き合う。

その間にも4つの影は静かに、しかし確実に私たちとの距離を詰めてきていた。流れるような動きは、彼らがこういうことに慣れていることを感じさせる。

「ガナドールの手のものか……！　なぜ、ウラバを狙う！」

隊長の再度の言葉にも反応はなく、身を低くして影は真っ直ぐに突っ込んでくる。そこで初めて剣先が混じり合った。耳を突く音が静寂に包まれた廊下に響き渡り、私は身をすくめる。

影のひとりが押し込んできた剣を隊長が受け、そして強くはじき飛ばす。しかし、すぐに体制を整えた影はもう一度、今度はより深く入り込んできた。

その間に残りの影たちは、隊長の背に庇われる私へと手を伸ばしてくる。小さく悲鳴を上げた私の前に、隊長が立ちはだかった。

「させるかっ！」

隊長が短く言い放つ。すると私たちを中心とした風が巻き起こり、その腕の持ち主たちを強くなぎ払った。それは今朝ちび様が私に見せた力と似たもの。

そこで初めて影たちに動揺らしきものが見え、彼らは素早く距離をとる。一瞬落ちる、沈黙。

「風の力……インゼリアの法術士か」

「んな大層なもんじゃない。俺はただ血を“授かった”だけだ」

にやりと不敵に隊長が笑う。それは私が今まで見たこともない凜猛な表情で、私は無意識に息を詰めた。目の前で起こっている命のやり取りに、ただ圧倒されるばかり。

静かになった場に、かちかちと何かの音がするのに気がつく。なんだらうと出所を探せば、それは小銃を握りしめて震える私の手が発するものだった。白くなるほど力がこもっているのに、感覚がまるでない。

「^{ちよう}長」

影たちのひとりが、隊長と言葉を交わした人を短く呼んだ。長、と呼ばれたその影は振り返らず、軽く頷く

「二の剣、三の剣はあれを追え。そこにインゼリア王がいるはずだ」

端的な指示に、控えていた3人のうちの2人が頭を下げて走り出す。その背を見つめていた隊長が軽く舌打ちをした。

ふたつの影が駆けていった先を私も目で追いかけてみるけれど、すでもやがかった上に暗く、果たして本当にこの先にちび様がいるかどうかまではわからない。

すぐにでも追いかけて行きたいのだけれど、それは目の前に立ちふさがるふたりが許してくれそうにもなかった。

ふっと、体重を感じさせない踏み込みで、再びふたりは同時に隊長へと剣を振り下ろす。暗い廊下に散る火花。隊長はその重い一撃を横にした剣で受け、籠手を巻いた腕でそれを補助する。そしてそのまま横一閃なぎ払うと、切っ先からは強い風。

長と呼ばれた影がそれを避ける前に、もうひとりの影がその前に出て庇う。その身体が何かに斬りつけられたかのように、血しぶきをあげた。すぐに辺りは錆びたような、独特の匂いに包まれる。重力に従って、力を失い倒れる身体。

庇われた影はそれに構わず、予測のできないゆらりとした動きでこちらへと迫り来る。そして、この場に重力が存在しないかのようにふわりと高く跳ねると、身体が落下する勢いをのせ、隊長の頭上から剣を振り下ろした。

その一撃を受けたところで、今度は脇腹目がけて蹴りが飛ぶ。隊長はそれを予測していたかのように左手で素早くその足を払うと、反対に影の足を狙って蹴りを放った。

一連の動作のすべてが一呼吸の間にめまぐるしく起こり、私はただひたすら壁に背をつけてそれを見守るばかり。息をするのも苦しい、緊迫感。

「ウラバ、大丈夫か」

少しあがった息で、隊長が早口に問う。その声は緊張を孕んでい
るものの、その中にはこちらを気遣う優しさがあり、私は小さく息
を吐いて頷いた。

「私よりも、ちび様が……」

「ウェイフォン様なら大丈夫だ。あれでも俺なんかよりずっと強い。
宰相様も一緒だしな」

こちらの隙を静かに窺っている影を視線で牽制しながら、隊長は
きっぱりと力強くそう断言してみせる。その強さに、私はようやく
身体の震えを抑えることに成功した。と、その時。

どん、という音ともに鎮まっていた揺れが突然その場を襲った。
今までのものとは規模が違う揺れ方に、隊長や対する影はなんと
か踏みとどまったけれど、力の抜けた私の身体は簡単によりめいて
しまう。

直前まで変に固まったままだった身体は、うまく揺れを吸収でき
ない。何とか体勢を立て直そうと、庇われていた背から大きく踏み
出した、そこに――。

「ウラバっ！」

ちらりと目の端に映ったのは、黒い影。

ずたずたに引き裂かれた黒い布から伸びてきた手は、吹き出した
血によって赤く染まっていた。それはさっき隊長によってなぎ倒さ

れたはずの、影。

驚く間もなく強引に腕を取られ、引きずり出される。掴まれた腕のぬめる感触に、私は声にならない悲鳴を上げた。無意識に身を引こうとするが、影はそれを許さない。恐怖で暴れる私を抑え付けるように、その影がもう一方の腕を伸ばしてきた。

その腕が一瞬にして消える。

空間に焼き付くような速さできらめく剣。風を切る音ともに、どさり、と何かが廊下に落ちる。目前に迫っていた仮面の中の瞳と、目が合う。次の瞬間。

よろけたその影の腕から大量の血が噴き出し、よろめきながら倒れた。くすぶり続ける小さな炎に照らし出されたそのシルエット。左の肘から先が、ない。

びくりびくり、と砂に打ち上げられた魚のように痙攣していた身体は、すぐに動きを止め静かになる。見開かれたままの瞳は、中空を見つめたまま。

何が起こったのか。さび付いたように動かない瞳を無理矢理動かすと、足下に今し方隊長が切り落とした腕が落ちていた。まるで、作り物のように。

「ウラバ！」

あまりの出来事に呆然と立ち尽くすばかりの私の腕を、今度は背後から隊長が引く。

振り返って見ると、私の腕を握るのと反対の手は、剣から柄までぐっしりと血にまみれていた。

その姿に恐怖を抱いた私の肩が、震えた。隊長なのに、怖い。

「たい、ちょう」

つたなく呟いた私に、何か言おうと口を開いた隊長がそのまま固

まる。

限界まで見開かれた茶の瞳が、苦痛に歪むのが見えた。何かを耐えるようにひそめられた眉を不思議に思い、私はゆっくりと隊長の胸へと視線を落とす。そこに、あったのは。

銀色の刃。

人の身体から生えるはずのないそれが、身につけた鎧をも突き抜けて、光る。

その切っ先からぽたりと、一筋の赤がすべり落ちた。

嘘、でしょう？

予期せぬ別れ

時間の流れがひどく鈍い。

引きつる喉は悲鳴のひとつも上げられない。ゆっくりと、隊長の背から長と呼ばれた影が離れていくのが見えた。

その動きと一緒に、隊長の胸からも銀の剣が引き抜かれていく。やめて。それを、引き抜かないで。そんなことしたら、そんなことしたら、隊長が。

仮面に覆われていない口元が、薄く笑う。

このままなにひとつ動かさなければ、時間はこのままで止まるかもしれないのに。そんな非現実的なことが頭をかき乱し、叫ぶことさえできない。口からは、まるで病気にかかった動物の鳴き声のような音がもれた。

ひゅ、とどこか清廉な響きで、引き抜かれた剣が血を払う。

それと同時に、私の頬にびしゃりとなにか生暖かいものが降りかった。半分開けたままだった口の中に入ったそれは、塩辛く錆びて、反射的に飲み込もうとした喉にべったりと貼り付く。

それは隊長の胸から溢れだした、真っ赤な――。

「ウラ、バ……逃げ……っ」

何だろうと頬に伸ばした私の手を、隊長が強く掴む。痛いくらい。そうしてそのまま、隊長はずるりと床に崩れ落ちた。引きずられるように一緒に座り込んだ私は混乱したまま、ぴくりとも動かなくなった隊長の身体をかき抱く。これは、なに。なにを、間違えたの？ うつぶせの彼の身体から、温かな何かがこぼれ落ちていく。塞ぐようにして手で押さえてみるが、そんな努力をあざ笑うかのように、

それは指の間を簡単にすり抜けていってしまふ。見る見るうちに床に広がっていく、赤い色。

命が、こぼれる。

こぼれて、消えてしまふ。

「やだ。やだ、やだっ、隊長っ！ 隊長っ！」

そこで初めて意味のある言葉が胸の奥からわいてきて、私は必死に動かない隊長の身体にしがみついた。子供のように、いやだという言葉をただ無意味に繰り返す。

この現実をすべて否定してしまいたい。こんなのは、こんなのは、違う。違うの。

だって、さっきまで隊長は動いていたから。今朝だって、いつも通りに私を起こしにきて、みんな一緒に。大丈夫だって。

何度も何度も揺すぶる身体は、それでも何も反応を返してはくれない。血を。血を止めなきゃ。

そう思ってズボンから布を引っ張り出し、傷口に強くあてる。お願いだから、これ以上流れ出さないで！

ひどく震えるその腕を、いつの間にか近付いていた影が引きずり上げた。

「来い」

何言ってるの。この人、なにしてるの。

だって、隊長が怪我しているのに。それなのに、なんで放っておこうとするの。

振り払おうと払った左腕もまた捕らえられ、私の身体はそのまま宙へと引き上げられる。無理矢理のその力に、手首がひどく軋んだ。痛い。痛い、痛い！

「殺しはしない。大人しくしろ」
「っ！」

抑揚なくかけられたその言葉を、私はもげるほどに首を振って拒絶した。

するといきなりお腹に強い衝撃。遅れて焼けつくような痛みが走り、私はくぐもった悲鳴をあげた。そして、喉の奥からせり上がってきたものを床にぶちまける。

蹴られた！？

燃えるように熱く感じる痛みの中、流れた涙が頬についた血と混ざり、白いシャツに薄紅の染みを作った。

苦痛に声も出せずぐったりとした身体を、影はいとも簡単に持ち上げて歩き出す。遠ざかっていく隊長に、それでも手を伸ばそうと歯を食いしばった次の瞬間、私の身体は突然床へと放り捨てられた。受け身をとる間もなく背中から打ち付けられ、私はお腹の痛みとともに襲う苦痛にうめく。気を失いそうになった私の耳に、いくつかの足音が近付いてきた。それから誰かに身体を引き起こされ、声をかけられる。

「ウラバ様！ ウラバ様、しっかりしてくださいっ」
「ティ、アオ……」

それは部屋で別れたきりになっていた、ティアオの声。別れてからまだそんなに時間は経っていないというのに、あまりの懐かしさに勝手に涙が零れる。

彼はそれを手袋をした手で丁寧に拭いながら、私の目をしっかりと見つめた。

「大丈夫です。もう、大丈夫ですから」

そう言つて顔を上げたティアオは、前方に向かって鋭い声を発する。

「クワイ、ガン！ 仕留めろ！」

それに無言で応えたふたつの背が、さっきまで私をどこかに連れ去ろうとしていた影に向かつていく。3人とも、無事だったんだ。徐々に鈍くなってきた痛みをこらえ、ティアオに支えられながら身を起こす。止まらない涙をそのままに、私は彼の肩を強く掴んで声を上げた。伝えなきゃ、早く、早く！

「たいっ、隊長、がっ！ 隊長が、刺され、てっ」

私がいたから、私を庇ったから。あの時私がよろけなければ、もっと抵抗できていたら、そしたら隊長は刺されたりしなかった。絶対に、しなかった。

思考はばらばらに散らばったまま、私の言葉としてなにひとつうまく出てこない。それでも、その断片的な言葉を理解したティアオは痛ましげに顔を歪ませた。

そして一瞬だけその赤茶色の瞳を閉じ、哀悼を示す。けれど次に目を開けた時にはもう、そこに悲しみも揺らぎも残されてはいなかった。ただ、ひととき強い光があつて。

「ウラバ様、立てますか？」

静かなその声に促されるように、私は苦痛を訴える身体を叱咤して、立ち上がる。

我慢しきれずにもれたうめき声に、「失礼を」と短く言つて私の身体をあちこち触った彼は、少しほっとしたような表情を浮かべてみせた。

「よかった。骨は折れていないようです。ウラバ様、ひどく痛むでしょうが、ここから離れなければなりません。走れますか？」

「ここからって、だって、隊長が！ クワイに、ガンもっ……」

言い募る私にティアオは首を振って応える。どこまでも静かなその表情に、私は拒絶の言葉を飲み込んだ。

そっと私の腕をとって自らの肩にまわし、腰に腕をあてたティアオが一度だけクワイとガンがいるであろう方向に視線を向ける。そしてそれを振り切るように、私をとまって走り始めた。近くにある彼の身体が、何かを必死に我慢するように強張っているのがわかる。

遠くで剣と剣がぶつかり合う音。

きつと、クワイとガンがあおの影と戦っている。そこには隊長もいるはずで……けれど、それも廊下の角を曲がる時には、もうまったく聞こえなくなってしまった。

彼らとまたもう一度会える確証なんて、なんにも持っていない。

本当は隊長の身体から温もりが失われていくのも、私は頭のどこかで気がついていた。もう、あの茶色の瞳が優しく私を見ってくれることは、ないんだ。二度と。

高ぶりすぎた感情の抑えがきかずに、私は走りながら子供のよう
に嗚咽を漏らす。

「ごめんなさい……ごめんなさい……！ 私、部屋から、出
たからっ」

「違います、ウラバ様」

泣きじゃくりながらもらしたそれに、ティアオがきっぱりとした
声を返す。見上げた横顔は、どこまでも凧いだ湖面のように研ぎ澄
まされていた。

ゆつくりと、聞き分けのない子供を諭すような口調で、ティアオは言う。

「僕たち近衛兵は、みなが『竜の血』によってつながっているんです。だから、僕たちには隊長の最後の声が聞こえる。あの人は決して悔やんだりしていない。恨んでもいない。ただ、『頼む』と。それだけ……」

大きく崩れた壁によってそれ以上進むのを阻まれた私たちは、静かに廊下の中程で足を止めた。我慢しようとすればするほどに溢れ出す涙を、私は腹立たしく乱暴に拭う。

ティアオの言っている意味がわからない。わからないのは、私がこの人たちと一緒に生きてはいないからだ。覚悟も力も何もない。ただの通りすがりだから。

ティアオは泣かない。それが、答えだった。

「ここから先は駄目ですね。迂回して禁域へ行きましょう」

「でもっ、禁域には許可された人しか入れないって、ちび様がっ」

私はそこに行けても、ティアオはどうするの。

言外の問いかけを正確に読みとったであろう彼は、そこで再会して初めて微笑みを見せた。優しい、いつもの彼の笑顔。

「僕は入れないけれど、ウラバ様は入れます。それで、充分です」

きっぱりと言い切って、彼はもう私に何も言わず走り出した。強く握られた手が、熱い。

泣いたって自分の気が済むだけ。何にもプラスになったりしない。なんとかここを切り抜けよう。禁域に入らなくなったら、あの辺りは森になってるんだし、もしかしたらうまくいくかもしれない。

俯いていた顔を上げ、私は最後の涙を腕でぐいっと拭った。今はもう、泣きたくない。

小さな庭を抜け、離れた王宮から響いてくる音と巻上がる炎に顔をしかめながら、それでも私たち二人は禁域の森へと駆け抜けた。とにかく、私がみんなの足を引っ張っているのは確かだ。だったらどんなに情けなくても、私は安全な場所に退避するしかない。

そうしないと、ティアオもクワイたちも、ちび様を援護しに行けないんだろう。

そんな風な考えに達して私が奥歯を噛み締めた頃、私たちはようやく裏の森、禁域へとたどり着いた。

さすがに、息が上がっている。

私たちはしばらくの間無言で息を整え、それから顔を見合わせ領くと、辺りを警戒しながらゆっくりと森へと進み始めた。

どの辺りからティアオが拒絶されるのかわからない。また、ひとりになってしまいかもしれない不安に、たまらず私は口を開いた。

「ねえ、ティアオ。禁域ってなんなの？」

私のその問いに、周囲への警戒をゆるめないまま、ティアオが答える。

森は不気味なほどの静寂を保っていた。

「禁域というのは、王族方の墓所がある場所なんです」

「お墓！」

「はい。歴代の竜王から、その伴侶である乙女。そして血に列^{つら}なる方々の。命は絶えても、そこは法力の“場”となりますから、今も強力な防壁で守られているはずです」

そう言うティアオのしめす先に、ちらりと見覚えのある白い塔の先端が見えてきた。

それは今日の昼間、私に言付けをしたあとのちび様がむかっていた場所。同時に思い出す、ちび様のひどく悲しそうな笑顔。

あれは、そう言う意味だったんだと今、気がつく。

何もかも知らないまま、知らせられないまま過ごしてきたこの1ヶ月。それをとっても後悔しながら、私はさらにちび様の家族について聞こうとティアオを見た。

すると、彼はさっきまでの落ち着きをなくし、きよろきよろと辺りを見回している。

「ティアオ、どうしたの？」

「いえ、あの、防壁が……防壁がないんです」

「え？」

「もう、この辺りは禁域だから、僕は弾かれてしまうはずなんです……」

「夜だし、明かりもないし、まだ禁域に入っていないんじゃない？」

ティアオとは反対に、さきほどのショックから少しずつ落ち着きを取り戻した私がそう言うと、彼はゆっくりと首を振る。

「“僕たち”は夜目が利きますから」

それはさっき彼が言っていた『竜の血』というやつに関係しているのだろうか。

どこかそわそわとしながら、それでもここまで来たらと覚悟を決め、再び歩き出そうとした私たちの背後。突然、木々がなぎ倒され、地面が大きく振動する。

まさか、これって！

素早く動いたティアオの背に庇われ、そこで私が見た物は――。

「竜……！？」

闇の中でもぎらりと獰猛に輝く黒い鱗。そして、ぼんやりと光っている濁った緑色の瞳。その中に見える縦長の瞳孔が、呆然と立ち尽くす私との目と合い、ぎゅっと縮まったのが見えた。

もしかして——もしかして、王宮を破壊したのもナツメを襲ったのも、この、竜？

その巨大で恐ろしい姿に私が思わず一步退くと、目の前の竜は真っ赤な口を開けて雄叫びを上げた。

「なぜ、なぜ古竜が……！」

動揺を隠しきれないままで、ティアオは腰の剣を抜く。その手が恐れではない何かで震えているのが見えた。

その彼の言葉に、黒い竜は苛烈に反応する。

潰れたような、悲鳴のようなその鳴き声の中に、私はかすかな何かを耳に拾った。なに、なんなの？

じりじりと後退する私たち二人を追うようにして迫り来る竜が、狂ったように暴れながら木々を倒し、そして叫ぶ。

『違う、僕じゃない——！　これは、僕じゃないっ——』

私の耳に届いたそれは間違いなく、ひどく苦しげな青年の声だった——。

黒い咆吼と決意の白

目の前にあるのが、私の知っている現実とあまりにかけ離れていて、その場にぬいつけられたように呆然と立ち尽くす。目前にまで迫った黒の竜は、そんな私を目がけ突進してきた。

思わず小銃を握りしめ固まる私の身体を、ティアオが突き飛ばすようにして庇う。背中から道の脇に倒れ込むけれど、彼がその腕を地面との間に差し込んでくれたお陰で、構えたほどの痛みはなかった。

そのすぐ後ろを、一直線に走ってきた竜の身体が通り過ぎる。

「大丈夫ですか、ウラバ様！」

「う、うん。なんとか」

ぐいっと抱き起こされながら、私はなんとか短くそう答えた。

ティアオは私にちらり視線を走らせ、言葉通り怪我らしい怪我はないことを確認してから、再びこちらを伺い唸り声を上げる竜へと向き直る。手には闇に光る剣。

つ、とティアオの額から汗が流れ落ちた。

「ウラバ様、僕が動いたら、一直線に竜の向こうへ走ってください。向こうに抜けられさえすれば、墓所はすぐです」

「だけど、ティアオは……！」

「相手は古竜です。僕ひとりだけでは、自分の身を守ることすら敵わないかもしれません！」

普段のティアオとはかけ離れた、切り捨てるような物言いに私は

言葉を失った。

たかが薄っぺらい私の正義感でここに残ったとしても、それは彼にとって足手まとい以外の何ものでもない。ついさっき、それを思い知らされたはずなのに。

すぐにでも頭をもたげてくる何の役にも立たない同情心を、私は奥歯でぐっとかみ殺し、ようやくティアオに頷いてみせた。

私を背に庇いながら、咆吼する竜と正対していたティアオは、それを横目で確認するとふいに笑みを浮かべる。いつも、優しいティアオの笑顔。

「ウラバ様が無事逃げられたなら、僕もすぐに離脱しますよ。こう見えて、逃げ足は早いんです」

「……うん」

それが私を安心させるための嘘でも、その気持ちがとても嬉しくて、私もなんとか笑みを返す。

私は、私のできることを。

そう決意して、私は胸の前で握りしめた小銃を再び背中に戻し、一秒でも早く走れる体制を整える。

ティアオも剣を強く握りしめ、離れたところで爛々とその緑の瞳を光らせる竜へと一歩、足を踏み出した。そして――。

「今です！ 走って！」

こちらへ真っ直ぐに向かってくる竜へと走りながら、ティアオが私にそう合図し、剣を振るう。私はその声に弾かれるようにして、竜から少し逸れた場所を目指して走り始めた。

どうか、お願い――！

誰に何を祈っているのかもわからず、ただひたすら全速力で駆け抜けながら、そんなことだけが強く頭に焼き付く。お願いだから、

もう、これ以上は……！

『痛い痛い痛い痛い痛い痛い——！！』

再び頭の中に青年の悲痛な叫びが鳴り響き、私は足をもつれさせ、バランスを崩す。

竜のわきを駆け抜けてすぐ。まだここで止まってしまうわけにはいかないのに！

どこかゆつくりと流れる視界の中で、竜に相對するティアオの顔がはっきりと見える。赤茶色の瞳が、真っ直ぐ私を貫いて、その口元が何かを叫ぶように開かれた。その時。

「っ！」

彼を貫かんと、真上から竜の尾が振り下ろされる。

激しく地面に膝を擦りながら、私はそれをただ黙って見ているしかなかった。悲鳴すらあげる余裕もなかった。

どすん、という音とともに、黒く光る竜の尾が地面に突き刺さったのが見える。まわりつくような闇と舞い上がった土埃のせいで、ティアオがどうなったのかわからない。

立ち上がるうとして、私はその場に崩れ落ちた。

足が、腰が、言うことを聞いてくれない。どこもかしこも、壊れたおもちゃのようにがくがくと震えていた。

その視界の中で、竜がこちらをゆるりと振り返る。

突き立てられたよりも静かな動作で尾を地面から引き抜き、ボロボロに見えるその翼を広げてみせる。

「や……！」

立てない私は、座ったまま無様に後ろへとずり下がるしかできな

い。

怖いとか、嫌だとか、そういうんじゃない。ただ、悔しかった。ティアオがせっかく私を助けてくれようとしたのに、私はこんなところでこんな風にいるしかない。立ち上がることも、走り出すこともできない。それが、悔しい。

すると、じりじりと私に近づいてきていた竜が、突然つんざくような悲鳴を上げる。

見ればその尾の先が千切れ、地面にのたうって落ちていた。切り取られた場所からは、どす黒い血がびしゃびしゃと辺りに散っている。

「ウラバ様！ 立って！」

痛みに暴れる竜の後ろに、もう諦めていたティアオの姿。

顔半分に裂傷を負い、血にまみれた姿で剣を握りしめている。

私はその声に、震える身体をなんとか制御しようと力を込め、必死に立ち上がった。手足の感覚がない。けれど、走るんだ！

そうして馬鹿みたいにゆっくりと動きだした私に、ティアオは再び剣を構え、竜へと向かう。

急いで、だけど焦らないで。そう自分に言い聞かせながら、なんとか一歩ずつその場から離れる私の背後で暴れ回る竜の尾が、今度こそティアオをとらえ、なぎ払う。

私はそれを視界に入れながら、吹き飛ばされていくティアオを振り切って、墓所へと向かう。

もう、涙なんて流れない。

私はティアオを犠牲にした。それだけだった。

あとでそれをインゼリア中から責められるために、憎しみをぶつけられてもいいように、私は今、逃げるんだ。逃げて、逃げて、逃げて。そうして生き延びて、いつか誰かがそれをなじるまで。

傷をわざと抉るようにそう心に刻むと、私はだんだんと動くよう

になってきた足で、地面を強く蹴る。早く、一歩でも早く向こうへ。その私目がけて、咆吼した竜がかぎ爪のついた前足を伸ばしてくる。それから逃れるように身をよじるが、間に合わない。

わずかな月明かりに光るその鋭い爪が私の身体に届こうとした、そこに。

「!!」

突然の暴風。

私と竜の爪との間に吹き荒れたそれがおさまり、咄嗟に顔を覆っていた腕を降ろすと、そこにいたのは――。

「ウラバっ」

「ちび、様……っ」

法力と呼ばれたその力で、竜を威嚇しながら私の名前を呼んだのは、ずっと探し求めていたちび様だった。

駆け寄ってくるその小さな身体が安堵に崩れかけた私を、意外なほどに強い力で受け止める。その温もりが、ひどく懐かしい。そんなにも、離れていたわけじゃないのに。

「ウラバ、しっかりしろ!」

覗き込んできた深い青色の瞳が、私にその強さを分け与えるように光る。

どこか竜と似たような、細長い瞳孔がぎゅっと細く締まり、そして再び大きく唸り声を上げた黒竜を見据えた。傍にある身体が緊張に包まれたのがわかる。

そして苦しげにひと言、吐き出された言葉に、私は驚きを隠せず震えた。

「兄上……っ」

あに、うえ？

それを問う間もなく、ちび様は私を抱きかかえると大きく後ろへと飛びずさる。今までいたそこに、竜の口から吐き出された炎が直撃した。

小さな火の粉とともに、熱い空気の固まりが頬を撫でて流れていく。

「シムっ！」

後方に視線を走らせたちび様がそう名前を呼ぶと、答える間もなく白い影が風を切って飛び込んでくる。再度吐き出された炎を真ん中から断ち切って、切迫。その喉元に刃を突き立てた。

金属と金属のぶつかり合うような嫌な音が響き渡り、嫌がるように竜が前足を振りかぶったところで、その白い影——シムさんがひとつ飛びに引く。

そのまま数歩後ろへと飛び下がり、シムさんは息も切らさず私たちに声をかけた。

「ウェイフォン様、ウラバ様、お怪我は？」

「大丈夫だ。そっちは？」

「私はこの通り。民たちは近衛の者達が無事逃しました」
「そうか」

静かに、けれど隙のない短い会話を重ね、ふたりは黒竜を睨む。一瞬だけ、私の肩を掴むちび様の手に力が込められたのがわかった。じりじりところらを窺いながら迫るその影に、立ち上がる。

息を詰めたちび様の全身にゆるく風が宿った、そこに——。

「っ！！」

いつの間にか抜き放たれていたちび様の剣が、それをはじき飛ばす。

その足下に音を立てて突き刺さったのは、黒く鈍い光を放つ、鋭く小さな刃。一撃ののち、同じような刃が立て続けに飛んでくる。そのすべてをたたき落として、ちび様は森の奥、闇の向こうへと声を上げた。

「何者だ！」

闇が、動く。

そこから溶け出すように現れたのは、さっきまで私と隊長に襲いかかっていたふたりの影だった。その姿に、残酷な光景を思い出し、震える。

あの影が言った「アレを追え」っていうのは、竜のことだったんだ。無意識に後ずさりをした私を、その影たちから遮るようにして立ち、ちび様はその口元にどこか獰猛な笑みを浮かべて問う。

「やはり、お前たちガナドールの者だな。一応訊くが、引く気はねえんだな？ お前たちの切り札は、制御できねえぞ。あれはもう……狂ってる」

最後の言葉を苦々しげに吐き出したちび様に、そう暗に示された竜と対峙していたシムさんが、少し痛ましそうな視線を投げた。

それに何も答えず、影たちはじりじりと距離を詰めてくる。それを見て、ちび様は私にささやいた。

「ウラバ、俺がいいと言うまで目を閉じろ」

「あ……」

反射的に反応し、ぎゅっと目を閉じるのが早いか、私の周りで風の巻き起こる気配がした。それは鋭い音を発し、どこかへと飛んでいくのがわかる。ちび様の力。

目を閉じたことで敏感になった耳が、何かか呻く声とそれを断ち切る風、そして地面にこぼれ落ちる液体と重いものが転がる音を拾った。見えなくても、理解する。

ちび様の力が、あの影たちの命を奪った音。

怖いとは思わなかった。けれど、身体のコがその圧倒的な力を感じ、震えた。

「もういいぞ」

そう言われて恐る恐る目を開けた私の前には、音から想像していたおぞましい光景はなかった。すべてがこの闇に紛れ、もう何もわからない。

ちび様は私にそれ以上は何も言わず、改めて竜へと向き直った。

闇の中で、緑の瞳が光る。王宮からあがる煙に覆われた月の下、かろうじてその切れ間から注ぐ弱い光に黒い鱗が生々しく輝いていた。半開きになった口から見える、牙。そしてその喉からはどこか苦しげな息。よだれがそこを伝い、地面にだらだらとこぼれ落ちていく。

見れば見るほどのに醜悪なそれを睨み、ちび様は苦しげに声を発した。

「シム。なぜだ」

「……私の過ちでございます。あの時、私があの方に情けをかけたばかりに」

「なら、あれはそうなんだな？ 間違いなく、奴なんだな？」

わかっていたことをさらに確認するように言って、黙して頷くシムさんを見ると、ちび様はもう何も言わずに竜へと足を一步踏み出した。その身体に再び風が宿る。

私に向けられていたその小さな背中が、今何を思っているのか、私にはわからなかった。

そのちび様にシムさんも続こうとして、はっと目を見開いたシムさんがちび様の背に覆い被さる。

「ウェイフオン様っ！」

何かがびしゃり、とシムさんの白い衣装にまとわりついた。ぬめぬめと光り、その白い色を汚したのは――。

途端に、耐えられないほどの悪臭が鼻をつき、私はとっさに手で口元を覆う。今まで嗅いだことのない、獣のような、何かが腐ったような、そんな臭い。胸からこみ上げてくるものを、必死に抑える。

「これは……！」

「竜血!？」

動揺するふたりに向かって、再び闇が襲いかかる。

ふわりと舞うようなその独特の動きは、隊長を貫き、今はクワイとガンが戦っているはずの、あの影の長。

その攻撃を俊敏な動きで避け、ちび様とシムさんはお互い反対方向へと飛びずさる。私のところへ戻ってきたちび様が、その影を睨み付けた。

「ジュンレンをやった奴か……。それを誰が作った!? 竜血の製造法はインゼリアの王しか知らねえはずだ！」

それには答えず、影の長は重力など感じさせない動きで、ちび様と私へと迫り来る。真っ直ぐにこちらへ向けられた剣の切っ先。身構えたちび様と私の前にシムさんが割り込み、その刃を止めた。

いつも乱れることのないその顔に、苦痛が浮かんでいる。額からは汗がにじみ、どこか身体に変調をきたしているのが私からでも見て取れた。

「シムさん……！」

「竜血のせいだ……っ」

忌々しげにそう呟いたちび様が、影に向かって風を放つ。鋭い刃のようなそれが身体に届く寸前、影はふわりと宙に飛んでそれを避けた。それを見てシムさんが、崩れ落ちるように片膝をつく。

狂ったように頭を振り、唸り声をわめき散らす竜を背にしても、影は恐怖することなくこちらを窺っている。それを睨みながら、ちび様は苦渋の面持ちでシムさんに告げる。

「シムっ……もう駄目だ。撤退する……！」

その言葉に頭を過ぎったのは、隊長の姿。そして、私を庇ったテイアオ。クワイにガン。

けれど、そんな私以上にちび様は身を切られるような思いをしている。彼にとって「撤退する」ということは、国のすべてを一度諦めてしまうということ。

力を込めすぎて微かに震えるその小さな手が、私の目に映った。ちび様のその宣言に苦しげに息をするシムさんは頷いて、私たちの背後に見える墓所を指さす。

「ウェイフォン様」

「ああ、わかってる。ウラバ、走れるか？」

「は、はいっ」

その場に縫いつけられたように固まっていた両足をなんとか動かして、影と竜とを見据えながらゆっくりと動くちび様に庇われたまま、私もじりじりと後ろへ下がる。

こちらを静観していた影の長は、私たちが動き出すと同時に再び舞い上がり、こちらに攻撃を仕掛けてきた。影の背後からは黒竜が堪えきれず力任せに尾を振るう。

ふたつの攻撃を剣と法力でいなしながら、ちび様はちらりと背後に目をやった。

「シム、無理すんな。法力の出せない状態じゃ、きついだろ！ お前はウラバと先に行け！」

「いいえ、ウェイフオン様。私は35年前の過ちを正さなければ……」

「シム!？」

苦しげな息の下、シムさんはそうちび様に告げると、突然その小さな身体を思いっきり押した。それにつられて私も後ろへと倒れ込む。

何かにひどく頭をぶつけた私が背後を見れば、そこはもう目指していた白い塔の前だった。これが、墓所――。

私の隣、なんとか受け身をとったちび様が、はっと何かに思い当たったようにその瞳を見開く。そして、顔を歪めてシムさんの名を叫んだ

「やめろっ、シルワールム！」

「私はあの方に自分の悲しみを重ねてしまった。その愚かさの責任を、私は取らねばならないのです、ウェイフオン様」

「俺はそんなこと望んでいないっ」

飛びかかってくる影の切っ先を剣で防ぎながら、シムさんはこちらを見ずに静かに続ける。そちらへ向かおうとするちび様に、竜の炎が襲いかかった。

「くそっ」

「そこから出てはなりません！」

墓所を離れて戦おうとするちび様に、鋭いシムさんの声が飛んだ。それは単にちび様の身を案じるものではなく、一国という重みを背負った王への言葉。びくりと肩を揺らしシムさんを見たちび様に、彼は優しく微笑んでみせる。

そんな余裕があるようには見えない、この時に。

「あなたはウェイフォンなのです。あなたさえいれば、また、国は復興する」

凄絶な、笑みだった。

その言葉がちび様と私に届いた瞬間。目の前が昼間のように明るく照らされ、すべての音が消え去った。とっさに腕で目をかばうが、目を閉じていても瞼ごと焼ききるような強い光を感じる。なにが、起こったの！？

隣にいるはずのちび様を呼ぼうとして、今度は大きな風圧を受け、私は声を喉の奥へと押し戻されてしまった。なに、どうして、これは、わからない！

パニックになりそうな思考から逃れようと叫びだしたいのに、それすらも敵わず、私の叫びは頭の内側にこだまし続ける。

このままでは壊れてしまう。そう考えた私の身体を、誰かが強く引き寄せた。

誰かもわからないままにその腕にすがった私の耳に、轟音が響い

たのはその直後。そうして私の意識は、真っ白い空白の中に飲み込まれて消えた。

誓約と銃剣と

（ごめんなさい）

真っ暗闇の中、その声が私の凧いだ意識にひとつの波紋を呼び起こす。

閉じてないのに、なにも見えない目を、開ける。それは不思議な感覚だった。そうして私は上も下もない、右も左も存在しないその場所で身を起こす。

無意識に探った手に、小銃の慣れた固い感触があたり、ほっと息を吐く。どこにも知る場所や人がいないこの世界で、私を元の居場所とつなぐ唯一のものだから。

（ごめんなさい、末葉）

愛おしく小銃を撫でていた私に、再び小さな呼びかけ。

その声に導かれるように顔を上げると、そこには十代らしき少女が泣き腫らした目をして私を見ていた。どこか、懐かしさを覚えるその顔立ち。

（たすけて）

ぼんやりとそれを見つめていた私に、彼女はぼろぼろと涙をこぼしながら訴える。悲痛なその言葉に戸惑う私に、彼女はさらに重ねて言った。

（可哀想なイグニスを、たすけてあげて……！）

イグニス？

人の名前だろうか。けれど、聞き覚えのないそれに私が首を傾げると、彼女はいよいよ本格的に泣き崩れ、そうしてその身体がうっすらと透け始めた。

驚いて伸ばした私の手は、透明な何か膜のようなもので弾かれる。その瞬間。真っ暗だったその空間が光に包まれ、真っ白になった。少女の姿も何もかもが消え、飲み込まれる、そう恐怖した。そこに――。

「……バっ、ウラバっ!!」

がくがくと強く身体を揺さぶられる感覚に、私の意識は急激に元の場所へと戻っていく。ふわふわと浮いていた身体が、重りをつけられて落つことされたみたい、ひどい気分。

私は小さく呻くと、ようやくうつすらと目を開けた。

「ウラバ、よかった……」

「ちび、様……？」

目を開けたそこにあったのは、暗闇の中で光る青。ちび様の瞳。まだぼやける目を何度かしばたかせていると、いくらかほつとしたような表情のちび様が、私からそっと身を離れた。

その動きにつられるように、私はゆっくりといつの間にか寝かされていた状態から身体を起こす。あちこちに小さな痛みが走るけれど、大きな怪我はないみたい。

無意識に両手を使って身体を点検していた私は、そこで先ほどの

記憶を取り戻した。静かに私の様子をうかがっていたちび様にすがりつく。

「シムさんっ、シムさんはっ！ ティアオも、クワイにガン、隊長がっ！」

「落ち着け、ウラバ」

「だって、血がっ、みんな……っ」

急激に甦ってきた生々しい光景に、知らず身体が震え出す。まるで一気に気温が下がったみたいに、奥歯がかちかちと鳴り、さあつと顔から血の気が失せていくのがわかった。

その私の肩を、ちび様の小さな手が強く掴む。

見れば、彼はひどく静かな表情をしていた。風のない日の湖面のような、そんな青の瞳。

「よく聞け、ウラバ。インゼリアは……焼け落ちた」

「え……？」

「シムが法力を反転させた。あいつの力だったら、あの辺りを巻き込んで吹き飛ばすはずだ。王宮や防壁は古竜のせいできっと壊れちまってる。俺の力じゃ近衛の者達が今どうなっているか……わからねえ」

そう言っ、ちび様はふっと私の後ろに視線を流した。

それを追うようにして振り向けば、今いる森の木々の間から、うつすらと赤い炎が見え隠れしている。ずいぶん遠いけれど、あれは……インゼリア！

暗くてよくは見えないけれど、王宮の周りを囲む森の半分がえぐられたように失われ、そこから煙と炎が立ち上っていた。あまりの光景に、私は言葉を失う。

こんなのは、嘘だ。嘘に決まってる。

「炎がおさまれば、ガナドールが押し寄せる。俺たちは帰ることはできねえ」

「そんな！　だって、あそこには……！」

あそこには、みんながいるんだよ？

倒れた隊長が、傷ついたティアオが、戦っているクワイとガンが。私たちが逃がしてくれたシムさんが、あそこにはいる。

言葉にならない私の訴えに、ちび様はただ静かに首を振った。やめて、否定しないで。

インゼリアから離れたら、ここから離れたら、全部なくなってしまうような気がして、私は恐慌状態に陥った。自分自身を固く抱き締め、耳を塞ぎ、しゃがみこむ。

全部、全部全部、嫌だ。こんなのは、嫌。わからない。間違ってる。どうして。

その私の身体を、ちび様が急に強く抱き締めた。

私の全部を包み込むにはまだ幼い身体は、それでも懸命に私を腕の中へと抱き入れる。なにか、すべての恐ろしいことから守ってくれるように。

小さいけれど固い豆だらけの手のひらが、私の背中を薄いシャツ越しに撫でていくのがわかる。何度も、何度も。

そうしてちび様は、かたくなに耳を押さえつけている私の手をそっと外し、頬を包み込んだ。ゆっくりと合わさった視線の先で、ちび様はひどく切なそうな表情になる。

「ちび、様」

「ウラバ。いいか、俺を見ろ。俺の目を見るんだ」

「や……っ」

目を逸らして自分の中に閉じこもろうとする私を、ちび様は許さ

ずに、もつと顔を近付ける。こつりと、額と額が触れた。すぐそばに、特徴的な縦長の瞳孔。鮮やかな虹彩。

それらが私の、ばらばらになりかけた心をつなぎ合わせていく。

「俺が、守るから。絶対にお前を守るから。必ず、お前を元の世界に帰す。約束する」

低くささやかれた言葉は優しく、力強いものだった。誓約させる、そんな響きが私の涙腺を緩ませる。

ぽろぽろとこぼれ落ちていくそれを、ちび様の唇がそつとすくった。

それは恋だの愛だの、そういうものでは決してなくて、ただひたすらに相手を癒すような行為。言うなれば、兄が妹にするようなそんなものだった。壊れ物に触れるような仕草に、私は身体の力が抜けていくのを感じる。

「俺の前で我慢すんな。好きなだけ、泣け。その代わり、頼むからひとりになろうとすんなよ。抱え込むな。いいな？」

苦しげに問われたその言葉に、私は黙って頷いた。

今までため込んでいたものが、まとわりついていた負の感情が、止まらない涙と一緒に流れ落ちていく。その間ちび様はずっと私の瞼に、目尻に、頬に、そして額に、優しく口づけてくれた。

そして落ち着いた頃合いを感じ取り、頬から手を離すと私の顔を覗き込んで笑う。

「もう、大丈夫だな？」

「はい……。ちび様、ありがとう」

少しだけ笑顔を作った私に、ちび様は大人びた笑みを浮かべて何

かを言おうとして。ぐらり、とその身を私のほうに傾けた。

反射的に差し出した両腕の中に、ちび様が倒れ込む。落ち着いたはずの心が、再びざわりと波を立てた。

「ちび様っ」

ふっとその背を見ると、そこには大きな木片がひとつ、突き刺さっていた。黒髪の間から見える顔が、苦悶に満ちている。

受け止めた手に何かが触れ、呆然としたままそれを見れば、私の手のひらは真っ赤に染まっていた。それは、隊長の身体を受け止めた時に見た――。

「や、だ……っ。いやだっ、ちび様っ、ちび様っ！」

私の呼びかけに、かすかにその眉がぴくりと反応を示す。違う、まだ生きてる！

そのかすかな希望を頼りに、私は再度恐慌に陥ろうとした自分の心を叱咤する。私がここでパニックになったら、ちび様は助からない！

とっさに着ていたシャツを脱ぎ、縦に裂いてちび様の傷口を塞ぐ。そしてそのままぐるぐると身体全体に巻き付け、木片が動いたりしてより深く刺さらないよう、抜け落ちて出血しないように固定する。一刻も早く、刺さっているものを取り除いて止血しなきゃ。

周りを見渡せば、そこはただひたすらに暗い森が続いている。ずいぶん遠くまで飛ばされたのか、ちび様が運んでくれたのかかわからないけれど、インゼリアの人たちが避難している場所ではないみたいだ。

どうしよう。どこへ行けばいいの。

いつもの癖で、私は自分自身を確かめるように、背負った小銃の追い紐を握りしめる。

ちび様を私が抱いて運べないことはないだろう。けれど、傷口を動かさずにそれができるかという点、正直不安だ。

この木片が彼の内部のどこにまで達しているのか、それがわからなければ安易に動かすことはできない。けれど、このままここにいれば必ず事態は悪化する。

焼けつくような焦燥感に、私が叫びだしたい気持ちを必死に抑えていた、そこに。

ぐる、と何かが喉を鳴らす音が聞こえてきた。

はっと辺りを見れば、一定の距離を保った場所にいくつかの光る瞳があるのに気がつく。いつの間にか、何かの動物に取り囲まれている。

腕の中のちび様を強く抱き寄せて、私はその瞳たちと対峙した。右手で素早く腰に括りつけた銃剣を強く引き抜く。血の臭いに誘われた肉食動物？

刃止めされたこれと、小銃しかない私が追い払える相手？なるべくちび様の身体に負担がかからないよう、慎重に私は後ずさる。けれど、後ろはもうさつきみた斜面だ。限界がある。

がさり、がさり、そんな大きな何かが草をかき分ける音がして、そうしてついに私の目の前にそれが姿を現した。

私の何倍もある体躯。全身が固そうな毛に覆われ、暗闇で光って見えたその瞳が鋭くこちらを睨んでいる。大きな手と、それに付随する鋭い爪。

それは、私で言うところの『熊』だった。

どうしよう、どうしたらいいの、どうすれば！

震える体を必死にコントロールしようとしている私に、その仁王立ちの熊はのっそりと近づいて、そして――。

「ウェイ？ それはウェイフォン・インゼルじゃねえのか！」

熊が、しゃべった！

訓練用と日常用は違いますから！

「ウラバちゃん、これうちで採れたククミスとメリザナだよ。持っ
ていきな！」

「いつもありがとうございますっ、リトスさん」

焦げ茶色の毛並みに包まれたリトスさんから、抱えきれないほどの野菜を手渡され、私はちよつとよろめきながらも何とかお礼を口にする。

どこからどう見ても森の熊さんなりトスさんは、けれど口調は豪快なおぼちゃんそのもので「お礼なんていいよ！」と笑いながら、私の背中をどんっと叩いた。い、痛いです。

そうしてお子さんたち——こちらは文句なしに可愛い小熊さんたち——に声をかけ、家へと戻っていく。私はその背にもう一度軽く頭を下げ、子供たちにも手を振った。なんていうか、慣れるもんだなあ、人間て。

抱え込んだ大量の野菜、ククミスとメリザナに目をやって、私は少し苦笑する。ククミスはきゅうりっぽいもので、メリザナはナス。野菜炒めとスープと、あとは何にして食べようかな、なんて考えられるくらいに私はこの場所に落ち着いてきていた。

木の皮でできたカゴをよいしょ、と抱えなおし、私は今生活している自分の部屋へと足を向ける。こんなものんびりとした日常の中にいると、あの出来事は遠い悪夢のように思えて仕方がない。

「お、ウラバじゃねえか。野菜がひとりで歩いてるかと思ったぜ」

ひょいっと私から大量の野菜が入ったカゴを取り上げた人が、そ

う声をかけてくる。見れば、突然現れたのは立派な体軀の熊——デファンスさん。いつものように、気安い笑みを浮かべて私を見下ろした。ただし、私にとってそれはヒグマが牙をむいたに近い感じに見えるんだけど。

今やすっかり慣れたその笑顔に私も笑みを返す。

「デファンスさん！」

「ダンスでいいって。それより、これ部屋に持ってくんだろ」

「ありがとうございます、正直助かりました！」

「これ、リトスだろ。あのおばちゃんは、ウラバじゃこんなに食べきれねえつつつても、よくわかってないみたいなんだよなあ」

「まあでも、私はここで仕事らしい仕事もしてないし、こんな新鮮なもの頂けるだけで嬉しいですよ。私のいたところとここって、ちよつと味覚が似てるとこあるし」

味噌っぽいものがあっただけでも大収穫だ。

今夜はさっそくこれで味噌炒めを作るんだ、と思わず口元をゆるめた私に、デファンス——ダンスさんが吹き出した。

「そりゃあよかったな。ところでウラバ、まだ時間があるならちよつと俺と散歩しないか？」

「はあ。まあ、ちび様のところに行くのは夜ですから、大丈夫ですけど……」

ダンスさんの意図がわからないまま私がそう答えると、彼はまたもや牙をむいて笑い、近くを通った若熊に私の荷物を預けてしまった。

そうしてその肉球ぷにぷにな手で私の手を掴むと、道を外れてどんどんと森の中へと突き進む。森の熊さん……。

一応、若い娘としては男の人に連れられて人気のない場所へ、な

んて真っ先に警戒すべき状況なんだけど、なんていうか……相手が熊なもんで。ある意味警戒心はあるが、そういう方向性でのアンテナが働かないっていうか。

少し固めの毛並みに、簡素な麦色のシャツ、そして茶色のズボン。そこから下げられた大きめの鞆。靴はさすがに履いていないが、二足歩行。時々頭の上の丸い耳がぴこぴこ動く様は、ちょっとたまらない。

日本にいた時には想像もしなかったけどね、しゃべる熊さん。服を着た熊さん。ああ、携帯があればなあ……。

そういえば、相馬原の訓練場にも時々熊が出たとかいってたっけ。あれはツキノワグマだけど。まあなんというか、縁だよね、縁。

なんてのんびりと考えていたら、突然デンスさんが足を止めたので、私はそのままその身体にぼふり、とぶつかった。さすがに鍛えられた熊さんの身体は痛い。

「で、デンスさん？」

「着いたぞ、ウラバ」

赤くなっているだろう鼻を押さえながらデンスさんを見上げると、彼はその黒い瞳を優しくゆるめ、握っているのと反対の手で前を指さした。その爪の指す方向を見た私は、思わず歓声を上げる。

「綺麗……！」

里から離れた森の奥、突然開けたその空間に広がっていたのは、色とりどりの花畑。まるで誰かが丹誠込めて作り上げた箱庭のような、美しい場所だった。

近くに沢でもあるのか、かすかに清涼な水音も聞こえる。

ひとつひとつは豪華な花ではないけれど、ときおり森を流れる風にふわりと柔らかく揺れる様は、私の心にずっと染みこんできた。

何だか、涙ぐんでしまうほど。

そんな私の背を、デンスさんがそっと押す。

「昼飯まだだろう。簡単なもの持ってきてんだ、よければここで食おうぜ」

「あ、ありがとうございますっ」

そう言って先に花畑に入っていくデンスさん。涙目になった私に気を遣ってくれたんだろうか。私は慌てて目尻に滲んだそれを拭って、あとに続いた。

なんだか踏みつけてしまうのが勿体なくて、もたもたと花畑を進む私に、デンスさんは少し立ち止まってその手を差し出す。

「そんなに恐れなくても、こういう野草は踏まれても意外と強いんだぜ？」

そう言いながら、差し出された手を掴んだ私の身体をふわっと持ち上げると、そのまま数歩歩いて花の真ん中へと降ろしてくれた。なんていうか、人生初のお姫様扱い!?

それなりに筋肉もあって、標準よりは確実に重いだろう私を抱えても、その身体はびくともしなかった。さすが、熊!

少し赤くなった顔をそらしつつお礼を言うと、デンスさんはますますご機嫌になった。そして、下げていた大振りの鞆から布を取りだして畑に引くと、私にその上に座るように指示する。おおっと、本日二度目のお姫様扱い!

職業柄いつもなら、草の汁が尻につこうがまったく関係なしの私だけれど、そういえば今着ている衣装は借り物なんだった。

この里の女性が身につける、民族衣装みたいなもの。なんとなく着物みたいにも見えるけれど、袖は洋服のようにしぼんでいて、手首のところだけが少しふわりと広がっている。布を重ね、それを胸

の下で帯を使って止め、そのままロングスカートのように足首まで流す。帯のあまり部分も一緒に垂らしているので、優雅なことこの上ないんだけど、久しぶりのスカート感覚になんとなく慣れないでいたりする。

迷彩服から着替えても、インゼリアではズボンだったしなあ。なんて、布の上に腰を下ろしながらぼんやりと考えていた私に、デンスさんがこれまた布に包まれたものを差し出した。

「パナーラだ。ここいらじゃ、農作業の間によく食べるんだけどな」
「パナーラ……」

デンスさんの説明に、少しわくわくしながら包みを開けると、出てきたのは美味しそうなハンバーガーっぽいものだった。肉挟みパン万歳っ。

その嬉しさが表情にばっちり出ていたのか、私が何か言う前にデンスさんは大きな笑い声を立てた。

「喜んでもらえたようで、よかったよ。ウラバは人の月から来たって言うもんだから、俺らの食いもんで大丈夫なのか、最初はわかんなかったからなあ」

「さっきも言ったとおり、ここは私のいたところと似てるみたいですよ」

デンスさんが言う『人の月』っていうのは、前にティアオに教えてもらった三つの月のひとつ。私のようにこことは明らかに違う場所からやってきた人は、あの月から来たって思うのがここの考えみたい。

つまりは私以外にもちらほらそういう存在があるってことで、つながっているならこちらからむこうに戻る確率もゼロじゃないってこと。それがわかったただけでも、ほっとする。

『必ず、お前を元の世界に帰す。約束する』

そんなことを考えていた私の脳裏に、あの日のちび様の言葉が不意に甦ってきた。抱き締めてくれた温かく小さな身体。瞼に目尻に額に頬に、優しく触れた唇の乾いた感触。

そのちび様は今、深い眠りにについている。あれからもう、ひと月になるんだ。

みんなと別れ、インゼリアが焼け落ち、そうして懸命に慰めてくれていたちび様までも失いかけたあの日。私は、目の前で大きな口を開けているこの熊さん——熊族の若長デファンスさんと出会ったんだ——。

「ウェイ？ それはウェイフォン・インゼルじゃねえのか！」

警戒心と危機感が最高潮に達していた私に、目の前にのっそりと姿を現した大きなヒグマはそう言って目を丸くした。熊なのに、熊なのに、しゃべった！

思わずあんぐりと口を開けて固まる私に、その熊はのしのしとその巨体を揺らし、近づいてくる。

木々の間から差し込む月の光と、遠くで燃え落ちていくインゼリアの炎に照らし出されたその姿は、さらに私の驚きを誘う。だって、熊が二足歩行まではあり得るとして、なんで洋服着ちゃってるの！？

胸元をゆるく紐で結んだ簡素なシャツに、茶色の着古されたズボン。それを身につけている身体は確かに熊の、少しごわごわとして見える黒に近い茶色の毛並み。意外とつぶらな黒色の瞳がなんとなくびっくりしたように、私たち二人を見つめていた。

ぬっと伸ばされた鋭い爪のついた手に、私は我に返り身を固くする。腕の中のちび様を自分の方に引き寄せて、震える手に握っていた銃剣を前に突き出す。

「こっ、来ないで！」

「おっと」

私のその行動に、素早く手を引いたしゃべる熊は、一定に距離をとると困ったように首を傾げて見せた。か、可愛いとか思っていないよ、多分。

それから、熊はふんふんと辺りをうかがうように鼻をひくひくと動かす。

「血の臭いか。お嬢ちゃん、もしかしてそこで寝ちまつてる奴、怪我をしてるんじゃないのか？ だったら悪いようにはしない。それを収めてくれ」

落ち着いた低い声で、人懐っこく熊はそんなことを言う。

私は右手で銃剣を突き出したまま、一瞬だけ視線をちび様へと落とした。その顔はどんどん血の気を失い、白く変貌していく。時間がない。

そして私はもう一度わずかな明かりの中で光る、そのしゃべる熊の瞳をじっと見つめた。

黒く、身体の割には小さなその瞳の中には、少しの焦りと心配そうな光。しばらくそうしてにらみ合い、それから私は右手をゆっくりと降ろし、全身の力を抜いた。

それを見て取った熊が、再びゆっくりと私たちに近づいてくる。気は抜けないけれど、賭けてみるしかない。

ここで殺されなくても、私ひとりじゃあちび様を守りきれない。情けないけど、今はそれが現実だった。

「こりゃあひでえな。どんな力でぶっ刺さったんだか、深いところまで入っちゃってる」

「た、助かりますかっ。ちび様、死んだりしませんよね!？」

「ちび様ってこたあ、やっぱりウェイなんだな？」

確認するように訊かれたその名前に、私は戸惑いながらも頷く。

もしかしてこの人たちがガナドル側だったら、私とちび様がこのあとどんな扱いを受けるかわからない。いい方向にいくってことは、絶対ないだろうことだけはわかるけど。

私のその警戒心を的確に読みとって、しゃべる熊さんはいっと笑って見せた。牙むき出しで、大変に安心感のない笑顔だけれど。

「俺たちはミーメの里のもんだ。どうもインゼリアによくないことが起こってるらしいってんで、斥候隊をまとめて来た。ミーメはインゼリアと縁深い。だから、ウェイもお嬢ちゃんも悪いようにはしねえって」

「ミーメ……?」

「ここのもんじゃないのか? その服装はインゼリアのもんだと思ったが……まあいい。まずはこいつの治療だ」

探るように見つめてきたその瞳がちび様の背に落とされ、鋭い爪のある分厚い手のひらがそこに触れる。意識がない中、ちび様はそれに呻いて顔をしかめた。

熊さんはその様子に頷くと、固定していたシャツの残骸を取り除きながら、背後でこちらを窺っている仲間たちに指示を出す。

「おい、ダーティ! 紫草^{しそう}を出せ!」

名前を呼ばれた仲間の熊さんが、素早く腰に下げられたシザーバ

ツクのようなものから、紫色に染まった草らしきものを取り出しこちらに差し出した。

しゃべる熊さんはそれを受け取り、口の中に放り込んで四、五回噛み締めると、それをちび様の背中への傷へと押し当てた。

じゅっという嫌な音が小さく響き、ちび様の喉からひどく辛そうな呻き声もれる。力無く私の肩に回っていた腕に、力がこもる。

それにかまわず、熊さんはその草を押し当てながらゆっくりと刺さっていた木片を引き抜いた。その瞬間、びくりとちび様の小さな身体が緊張し、その手が痛いくらいに私の背中を掴んだ。声にならない声が放たれ、そうして次の瞬間身体は力を失い、私へと倒れ込む。

「ちび様っ」

「とりあえずこれで保つ。あとは、里に行ってからじゃねえと、何もできん」

大きく息を吐いて、熊さんは泣きそうになっている私を見た。自分が今どんな顔をしているかなんて気にもしていなかったけれど、どうもよっぱどひどい顔だったらしい。熊さんはその毛皮に包まれた手をそっと、私の頭に乗せた。そしてぼんぼん、と軽く宥めるように叩く。

「大丈夫だ、心配すんなって。こいつはこの程度じゃ死なねえよ。仮にも『ウェイフォン』の名を継いでんだからな」

熊さんはそれだけ言うと、私の身体からちび様の身体を離し、抱きかかえて立ち上がった。釣られるようにして私も立つ。もう何年も立ち上がってなかったかのように、膝が震えてよろけてしまった。その私を身体で受け止めてくれた熊さんが再び仲間に目配せをすると、さっきダーティと呼ばれた熊さんがやってきて、私に背を向

けてしゃがむ。えええ？

きょんとしゃべる熊さんを見上げれば、「里はここから遠い。おぶされ」とだけ言う。熊におんぶしてもらうなんて、どういふことなの！

なんて思いつつも、この膝じゃあついていけるかわからないと、ここは素直に熊さんたちの言うことを聞くことにする。そうして恐る恐るその背に乗った私は、思いがけない暖かさによろやく安堵の息を吐いた。

その私の背に、今度は別の熊さんがさつとマントのような布をかけてくれる。

「あの、寒くはないですよ？」

私が歩くのとは比べものにならない速度で移動を始めた熊さんたち。私はしゃべる熊さんに遠慮がちにマントのことを伝える。すると、ちび様を抱えたままで熊さんは器用にウインクして見せた。

「だってよお、そんな格好さらしとくのは、もったいねえだろう？」

その言葉に私は、着ていたシャツはさっき引き裂いて使ってしまったことを思い出す。慌てて自分の今の格好を見下ろし、そして思いつき悲鳴を上げてしまった。上半身ブラのみって、どこの変態だ！

ちがあああうっ！ これは訓練用のスポブラであって、いつもはもっと可愛いふりふりなんだよおおっ！

との私の心の叫びは、もちろん熊さんたちには届かなかったのである。

回想と前足あげ蹴りと

そうしてしゃべる熊さんたちに連れてこられたのは、深い森のさ
らに奥にある小さな集落——ミーメと呼ばれる里だった。

たどり着いたのはもう、空がうつすらと紫色を帯びて明け始める
時間帯。それでも、そんな時間に関わらず、村人さんたちは色々と
準備をして待っていてくれたらしい。しゃべる熊さんが先触れを出
してくれていたんだ、とその時初めて気がつく。村人たちは熊さん
に抱えられたちび様を見ると、一様にその大きな身体を震わせ、一
瞬瞳を伏せた。それは何か大きな存在に対して恐れ敬うかのような
仕草。

「巫女様は？」

「もう準備を整えていらっしやる。血の汚れを落として木屋へ」

「わかった」

短く交わされる言葉はわかるが、それが指す意味や内容まではわ
からない。それは私が別の場所からやってきたからなのか、それと
も彼らの独特な文化なのか、判断はつかなかった。ただ、ちび様を
害するわけではなく、助けようとしてくれていることだけは雰囲気
から読みとれて、私は少しほっとして息を吐く。

すると、その気配を感じたからか、しゃべる熊さんと話していた
どこか高貴な雰囲気のある熊さんがこちらを振り向いた。

「あなたはウェイフオン様の乙女か？」

「あ、え、ええとその……多分そう、です」

突然のその問いに、いまだダーティさんに負ぶわれたままだった私は慌てて背から降りる。そして、背筋を伸ばして曖昧に答えた。

『緑の乙女』——インゼリアの人たちにはそう認知されてはいたけれど、果たして正式な立場として答えてしまっているのか、迷った挙げ句に私は頷く。

今はこちらの事情を長々と説明している暇はないだろう。誤解があるなら、あとでいくらでも謝ってもいい。とにかく今は、ちび様を。

そのもどかしい思いが伝わったのか、高貴な雰囲気その熊さんは、私を安心させるかのように大きく頷いてみせる。

「そう不安がられるな。ウェイフオン様の魔は必ず我らが払いますゆえ」

やはり言われた言葉の意味は正確に理解できないけれど、とりあえずちび様の怪我のことを言っているのだということだけはわかる。真摯なその黒い瞳に、私は小さく答えた。

「お願い、します」

「乙女にも協力して頂きたいことがある。お召し替えののち、木屋へ」

彼のその言葉に、背後からふたりの女性……と言っているんだろ
うか、独特の民族衣装を身にまとった熊さんたちが私へと近づいてきた。

見た目から年齢を推し量るのは難しいが、なんとなく若いような
気もする。柔らかなような布を何枚か重ねた衣装は、どこことなく着物
のよう。周りを見れば、女性と思われる熊さんたちはみんなそれを
身につけている。

ただ、目の前の二人のそれは普通の村人たちよりも、もう少しだ

け特別そうに見えた。

「どうぞ、こちらへ」

「ご案内致します」

そう言われて恭しく頭を下げられた私は戸惑い、思わずちび様を抱えている熊さんを振り返った。さっきの感じからして、ここでは偉い部類の人だと思っただけ。

すると彼は少し目を細め、微笑んだようだった。熊だから、細かい表情まではわからないけど。

「大丈夫だ。俺たちはお前を傷つけない」

「……はい。ちび様を、よろしく願います」

「おう！」

牙をむくようにして口を大きく釣り上げたのは、笑顔、なのだろうか。

ちよつとその獰猛さに引きつつ、私は彼にむかって頭を下げると、目の前で静かに待っている熊ちゃんたちにも同じようにする。私は彼らに頼るしかないんだ。

この先何が待っているかわからないし、私に何ができるのかも知れないけれど、それでも私はちび様を失うわけにはいかないから。

「行きます」

顔を上げた私に彼女たちも軽く頭を下げ、先に立って歩き出した。最後にちらりと意識のないちび様を振り返り、そして私はそのあとを追う。今私にできることをするために。

「……ラバ！　ウラバ、どうした？」

思いの外近くから聞こえてきたその声に、私は思わず小さな悲鳴を上げてのけ反ってしまう。傾いたその身体を、その声の主であるデンスさんがひょいっと受け止めた。

背中に柔らかな肉球の感触。強い力でぐいっと抱き寄せられた私は、今度はそのもふもふとした腕の中に抱え込まれてしまった。

「で、デンスさん！？」

「ぼうっとして、呼んでも答えねえから心配したぜ？」

そっと肩に移動したその手が、より近くへと私の身体を引き寄せる。相手が熊さんじゃなかったら、ちよっとドキドキする展開だ。いや、相手が熊さんでもドキドキはするけど！

覗き込むように近付けられたその顔に、私は慌てて首を振った。

「ああああの、ちよっとちび様のことが気になりました！」

「ちよっと疲れてるんじゃないかねえのか？　夜はずっとウェイのところ」
に詰めてるんだろ？　乙女しかできないつつつても、限度ってもんがある」

目の下の隈ひどいぞ、と爪を引っ込めた状態の手がそっと頬を撫でた。猫の肉球がたまらなく好きな私としては、なんて美味しいシチュエーション！とか思わないでもないが、相手は成人男性だ。…多分ね。

「ね、寝ないで見張りをするのは慣れてるから大丈夫です！　私、

もといった所では軍隊……っぽいことをやってたんで！」

「そうは言っても、ここひと月ずっとだろう」

そう、そうなんだ。

あれからずっと、ちび様は眠ったままでもまだ目覚める気配がない。

あのあと熊ちゃんたち——アモンドさんとノワゼットさんに連れられ、ちょっとしたお屋敷に案内されたかと思えば衣服をはぎ取られ、驚く間もなく水風呂に放り込まれるという、よくわからない状況へと追いやられてしまった。

それから抗議する間もなく髪や身体を洗われた私は、今度はふたりの着ているのと似た衣装に着せ替えられ、ようやくちび様の所へと案内された。

そこにいたのが、最初に高貴な雰囲気熊さん——ゼンゼロさんの言っていた巫女様。

あきらかにここの人たちとは違う、どちらかというと人に近い容姿をしたお婆ちゃん。だけど、人よりはるかに小さな身体をして、綺麗に結われた白髪からのぞく耳は異様に長かった。それは、おとぎ話に出てくる妖精のような。

その巫女様はしわの中に埋もれてしまった瞳をこちらに向け、しばらくじっと私を見詰めると、静かに言ったのだ。

『魔を払うため、夜は乙女が王の傍につくように』と。

それから一ヶ月——こちらでは24日にあたる——、私は昼に仮眠を取って夜は木屋と呼ばれる場所で、ちび様につきつきりとなっているのである。

警衛勤務や野外訓練なんかで、そういう不規則な生活には慣れているけれど、確かにこんなに長いこと続くと少しは疲れがたまる。日中だって食事を作ったりするのに、ここでは日本みたいにカチツとコンロで火を点けてってわけにもいかないし。だって、コンロどころじゃなくかまどだよ、かまど！

火は種火を燃やしておくから問題ないとしても、まず薪を割ってかまどに敷いて、そこに火を入れて……って。お茶を飲むのも楽じゃない。

おかげで自衛官していても身に付かないようなことを、色々勉強させてもらったけど。固形燃料と百円ライターが懐かしい！

「ウラバ？」

またもやデンスさんを見無視して回想に浸っていた私は、本格的に「大丈夫かこいつ」みたいな声を出した彼に、私はなんとか笑ってみせる。誤魔化す、ともいう。

「あー、でも、デンスさんが色々とよくしてくれますし。薪割りから何から力仕事してもらって……。お忙しいのに、すみません」

「俺のことはいいって。若長^{わかおさ}なんつっても、頼られるのは狩りの時くらいで、あとは畑をひやかして歩いてるだけだからよ」

「それでも、助かります。本当に、ありがとうございます」

こちらに気負わせない彼の気遣いに、私は改めて頭を下げた。この人が――若長であるデンスさんがあそこに来なければ、私もちび様もどうなっていたかわからない。

少なくともちび様はあのままじゃ危険なことになっていただろうし、その彼を連れて私が逃げ込める場所なんてない。一時逃げられたとしても、すぐにインゼリアを攻めたガナドルに捕らえられていただろう。

インゼリアは落ちた。

その話は、デンスさんが落ち着いた頃を見計らって私に教えてくれた事実だった。

破壊され焼けたのは王宮のみで、城下はそれほど被害を受けなかったけれど、インゼリアのひとたちはみんな散り散りになってしま

っているらしい。

ただ、インゼリアには現在、ガナドル帝国軍が駐留し国内に入ることはできない。この話は、リングと呼ばれる獣人^{けものびと}から情報^{タルバ}。土族^{リング}という、情報売り買いする種族から買った話なので一応信用できるだろう、というのがデンスさんの談だった。

この村に暮らす熊さんたちのような種族を、人は『獣人^{けものびと}』と呼び、自らは『リング』と呼ぶ。色々な種族があり、デンスさんたちはその中で『熊族^{ベアルリング}』という種族。

森の奥に住み、畑仕事をして外界とは積極的には関わらず、穏やかに暮らすことが多いそう。狩りもするけどむしろ肉よりも野菜や果物なんかを主食としている。その外見からは意外にも思えるけど、穏やかな人……じゃなくて熊さんたちなんだ。

村の人たちはみんな、よそ者の私にとってもよくしてくれている。

私は何も返せないのに。

「よせよ、俺がしたくてしてんだ。頭なんか下げんなよ」

「でも……」

「まあ、どうしてもウラバが俺に報いたいっつんなら、口付けのひとつでもくれればいいぜ？」

「ええっ」

どこことなく甘く囁かれたその言葉に、肩を抱かれたままの私は身を引こうとするが、置かれた手がそれを許さない。反対にさらに近付けられた顔に、私は真っ赤になって横を向く。すると、その隙をつくようにべろり、と耳を舐められた。

「ひゃあっ」

なんとも言えないその感覚に身震いすると、デンスさんが喉の奥で低く笑ったのが聞こえた。か、からかわれた!?

むっとした私は両手を使ってその鼻先をぐっと押す。デンスさんはそれ以上無理をするつもりはないらしく、あっさりと私の身体を離れた。

「からかうのはやめてください！」

「からかってなんかいいえって。あんたを可愛く思ってるのは本当さ。ただ、ウェイのいない間に手を出すのは反則かなと思ってよ」

「また！」

耳を押さえて真っ赤になった私を見て、デンスさんは何だか嬉しそうに笑った。そして立ち上がり、私にむかって肉球のついたその手を差し伸べた。

「んなに睨むなよ。ほら、そろそろ帰ろうぜ。ちったあ、眠らなくちゃ身体に悪いだろ」

「誰かさんのお陰で眠気もふっとんだ気がしますけど！」

渋々その手に掴まって立ち上がり、私はずいぶん上にあるデンスさんの顔を睨み付けた。なのに、何でそんなに楽しそうに笑うかなあ！？

浦安にいるあの、黄色いハチミツ大好きな何かみたいだと、油断した私も悪かったと思うけど！

ここへ来た時と同じように軽々と私の身体を抱き上げて、デンスさんは私にばかり、と可愛らしく片目をつぶって見せた。

「俺のこと考えて眠れねえなんて、殺し文句だな」

「言っていない！ そんなこと言っていない！」

「今度は寝酒を差し入れてやつから」

「それはすごく嬉しいけど、言ってませんからね！」

「はいはい」

花畑を抜けて私の身体を降ろす時、するつと尻を撫でていったその手に徒手格闘で鍛えた蹴りをかましながら、私はひたすらに願う。ちび様、早く目を覚まして！と――。

約束と竜と目覚め

そんなことがあったせいか、うまく仮眠を取ることができなかった私は、時間よりも早くに身支度を住ませて木屋へと足を運んだ。すでに顔見知りになっている門番さんに挨拶をして門をくぐり、目の前に現れる急勾配な階段を登る。この木屋と呼ばれる建物だけが、日本でいうところの高床式住居、みたいな造りになっている。草で編まれたすだれを手でよけ、私は明かりのない薄暗い室内へと足を踏み入れた。

「末葉です。魔払いに来ました」

膝をつき、手を前について少しぎこちないお辞儀をする。こういうやり方は、こちらにも変わりないみたいで、少し不思議な感じがする。

そして顔を上げ、部屋の中央を見る。籐のようなものでできた寝床に、横たわっている小さな身体。あれからひと月。それは深い眠りについたまま、未だに目を醒まさないちび様の姿だった。

その枕元でお香のようなものを炊き、じっと座っていた巫女様がゆっくりとした動作で立ち上がる。

「禊ぎは済ませて来たかい」

「はい。いつも通りに」

座ったままでそう答える私と、そう変わらない目線で巫女様はひとつ頷くと、そのまま無言で部屋をあとにする。

残された私は、今まで巫女様の座っていた場所に移動すると、傍

にあったお香を入れ物に継ぎ足した。ふわり、と白い煙とともに
んとも言えない香りが部屋に満ちる。

それは決して不快なものではなく、なんとなく懐かしさすら覚え
る香りだった。そうして、私はぴくりとも動かないちび様の顔を見
つめる。

健康そうに焼けていた肌が、今は少し白く見える。整っている顔
立ち、動かないままどこか人形めいていて、怖い。髪と同じ
黒色の睫毛が縁取る瞳は、固く閉ざされたまま。乾いてしまった唇
に、私はそつと持ってきた蜜をリップ代わりに塗ってやる。

こんな風に、飲まず食わずでどのくらい無事にいられるんだろう
か。

背中への傷は一週間もかからずに、魔法のようにふさがって綺麗に
治ってしまったというのに、意識だけが戻らない。デンスさんやゼ
ンゼロさん、不思議な巫女様にいくら尋ねても首を振るばかり。そ
れは誰にもわからないことらしい。

私にできることなんて、何もなくて。ただただ、こうして毎晩ち
び様の顔を見つめ続けている。

部屋の隅に立ってかけられている小銃に目をやり、私は大きなため
息をついた。なんだか、ついこの間のことみたいに思えるのにな。
私がいなくなって、みんなどうしているだろう。

二戸三曹はちゃんと探してくれてるのかな。あの憎たらしくも懐
かしい顔を思い浮かべ、少しだけ笑う。

あの時はただ持っていやすいから、なくしたら困るから、そんな
気持ちだけで持ち出した小銃と銃剣だけど、今は心の底からあって
よかったと思う。

これがなかったら、私はとくに自分の正気を疑っていたかもしれ
ない。自分が別の場所からやってきた人間だなんて、自分の妄想
なんじゃないかと思ったかもしれない。

私と、私の世界を繋ぐ、唯一のもの。

これから先、どんなことがあっても離さない。必ず帰るんだ。ち

び様と約束したんだから。

「だから、早く目を覚ましてよ、ちび様……」

呟いたその言葉は、誰もいない部屋にこつんと音を立てて落ちる。この時間はひどく寂しく、切なく、長い。明日はあの大量の野菜をどうやって料理しようか、そんなことを考えているうちに、私は少しくとうとしてしまっていたらしい。

ふっと鼻先を風が通りすぎる感触に、はっと目を開けた。すっかり闇に満ちた部屋の中、私と意識のないちび様しかないその空間で、空気がそろりと動くのが感じられる。とっさに私はちび様を自分の胸へと抱き寄せて、闇に慣れない目を凝らして入り口のほうを睨み付けた。

「……誰、ですか」

迷った挙げ句、声をかける。

私がここにいる間は、村の人たちも巫女様も部屋には近づかない決まりだ。緊張に、手のひらに汗が滲んでいくのがわかる。何かよくないことが起きるのであれば、こちらから行動を起こしたほうが動きやすい。

いくばくかの沈黙のあと、闇の中、その何者かが静かに口を開いた。

「その者は、死んだほうがよい」

ずるりと吐き出されたその言葉に、私は目を見開いた。

徐々に慣れていく瞳に、その誰かの影がはっきりと見えてくる。背の高い、多少がっしりとした体つき。けれど無骨なのではなく、どこことなく優美なように感じるのは、必要以上に筋肉がついていな

いせいかもしれない。

暗闇に紛れるような濃紺の衣装。足下までゆったりと流れるような、まるで物語に出てくる王様のような出で立ち。その衣装と同じように、こちらをじっと見つめている瞳もまた濃紺だった。少ない光源に、きらりと濡れたその瞳が光る。

すうっと差し出された手が、私の胸に抱かれたちび様を指さした。その動きに、首に沿うようにして流れていた黒の髪が揺れる。

「その者は、ここで死んだほうが幸せなのだ」

ゆっくりと繰り返された言葉に、私は無意識に奥歯を噛み締めた。この人が何者かはわからない。けれど、そんなこと、今ここで言うってほしくない！

私は震える声を抑え付けるように、低く反論する。

「どうして、そんなこと言うんですか……！」

「その者は自らが王であることに疑いを持っている。その迷いを持つたまま国を潰した」

「え……？」

私の言葉なんか意にも返さず、その人は続ける。

ふわり、と風で入り口のすだれが少し揺れ、外から入った月明かりにその顔が半分照らし出された。

男性的に整った顔立ち。どこかで見たような、何か懐かしさを感じるその顔が、無表情にちび様を断罪する。

「自らが王であると確信が持てぬから、簡単に国を捨てた。臣を犠牲にし、民を捨てた。罪は、購わなければならない」

「そんな！」

その何の感情もこもらない厳しい言葉に、私は反射的に声を上げる。そんなこと、ない。ちび様は国を捨てたわけじゃないのに！

あの時、事前に最悪の予想をしてインゼリアの人たちを逃がす手筈を整えていたし、私の安全だって考えてくれてた。撤退すると決めたのだって、あれ以上の被害を出さないため、私やシムさんのことを考えてのことだった。

自らを犠牲にしたシムさんの名を、ちび様は血の滲むような、そんな声で呼んでいた。

それなのに！

「ちび様は……ウエイフオン様は、きちんと責任を負って一所懸命にやってきました！ あの時だって、国よりも人の命を優先したから、そっちのほうが大事だったから撤退を選んだんです！ 私がいたから……！」

「ならばなぜ目覚めぬ」

その問いに、私は言葉を詰まらせた。

胸元に抱き寄せた身体は、少しも反応しないけれど、温もりを失ってはいない。緩慢な動きだけれども、鼓動はしっかりと脈打っている。

生きている——けれど。

「竜族にとって、そのような傷は命に関わるものではない。なのに目を覚まさぬのは、この者が心の底で死を望んでいるからだ。王である責から、逃れたいとおもっているからなのだ」

私は絶句する。

インゼリアに来てそう長くはなかった時間、私が遠くから見ているたちび様は、そんな迷いを微塵も表に出していなかった。みんなから慕われ、頼られ、立派に王様として仕事をこなしていた。少なく

とも、私の目にはそう映っていた。

けれど今、こうして抱き寄せた彼の肩の小ささに、私は悲しみを感ずる。

ここに乗せるには大きすぎる責任が、命が、確かにある。家族もいなくて、シムさんや隊長たちがいても、きつとひとりぼっちだったはずのちび様。

いつも余裕のあるような振る舞いをして、インゼリアが落ちたあの日も、自分のことよりも私のことを気遣ってくれた。

その彼が、本当はその心の中で何を考えていたのかなんて。

あの黒竜を『兄上』と苦しげに呼んだ、そこにこの人が指摘する『迷い』の根元があるんだろうか。それでも、と私は小さく呟いた。そして再び顔を上げ、目の前に立つ人の青い瞳をしっかりと見つめる。

「それでも、ちび様は約束してくれました。必ず私を元の場所に帰してくれるって」

それが今のこの状況下で、どんな我が儘に聞こえてもかまわなかった。

自分勝手な物言いだった。迷っている、そのちび様にはさらに重くのしかかる責任を、私は負わせようとしているのかもしれない。けれどこれが、今はこれだけが私とちび様をつないでいるものだから。

だから。

「私は、ちび様に生きていて欲しい」

目を、開けて欲しい。ただそれだけ。それじゃあ、この小さくて切れそうな約束だけじゃあ、駄目なの？

そう問いかけるように、挑むようにその人を見れば、それまで厳

しい瞳を向けていたその顔がふとゆるんだ。今までの無表情が嘘のように、慈愛に満ちた笑みが広がる。

それは誰かに似ているような気がして、私がもう一度あなたは誰なのかと問うよりも先に、その人が口を開いた。

「君ならば、その者の翼になれるだろう」

言葉の意味を問い返そうとしたとたん、部屋の中に突然の風が吹き荒れた。

小さく悲鳴を上げて、私は顔を伏せる。ちび様を抱き寄せた腕に力を入れ、何が起こったのかと薄く目を開き、前を見た。そこに。

「……竜!？」

吹き荒れる風の中、そこに佇んでいたのは、美しい緑の竜だった。宝石のような青い瞳が、優しく意識のないちび様を見つめる。それからいつそう強く風を巻き起こすと、次に私が目を開けた時、その姿は幻だったかのようにそこから消えていた。

私はしばらく呆然としたまま、動けない。

風によって端に飛ばされた掛け布と、火の消えてしまった香炉が、今の出来事が私の夢ではないと証明してくれていた。

ふ、と耳に何かの声が聞こえ、私は辺りを見回す。気のせい？

すると、今度ははっきりとしたうめき声が腕の中から聞こえ、私はびくりと身体を揺らして腕の中を見た。

「ちび様!？」

見れば、今の今までぴくりとも動かなかった眉がひそめられ、その唇からは判然としないうめき声がもれている。意識が、戻った! 喜びに震える手で、瞼にかかっていた前髪をそつとどけてやると、

そこがひくりと動いてゆっくりと持ち上がる。その下から、不思議な虹彩の、青の瞳が。

何もかもがいったんに起きすぎて、私はただじっとそれを見つめることしかできない。

始めは茫洋と辺りをさまよっていたその瞳は、見つめ続ける私に気がつき、急速に焦点を合わせていく。しっかりとして光が宿り、そして――。

「ウラ、バ……?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9082w/>

ちび王様と自衛官な私

2012年1月10日01時48分発行